刀何理遺跡

南加賀道路（粟津ルート）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006.3.
石川県小松市教育委員会

例　言

1．本書は石川県小松市内において石川県教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．対象となった埋蔵文化財は、南加賀道路（粟津ルート）道路改良事業（いしかわ広域交流幹線軸道路整備工事）に伴って実施された「刀何理遺跡」である。
3．発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、石川県の委託を受け、小松市教育委員会が実施した。
4．発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。発掘調査は、発掘調査臨時作業員を雇用するとともに(社)小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けた。

【刀何理遺跡】
［調査地］　　石川県小松市矢田町ソの部46～48、54～56、62～64
［調査面積］　　本調査　3,900㎡
［調査期間と担当者］
◎平成16年7月26日～12月22日
（Ⅰ区2,000㎡の本調査及びⅡ区1,900㎡の遺構掘削まで）　　下濱貴子、廣田いずみ
◎平成17年5月23日～6月29日（Ⅱ区1,900㎡の残りの作業）　　廣田いずみ、宮田明

5．刀何理遺跡の遺構の測量については、現地においては測量補佐に発掘調査臨時作業員があたった。空中写真測量を株式会社ＧＩＳ北陸及び株式会社太陽測地社に委託した。
6．出土品整理及び遺物実測・製図については、出土品整理臨時作業員を雇用し、下濱、廣田、宮田、西田由美子が担当した。なお、石器の実測については、株式会社パスコに委託した。
7．本報告書の編集・執筆は廣田、西田が担当した。執筆分担は、第1章から第2章が廣田、第3章が廣田・西田、第4章が西田、第5章が廣田である。
8．写真撮影は、遺構を上記調査担当者が実施し、遺物写真を廣田が担当した。また、空中写真は株式会社ＧＩＳ北陸及び株式会社太陽測地社に委託した。
9．本書で示す方位は全て真北であり、水平基準は海抜高(m)で示した。
10．本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図・写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
11．本報告書作成にあたり、以下の方よりご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略、五十音順）
木立雅朗、北野博司、菱田哲郎、藤原 学、渡辺 一

目　次

例言

第１章　位置と環境……（廣田いずみ）…… 1
　第１節　地理的環境と立地 …… 1
　第２節　周辺の遺跡の概要 …… 2

第２章　調査の経緯と経過……（廣田いずみ）…… 6
　第１節　調査にいたるまでの経緯 …… 6
　第２節　本調査の概要 …… 7

第３章　遺構……（廣田いずみ・西田由美子）…… 11
　第１節　遺構の分布状況と概要 …… 11
　第２節　検出された遺構 …… 11

第４章　遺物……（西田由美子）…… 53
　第１節　遺物の出土・分布状況 …… 53
　第２節　出土遺物 …… 54

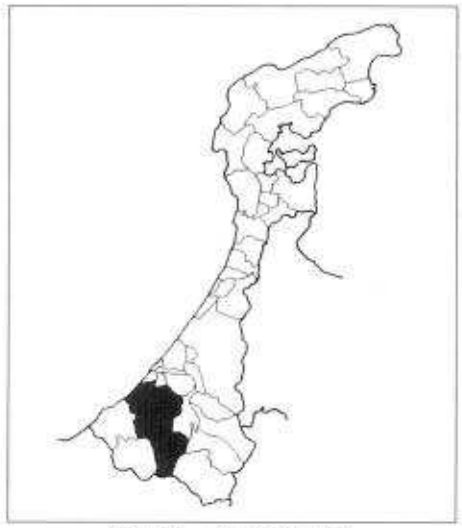
第５章　まとめ……（廣田いずみ）…… 67

遺構・遺物写真 …… 69

第１章　　位置と環境

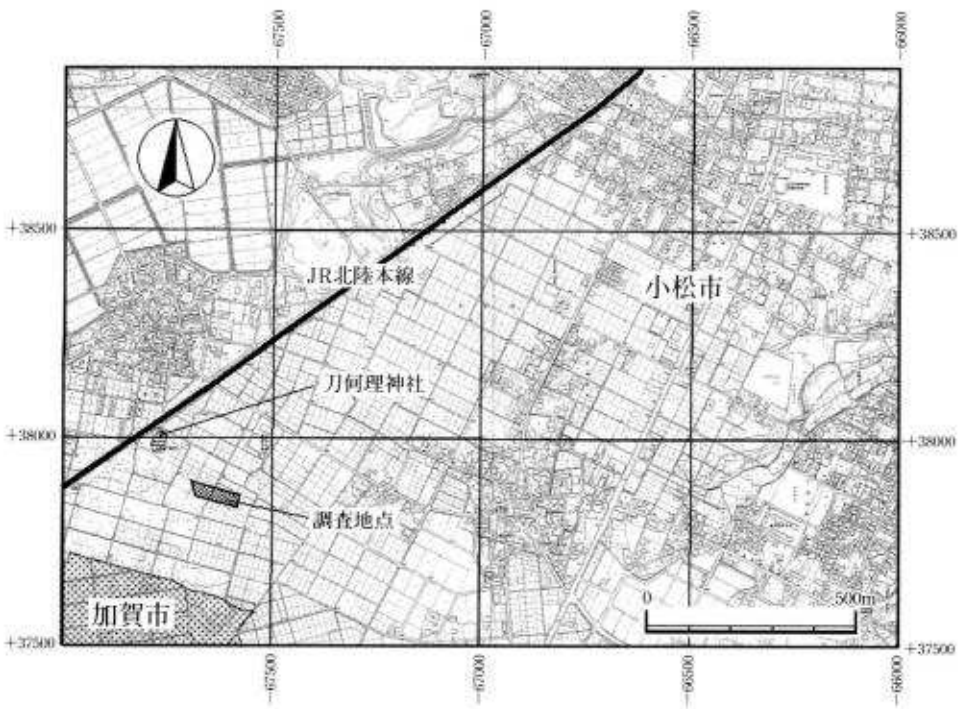
第１節　地理的環境と立地

石川県は大きく加賀地域と能登地域に分けられ、加賀は手取川によってさらに南北に分けられる。南加賀は、西に日本海、東に白山前山丘陵を形成する能美・江沼丘陵に挟まれ、南北にはそれぞれ江沼盆地・能美平野が広がる地域である。小松市は、市内の3分の2が山地や丘陵地であるものの、江沼盆地と能美平野の中間に広がる沖積平野及び三湖台地・月津台地を含む場所に位置している。すなわち小松は、加賀三湖（木場潟、柴山潟、今江潟）とこれらにより形成された潟埋積平野、三湖台地・月津台地の広がる地域にあたる。この立地最大の特徴として、水利に優れていることが挙げられる。東から西に向けて流れ日本海に注ぐ梯川は、白山山系に源を持つ県内第2の規模である。柴山潟・木場潟にはいくつもの河川が注ぎ、それらは今江潟を介して梯川と繋がり、その結果、加賀三湖と日本海はひとつの水系を形成することになる。この豊富な水資源は漁撈による直接的な恵みをもたらし、さらに、河川の氾濫が土地を稲作その他の農業に適した肥沃なものとする。また、ひと繋がりの水系は人・物・情報の交流を促す。これらを背景にこの地では、旧石器時代には暮らしが営まれるようになり、先進的な文化が形成されていった。南加賀窯跡群（＝製陶遺跡及び製鉄遺跡）が営まれ発展したことなど、地理的要因なくしては語ることはできない。



第１図　小松市位置図

刀何理遺跡は月津台地に立地し、小松市矢田町及び矢田野町にあたる、古代から中世の集落遺跡である。月津台地では、念仏林遺跡や額見神社前Ａ・Ｂ遺跡などの縄文時代の遺跡、飛鳥・奈良時代から平安時代にかけての複合遺跡である額見町遺跡、形象埴輪で知られる矢田野エジリ古墳を含む三湖台古墳群など古墳時代の遺跡、薬師遺跡など奈良時代から平安時代の遺跡、古代から中世までの集落跡であり本報告書の主題でもある刀何理遺跡など、各時代の様々な用途・形態の遺跡が確認されている。次節では刀何理遺跡周辺（＝月津台地周辺）の遺跡の概要を述べる。



第２図　刀何理遺跡位置図

第２節　周辺の遺跡の概要

三湖に囲まれた月津台地の周辺で人々の生活が確認されるのは、縄文時代である。以来、定住生活が脈々と続く。以下、各時代に展開した遺跡をみてゆこう。

≪縄文時代≫

集落形成が行われるようになる縄文時代には、月津台地においても集落が展開されたことが確認できる。潟に囲まれた湿潤な環境と水運に恵まれていたことが大きく作用したとみられる。

縄文前期、三湖は入り江の状態だったと考えられ、大谷山貝塚(津波倉町)等が形成される。中期には、念仏林遺跡(四丁町)、念仏林南遺跡(月津町)等、多くの集落が台地上に成立する。念仏林遺跡では5,000点を超える石器が確認され、竪穴建物1棟からは石錘の集中がみられ、漁撈が盛んに行われていたことが窺える。後･晩期になると、遺跡分布の中心は、陸化した沖積地上へ移動し、台地上では希薄となる。

≪弥生時代≫

弥生時代前期、今江向ノ山遺跡(今江町8丁目)が営まれた。弥生時代末から古墳時代初頭にかけて再び集落は盛んとなり、念仏林南遺跡(月津町)、茶臼山遺跡(月津町)、額見町西遺跡(額見町)等がある。集落遺跡の中にはごく限られた時代に営まれたのではなく、複数の時代にわたって営まれたものが含まれる。念仏林南遺跡は、縄文期の土坑、弥生時代後期の竪穴建物3軒、古墳時代中期の竪穴建物1軒、古墳時代後期の竪穴建物22棟、掘立柱建物19棟が確認されており、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代中期・後期の4つの時代をまたぐ集落である。

≪古墳時代≫

集落として栄えた月津台地は、古墳時代に入ると一転して墓域へと性格が変化する。月津台地からは加賀三湖を見下ろすことができる。この三湖台を中心に多数の古墳が築かれ、三湖台古墳群を形成している。小規模円墳主体の矢田借屋古墳群(矢田町・月津町)、多量の人物埴輪や馬形埴輪を出土した矢田野エジリ古墳(矢田野町)、全長52mに及ぶ前方後円墳である臼のほぞ古墳(額見町)等が含まれる。また、木場潟の対岸の丘陵にも木場古墳群(木場町)が存在する。

三湖台古墳群には埴輪を伴うものが多く、臼のほぞ古墳、箕輪塚古墳、矢田野エジリ古墳などはいずれも前方後円墳である。土器類の産地についてみてゆくと、矢田野エジリ古墳･御幸塚古墳･矢田借屋古墳群出土埴輪及び須恵器の胎土と二ツ梨群産※の胎土の分析により、地元で生産された土器と大阪陶邑からの搬入品とが古墳に供給された事が判っており、産地と消費地との密接な関係が、この時代にはすでに確立していたことが窺える。地元産地である南加賀窯跡群の消長については後に触れることとする。

集落についてみると、弥生末から古墳時代初頭に再び営まれるようになったのが、古墳時代中・後期には周辺でもその数を増やしている。

※「矢田野エジリ古墳発掘調査報告書」の中で埴輪胎土の比較時に使用された名称である。これはこの時点で、埴輪併焼窯として二ツ梨殿様池窯が県内随一として知られていたことにより、須恵質埴輪の胎土を比較する際に、殿様池窯出土のものを二ツ梨群産と特定していることによる。

≪古代～平安時代≫

飛鳥・奈良時代の月津台地は、行政区割でいえば越前国江沼郡に属し、薬師遺跡(矢崎町・今江町)、島遺跡(島町)、矢田野神社前遺跡(矢田野町)、額見町遺跡等の集落が営まれた。額見町遺跡は、25万㎡、期間は約600年の大規模複合遺跡である。竪穴建物119軒、掘立柱建物330棟等と共に、多数の土師器

焼成坑、製鉄関連遺物、律令関連遺物が出土し、地域の中核として別格の存在であった。オンドル状遺構を備えた竪穴建物跡が21軒発見されていることが特筆される。このことは、朝鮮半島から渡来人が移住して手工業の製法を伝播したことを示唆している。また、島遺跡(島町)では8世紀後半から9世紀前半の南加賀窯跡群産の須恵器や土師器が多数出土している。

平安時代、全国で最も遅い弘仁14年(823年)に加賀国が立国されると、古府町周辺の集落が活気づく。一方、月津台地では集落の小規模化が進行する。ただし額見町遺跡、刀何理遺跡、矢田新遺跡等で集落が営まれていたことは確認されている。12世紀に入ると、台地から集落が平野部へと移動する傾向にあったのか、月津台地周辺における遺跡には特筆すべきものはない。なお、散布地としては、島Ｂ遺跡(矢田野町・矢沢町)、矢田野神社前遺跡(矢田野町)等がある。

≪南加賀窯跡群≫

月津台地周辺で出土する遺物には、南加賀窯跡群で作られたものが多く含まれる。

南加賀窯跡群は、月津台地と白山とに挟まれた低丘陵部に、東西約4.5km、南北約1～3kmの範囲で広がる北陸最大規模の製陶遺跡である。平野に近く交通の便に優れていること、谷部に良質な粘土が堆積していること等、窯業に適した条件を備えているため、途中で断絶するものの、6世紀初頭から14世紀までの長きにわたり製陶が行われた。6世紀初頭から10世紀前半代までの古代土器生産遺跡群と、12世紀末から14世紀までの中世陶器生産遺跡群という、2つの異なる性格を持つ製陶遺跡群が存在する。

古代土器生産遺跡群の分布域は、河川流域や主谷を単位として、動橋川流域地区、馬場川流域地区、オオダニ地区の主に3地区に分けられる(オオダニ地区はさらに4細分される)。南加賀窯跡群の中心はオオダニ地区であり、開窯から終焉まで絶え間なく操業されている。

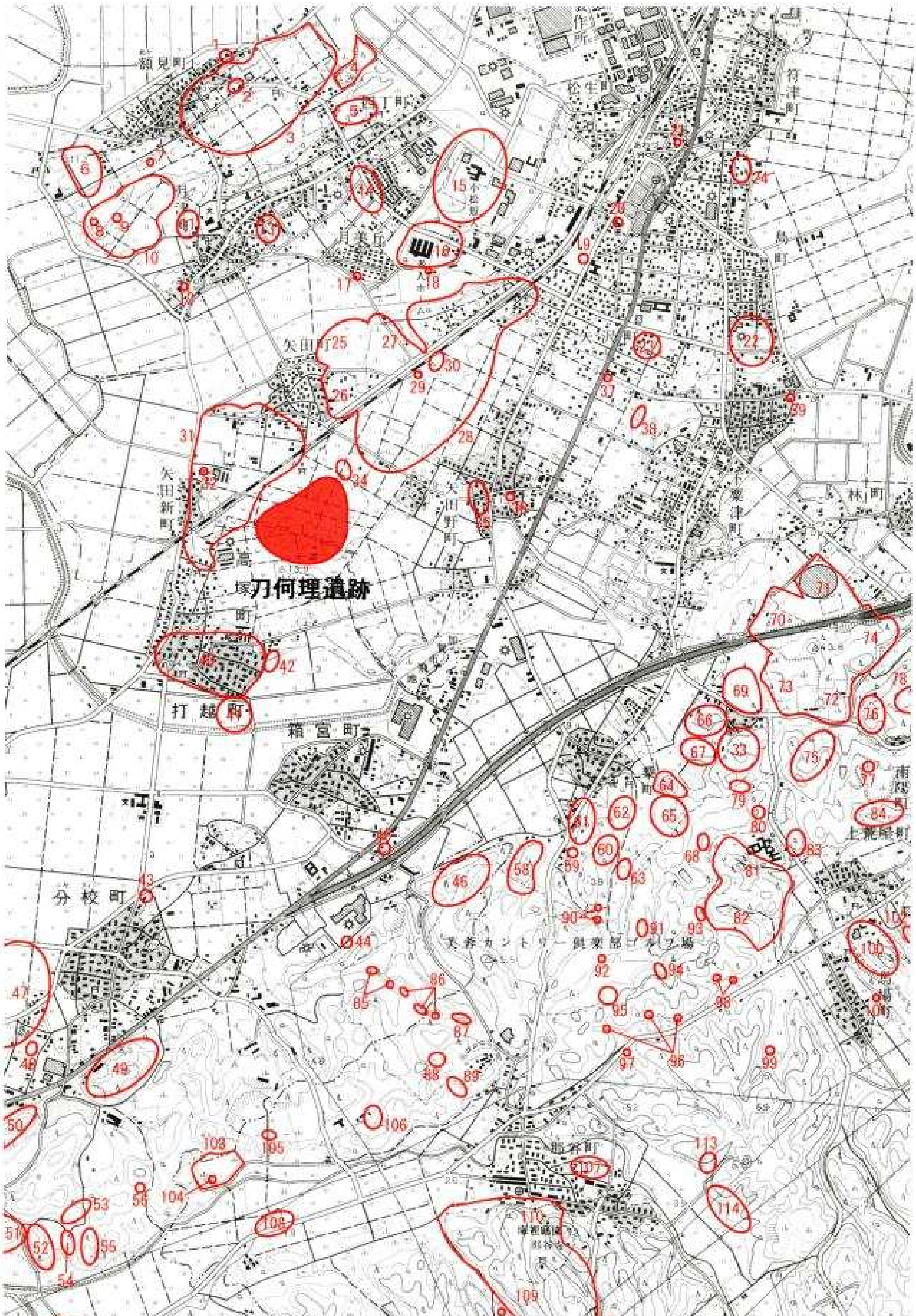
北陸で5世紀末に始まった須恵器生産は、6世紀初頭にはこの地にも登場する。8世紀初頭に最盛期を迎え、8世紀中頃から9世紀中葉まで停滞するものの10世紀前半代まで連綿と操業された。消滅は、国衙経営の終焉と時期を同じくするかのように、遅くとも10世紀後半代である。須恵器以外にも、6世紀代には埴輪併焼、7世紀後葉には瓦併焼、8世紀～10世紀前半には土師器併焼、10世紀前半には再び瓦併焼が行われた。以下、須恵器生産を中心に製品等を概観する。

6世紀代の生産は食器を中心に行われた。また前半代を中心に埴輪併焼が行われている。7世紀には動橋川流域地区での生産が始まり、窯数や生産規模が拡大する。また、陶棺や硯などの特殊用具も生産された。一方、7世紀後葉は寺院建立に伴い瓦生産も行われた。8世紀初頭になると土師器生産も始まり、窯跡数・窯場の分布も拡大し、最盛期を迎える。8世紀中頃から9世紀初頭にかけては、量産・集中経営が可能な複数基並列築窯が始まる。と同時に土師器焼成坑の集約化が顕れる。しかし窯場数はこの期に半減し、9世紀前半までは停滞期となる。消費地における須恵器の衰退からも明らかである。9世紀後葉には生産が再び活発化し、9世紀末から10世紀前半にかけて須恵器窯跡数が増加、土師器焼成窯が出現して群を構成し、さらに、馬場川流域でも群としての生産体制が確立する。陶硯類が量産され、平安京山城系の瓦当文様をもつ軒先瓦や水煙・九輪セット等が生産されるようになり、官窯としての性格を帯びてくる。

10世紀前半代まで活発であった生産活動は、10世紀中頃に収束してゆき、須恵器はもとより土師器生産も、遅くとも10世紀後半代には、国府権力の弱体化との深い関連性を示唆するかのごとく終焉を迎える。

須恵器生産の絶えたこの地に12世紀後半に中世陶器生産遺跡群が再形成され、常滑系の瓷器系陶器の生産が行われた。加賀焼あるいは加賀古陶と呼ばれるこれら中世陶器は14世紀まで生産が続き、加賀地域一円で消費されている。

周辺の遺跡については、別に掲げる周辺の遺跡地図（＝第3図）と周辺の遺跡一覧（＝表1）を参照されたい。


刀何理遺跡
額見町
月津
月美丘
矢田町
矢田新町
高塚町
打越町
箱宮町
分校町
松生町
符津町
島町
大沢町
林町
矢田野町
粟津町
南陽町
上荒屋町
那谷町

第３図　周辺の遺跡地図

番号	遺跡名称	種別	時代
	刀何理遺跡	集落跡	古代～近世
1	額見神社前A遺跡	散布地	縄文
2	額見神社前B遺跡	散布地	縄文
3	額見町遺跡	集落跡	古代～中世
4	臼のほぞ古墳	古墳	古墳
5	串町遺跡	散布地	縄文・古代
6	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世
7	左門殿古墳	古墳	古墳
8	茶臼山古墳	古墳	古墳
9	茶臼山祭祀遺跡	祭祀跡	奈良
10	茶臼山遺跡	散布地	弥生・古代
11	月津オカ遺跡	散布地	古代～中世
12	興宗寺古墳	古墳	古墳
13	月津A遺跡	集落跡	奈良
14	月津新遺跡	散布地	縄文
15	念仏林遺跡	集落跡	縄文
16	念仏林南遺跡	集落跡	縄文～古墳
17	念仏塚古墳	古墳	古墳
18	念仏林古墳	古墳	古墳
19	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳
20	糞輪塚古墳	古墳	古墳
21	石山古墳	古墳	古墳
22	島遺跡	散布地	古墳～奈良
23	島B遺跡	散布地	奈良・平安
24	島C遺跡	古墳?	古墳
25	矢田A遺跡	散布地	縄文
26	矢田B遺跡	散布地	古墳
27	矢田借屋古墳群	古墳	古墳
28	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代
29	百人塚古墳	古墳	古墳
30	矢田野古墳群	古墳	古墳
31	矢田新遺跡	集落跡	古代～中世
32	丸山古墳	古墳	古墳
33	二ツ梨豆岡向山窯跡	窯跡	古墳～平安
34	狐森塚古墳	古墳	古墳
35	矢田野神社前遺跡	散布地	平安
36	中村古墳	古墳	古墳
37	島経塚	経塚	
38	下粟津横穴群	横穴	
39	下粟津1～2号横穴	横穴	
40	打越城跡	城跡	安土桃山
41	打越A遺跡	散布地	縄文
42	打越B遺跡	散布地	弥生
43	分校高山古墳	古墳	古墳
44	箱宮A遺跡	散布地	中世
45	箱宮B遺跡	散布地	中世
46	箱宮窯跡群	窯跡	奈良～中世
47	分校A遺跡	散布地	古墳
48	分校山王古墳群	古墳	古墳
49	分校カン山古墳群	古墳	古墳
50	分校チャカ山古墳群	古墳	古墳
51	松山城跡	城跡	南北朝
52	松山東古墳群	古墳	古墳
53	分校窯跡群	窯跡	古墳
54	松山窯跡群	窯跡	古墳
55	分校古墳群	古墳	古墳
56	分校ブドウ山古墳	古墳	古墳
57	栄谷A遺跡	散布地	奈良・平安

番号	遺跡名称	種別	時代
58	矢田野長尾山遺跡	窯跡・製鉄跡	平安・鎌倉
59	矢田野向山古窯跡	窯跡	奈良
60	二ツ梨脇釜遺跡	窯跡・製鉄跡	奈良
61	二ツ梨釜谷古窯跡群	窯跡	奈良・平安
62	二ツ梨東山古窯跡群	窯跡	古墳・奈良
63	二ツ梨横川遺跡	窯跡・製鉄跡	奈良
64	二ツ梨丸山古窯跡群	窯跡	古墳
65	二ツ梨峠山古窯跡群	窯跡	古墳・奈良
66	二ツ梨豆岡山古窯跡	窯跡	古墳
67	二ツ梨殿様池古窯跡	窯跡	古墳・平安
68	二ツ梨サンマイダニヤマ古窯	窯跡	平安
69	二ツ梨一貫山古窯跡群	窯跡・製鉄跡	奈良・平安
70	林超勝寺跡	寺院跡	中世
71	林遺跡	窯跡・製鉄跡	古墳～平安
72	戸津古窯跡群	窯跡	古墳～中世
73	戸津六字ヶ丘古窯跡群	窯跡	古墳・奈良
74	戸津シンブザワ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
75	戸津オオタニ遺跡	窯跡・製鉄跡	奈良
76	戸津ワクダニ遺跡	製鉄跡	平安～室町
77	戸津2号窯	窯跡	平安
78	戸津ショウガタニ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
79	二ツ梨グミノキバラ古窯跡群	窯跡	奈良～平安
80	上荒屋キダシ古窯跡群	窯跡	奈良
81	上荒屋サンマイダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
82	上荒屋ジャモンダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	古墳・平安
83	上荒屋トリダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安・鎌倉
84	上荒屋オジマヤマ遺跡	窯跡・製鉄跡	鎌倉
85	那谷大久保谷1～2号製鉄跡	製鉄跡	
86	那谷小天王谷1～3号製鉄跡	製鉄跡	
87	那谷小天王谷古窯跡群	窯跡	鎌倉
88	那谷大天王谷古窯跡群	窯跡	鎌倉
89	那谷カミヤ古窯跡群	窯跡	鎌倉
90	二ツ梨奥谷遺跡	製鉄跡	
91	二ツ梨奥谷古窯跡群	窯跡	平安末期
92	那谷カナクソダニ遺跡	窯跡・製鉄跡	鎌倉
93	二ツ梨カセイデ古窯跡群	窯跡	
94	矢田野1～2号横穴	横穴墓	
95	那谷1～6号横穴	横穴墓	
96	那谷中山谷遺跡	製鉄跡	
97	那谷梅ヶ谷遺跡	製鉄跡	
98	上荒屋ユルイデン遺跡	製鉄跡	
99	上荒屋那谷口遺跡	製鉄跡	
100	上荒屋ホウジョウヤマ遺跡	窯跡・製鉄跡・寺院・墳墓	平安・中世
101	馬場ニカヤマ遺跡	窯跡・製鉄跡	平安
102	上荒屋ハカンタニ遺跡	窯跡	鎌倉
103	那谷金比羅山古窯跡群	窯跡	古墳末期
104	那谷金比羅山古墳	古墳	古墳末期
105	那谷桃の木山古窯跡	窯跡	奈良
106	那谷オオクボ古窯跡	窯跡	鎌倉
107	那谷遺跡	散布地	鎌倉
108	那谷B遺跡	集落跡	平安
109	那谷城跡	城跡	室町
110	那谷寺遺跡	寺院	室町
111	那谷ゴザダニ遺跡	製鉄跡	
112	那谷ジケダニ遺跡	製鉄跡	
113	那谷エモンジャ遺跡	窯跡・製鉄跡	鎌倉
114	那谷コモクソ遺跡	製鉄跡	

表1　周辺の遺跡一覧

第２章　　調査の経緯と経過

第１節　調査に至るまでの経緯

石川県は、細長い県土を一体化する広域交流・地域連携の交通基盤づくりと観光面での周遊性の向上を図るため、幹線道路網の整備を進めている。県土ダブルラダー（いしかわ広域交流幹線軸）構想と呼ばれるこの事業は、南北に長いという地理的条件に対応した均衡ある発展を目指し、県南北幹線の複線化と東西幹線の多重化を進めることにより、2本のラダー(梯子)状道路ネットワークを形成するというものである。

県土ダブルラダー構想構成路線のひとつ南加賀道路（粟津ルート）は、小松山中線と空港軽海線とを南北で結ぶ路線で、平成6年度から平成25年度で整備する計画が進められている。当該路線の建設を担当する石川県小松土木事務所(平成16年度より石川県南加賀土木総合事務所に組織変更)は、石川県教育委員会と協議を重ねた。

今回の発掘調査の区域については、平成14年度と15年度の2回にわたる分布調査によってその範囲が判明したものである。県小松土木事務所は平成14年7月26日付けで石川県教育委員会に分布調査を依頼し、この依頼を受けて石川県教育委員会文化財課は平成14年8月29日に調査を実施した。その方法は、調査区域のほぼ中央の直線上に概ね25m間隔で試掘坑を掘る試掘調査であった。その結果、一部で埋蔵文化財が確認され、県文化財課は県小松土木事務所に対し平成14年9月12日付けで、埋蔵文化財が確認された刀何理遺跡と思われる区域での工事施工の際には、事前に発掘調査等の保護措置が必要であるため協議が必要である旨回答した。県小松土木事務所は平成15年10月23日付けで、県教育委員会に平成14年度調査区域の東側の区域についての分布調査を依頼した。県文化財課は、平成14年度に分布調査をしたものの新規の区域と接する箇所を再調査することとし、平成16年1月9日、新規区域に再調査区域を加えた範囲で分布調査を行った。これも前年度の分布調査と同様、試掘坑を掘るという試掘調査によって行われた。その結果、埋蔵文化財の存在する区域の扱う範囲が確定し、県文化財課から県小松土木事務所に対し、平成16年1月16日付けで、刀何理遺跡の埋蔵文化財の取り扱いについてはその後も協議するよう回答がなされた。

引き続き県小松土木事務所と県文化財課は協議を行い、県小松土木事務所は県文化財課に対し平成16年3月18日付けで、刀何理遺跡3,900㎡の埋蔵文化財の発掘調査を平成16年6月に行うよう、県文化財課に依頼した。これを受け石川県教育委員会は、平成16年4月13日付けで、刀何理遺跡3,900㎡の発掘調査の実施を、係る経費は県が負担するものとして小松市教育委員会に依頼した。調査区域面積が3,900㎡と広大であるため単年度で全域の調査を完了することは困難であると判断し、小松市教育委員会と石川県は複数年度にわたって事業を実施する方向で調整を行った。結果、約2,000㎡(矢田町ソの部62～64)については平成16年度に、残り約1,900㎡(矢田町ソの部46～48、54～56)については平成17年度に発掘調査を実施することで合意した。平成16年4月26日、市教育委員会は県教育委員会に対し、2ヶ年で3,900㎡を調査することで依頼を受け入れる旨回答した。調査区域図及び調査区割図は、第4-1図・第4-2図のとおりである。(平成16年度に発掘調査実施予定の約2,000㎡をⅠ区、平成17年度に発掘調査実施予定の約1,900㎡をⅡ区として図示する。)

県南加賀土木総合事務所(県小松土木事務所が組織改編)は平成16年6月23日付け「道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について(依頼)」により発掘調査の実施を依頼し、同日付けで市教委は「埋蔵文化財発掘調査の実施について回答」により受け入れを表明した。翌6月24日、石川県が委託して小松市が調査を実施するという発掘調査の委託契約を締結し、小松市教育委員会は発掘調査事業に着手した。

第2節　本調査の概要

≪平成16年度≫

平成16年6月24日に石川県と締結した発掘調査の委託契約により、小松市教育委員会は、平成17年3月31日までを事業期間として、矢田野町ソの部62～64(＝Ⅰ区。面積約2,000㎡)の発掘調査に着手した。

市教育委員会は調査事務を開始し、現地調査の準備を進め、7月12日には県教育委員会に「発掘調査報告」により7月22日より現地調査を行うことを報告した。

現地調査開始後の調査概要は次の通りである。

発掘調査区域の隣地であり南加賀道路（粟津ルート）道路改良事業（＝いしかわ広域交流幹線軸道路建設工事）用地に発掘調査現場事務所を設置することとし、7月16日から22日、仮設建物設置用地及び駐車場整備舗装工事を実施、7月26日に仮設建物を設置した。並行して、4級基準点測量により4級基準点2点を設置した。

7月26～28日、重機(08バックホー、6tクローラーダンプ)を用いて表土除去を行い、隣地との境界にバリケードを設置した。7月30日までに国土座標にのせてグリッド測量を行い、5m間隔のメッシュを設定し、グリッド杭を設置した。

8月2日より、(社)小松市シルバー人材センターから派遣された発掘調査作業員及び臨時の発掘調査作業員を投入して発掘調査を始めた。遺構の確認、掘削、各遺構の写真撮影、平面図や土層断面図などの図面作成を順次行った。

発掘調査は、すでに遺物包含層の大部分が削平を受けていたこと、遺構密度が着手前の予測に比して小さかったことから、予定よりも大幅に速く進められることが判明した。そこで、県南加賀土木総合事務所と協議し、平成17年度に予定していた矢田町ソの部46～48、54～56(＝Ⅰ区。約1,900㎡)の発掘調査をも進める方向となった。市教育委員会は、県南加賀土木総合事務所より、9月5日、矢田町ソの部46～48、54～56(＝Ⅱ区。約1,900㎡)について発掘調査の追加依頼を受け、同日、遺構掘削作業までの調査を行う旨回答した。翌9月6日、県と市は、発掘調査区域と契約金額を減額するという内容の変更契約を締結した。

9月7日～8日、Ⅱ区の表土除去を重機(08バックホー、6tクローラーダンプ)により行った。こうした作業の間もⅠ区における人力による発掘調査は進行し、9月14日にはⅡ区の遺構精査を開始するに至った。この時点でⅠ区の大部分の遺構掘削を終え、遺構の一部を残すのみであった。Ⅱ区についても、遺構の確認、掘削、遺構の写真撮影、各種図面の作成を順次行うこととなった。また、4級基準点測量を行い、グリッド杭の設置を9月17日までに終えた。Ⅱ区のグリッド杭は、Ⅰ区設置分と一体となるように5m間隔で設定した。グリッド配置は第5図のとおりである。

グリッド杭設置後は、Ⅰ区の未了箇所の遺構掘削とⅡ区の遺構掘削、写真撮影、各種図面の作成を進めた。

11月10日、空中写真撮影を行った。空中写真撮影測量図化業務の対象となる範囲は、Ⅰ区の全てにⅡ区の一部(Ⅰ区と接する区域)を加えたもので、残りの区域は、平成17年度に全ての遺構掘削が終了した後に行うこととした。

平成16年度の現地調査は、遺構の確認作業を11月25日まで、遺構の掘り下げ作業、遺構の写真撮影及び図面作成を12月初旬まで行い、悪天候のため作業のできない冬期に備えて調査区域の養生の上、12月22日、仮設建物を撤去して終了した。

12月22日、石川県教育委員会あて「埋蔵文化財包蔵地把握に関する報告」を提出、12月24日には小松警察署長あて発見届を出した。12月24日に石川県教育委員会より刀何理遺跡出土品が文化財と認定されたのを受け、12月28日付けで、石川県教育委員会あてに埋蔵文化財保管証を提出した。

また、現地調査により出土した遺物の整理作業(遺物の洗浄、注記、接合、分類、実測)を、報告書刊行に先がけ、平成16年9月10日から平成17年3月30日まで、現場の仮設建物内と埋蔵文化財調査室に

て行った。

平成17年3月31日、石川県南加賀土木総合事務所に対し、「委託事業執行結果報告書」を提出した。また同時に委託費精算の手続きを進めた。

＜調査結果＞

竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡5棟、柱穴並列区域1箇所、土坑33基、炉跡2箇所、溝6条の遺構を検出した。ここでは遺物の出土がなくても落ち込みや立ち上がりを伴うものを土坑として扱った。

遺物は、遺構包含層がほとんどない状況であったため、石製品、須恵器、土師器、縄文土器等、種別に関わらず全てを合計しても200点をわずかに超える数を検出するのみであった。大半の遺構は遺物を伴っていない。遺物は小片が多かっただけでなく、遺構に伴うものでも、たとえ接合しても完形にはほど遠いと感じさせる状況であった。

≪平成17年度≫

刀何理遺跡発掘調査事業は複数年度にわたる事業であったため、石川県南加賀土木総合事務所は小松市教育委員会に対し、調査未了のⅡ区(矢田野町ソの部46～48、54～56、面積1,900㎡)の発掘調査を新年度初日の平成17年4月1日付けで依頼した。同日、小松市教育委員会は依頼を受ける旨回答し、即座に石川県と小松市は発掘調査の委託契約を締結した。委託契約の内容は、平成17年4月1日から平成18年3月31日までを事業期間とし、小松市が石川県から委託を受けて現地調査から報告書刊行までの事業を石川県の負担によって行うというものである。

5月19日には現地に仮設建物を設置し、5月23日に(社)小松市シルバー人材センターより派遣された作業員を投入して現地作業を開始した。なお、現地作業に先立ち「発掘調査報告」を5月20日に石川県教育委員会あてに提出した。

平成17年度における現地作業は、平成16年度内に調査区のほぼ全域の遺構掘削までを終えていたので、空中写真測量図化業務に向けて、冬期間に流入した土砂の除去や、完掘せずに半裁の状態で残しておいたピット等を掘削すること、図面作成が主な作業であった。

6月8日、空中写真測量図化業務のためのラジコンヘリを用いた写真撮影を実施した。

6月21日から6月23日まで重機による埋戻しを行い、同時に現地仮設建物を撤去した。また、6月24日から6月29日まで仮設建物用地及び駐車場の整備のため敷いていた砕石の撤去工事を行った。これをもって平成16年度と平成17年度の2カ年にわたる刀何理遺跡発掘調査の現地作業を終了した。

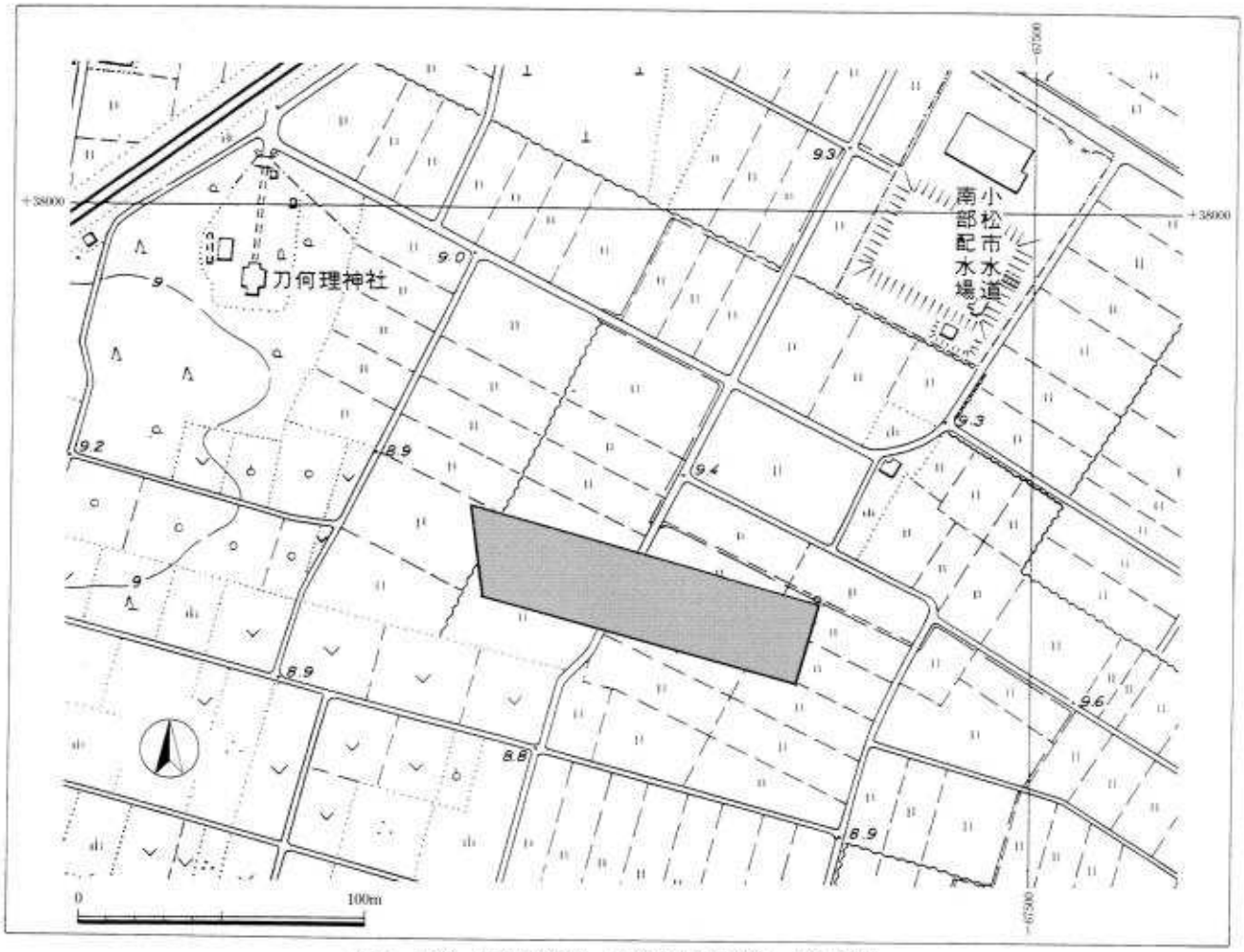
6月29日、現地作業終了を「土木工事等に係る埋蔵文化財発掘調査結果について」と題する文書にて石川県南加賀土木総合事務所に通知した。

7月1日、小松警察署長あてに発見届を出し、続いて7月6日、石川県教育委員会に「埋蔵文化財包蔵地把握に関する報告」を提出した。7月14日に石川県教育委員会より刀何理遺跡出土品が文化財と認定されたのを受け、7月22日付けで、石川県教育委員会あてに埋蔵文化財保管証を提出した。

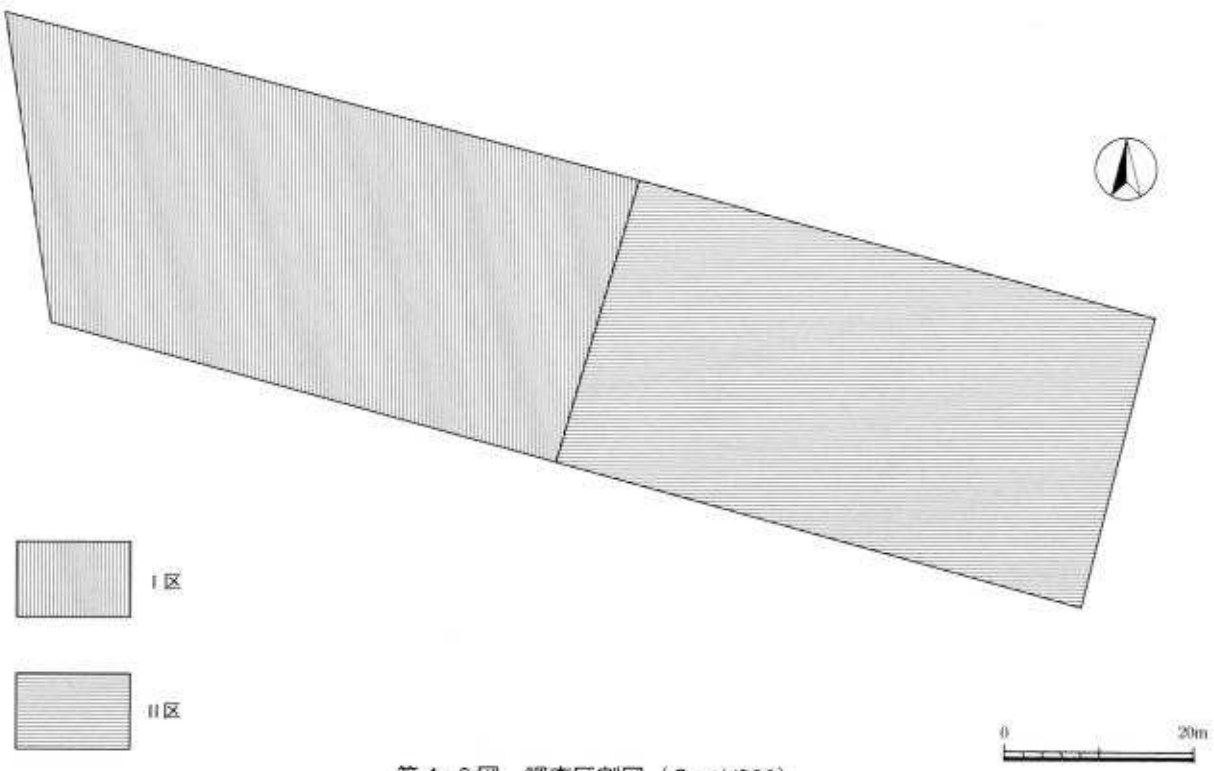
なお、現地調査と併行し出土品整理作業と報告書刊行に係る作業を行った。出土品整理作業員によるこの作業は、4月18日に開始した。

＜調査結果＞

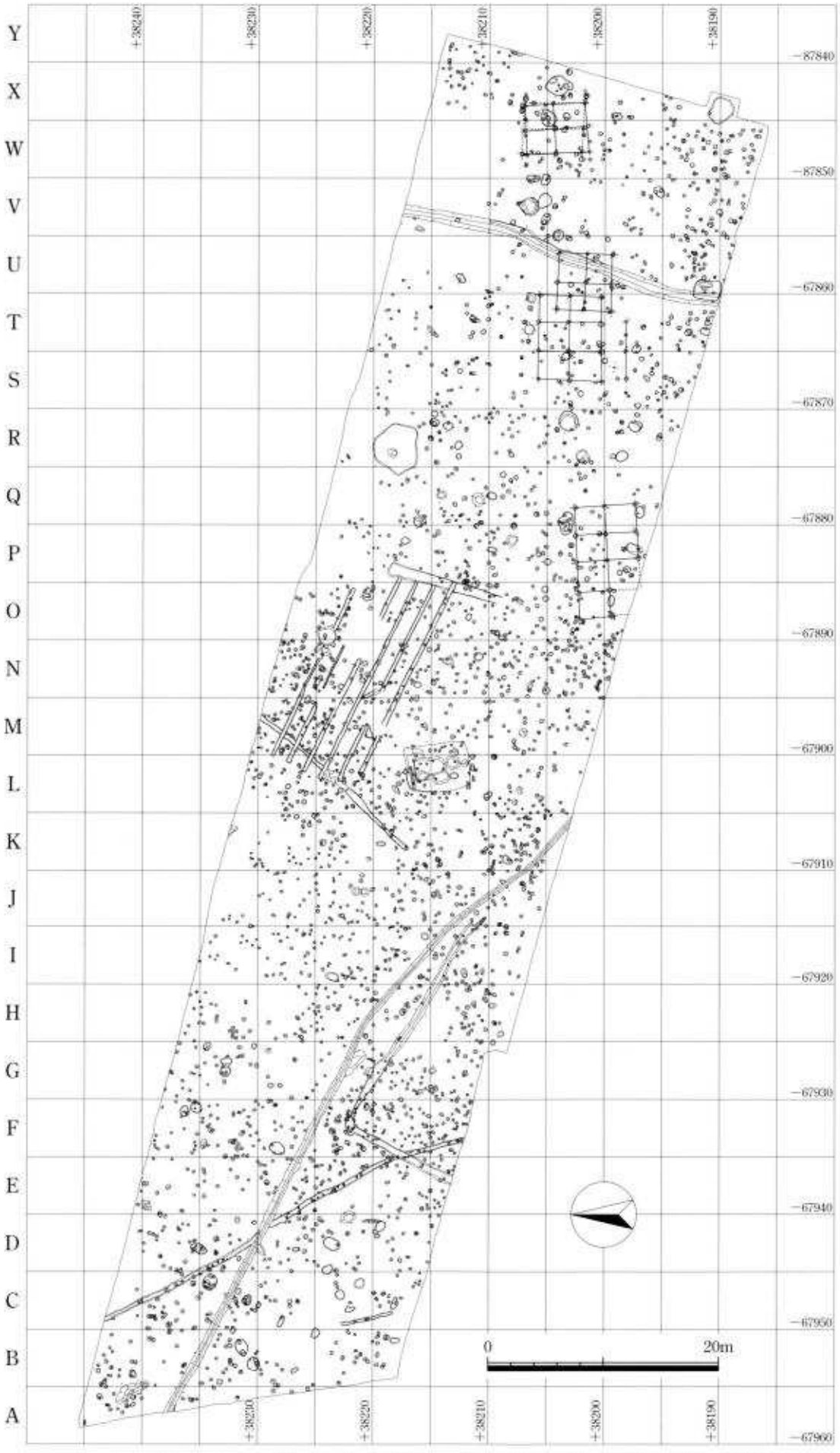
平成16年度中に遺構掘削までの作業を終え、ほとんどの遺物の取り上げも終わっていたので、新規の発見は特になかった。



第4-1図　刀何理遺跡　調査区域図（S＝1/2,500）



第4-2図　調査区割図（S＝1/800）



第５図　刀何理遺跡　平面図・グリッド配置図（Ｓ＝1/500）

第3章　遺　構

第1節　遺構の分布状況と概要

面積3,900㎡の調査区は、東西に2分し西側をⅠ区、東側をⅡ区と呼ぶ。Ⅰ区に含まれるのは小松市矢田町ソの部62～64で、Ⅱ区は小松市矢田町ソの部46～48、54～56である。5m間隔で設けたグリッド区割りでは、Ⅰ区がA～N区、Ⅱ区がL～X区となる。

調査区全域でごくわずかの遺物包含層しか残っていなかった。調査地は、昭和期に稲作に活用されており、農地利用に際して重機を用いて整備を行ったということで削平が全域に及んでいた。表土となる耕作土直下に地山層が確認され、上位層は既に削平されていた。また、数m四方の範囲での攪乱もところどころに見られた。

本調査で検出した遺構は、竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡5棟、柱穴並列区域が1箇所、落ち込みや立ち上がりを伴うもので遺物が出土していなくても土坑として扱い、これが33基、被熱面(炉跡)2箇所、溝6条である。

第2節　検出された遺構

1.竪穴建物跡

ＳＩ０１　(第9・10図)

＜検出位置，プラン検出・床・カマドの状況＞

L・M－6・7グリッド内。主軸は南北から西へ僅か5度振るが、ほぼ南北主軸と考えてよかろう。遺構確認時に硬化する区域と焼土集中区域を検出しており(第9図)、既に竪穴としての落ち込みは削平されてしまっていた竪穴建物と思われる。

遺構確認時に検出された硬化区域のレベルは標高8.58～8.60m、硬化以外のレベルは標高8.47～8.56mを測る。硬化以外の部分を掘削時に、北側中央付近でも硬化する面が検出されており、このレベルが標高8.40～8.50m前後となる。床面は建物中央付近が浅く窪む状態だったと思われる。床の断ち割り断面から見ると、硬化する区域で貼床を構築したと思われる土層を確認でき、周囲で地山となっている。部分的に床を構築したと思われるが、この床構築土は10㎝と厚い。

また、焼土集中箇所での土層を見ると、一部分で地山被熱層を検出しているものの、その他の土層では、たとえカマド床として構築されたにせよ被熱を受けたとは考えにくいものとなっている。とにかく壊されている。いずれにせよ、若干の被熱層が存在していることで、この住居の南東隅にコーナーカマドが付設していたことは間違いないと考えられる。

＜規模＞

長軸を主軸として、長さ560㎝、幅400㎝、面積22.4㎡の、やや小型タイプになろうと思われる。ただ、壁がすべて削平されているため、本来の規模はもっと大きかった可能性が残る。

＜柱穴の状況＞

この竪穴建物に伴う柱穴はプラン検出ライン外側の北側と南側に検出されている。2本の柱で屋根を支える構造であったのか？ 2支柱型というべきか。北、南側にそれぞれ2本ずつ検出され、柱替えが行われた可能性がある。柱の底面で柱圧痕が認められるが、覆土の土層断面から判断すれば、一見柱は切り取られたように見えるのだが、地山ブロックが混入するため人為的な埋土と考えざるをえず、柱は抜き取られて人為的に埋められたものと思われる。また直径が30～35㎝の浅いものとなっているが、削平の影響によるものであろう。

＜遺物出土状況＞

遺物は、ほぼ床面レベルから出土しているが、非常に少ない。

＜床下状況＞

床下からは、大小の床下土坑が検出されている。

ＳＩ０２　(第7・8図)

＜検出位置・プラン検出・床・カマドの状況＞

T・U－9グリッド内。主軸は南北から東へ僅か8度振るものだが、ほぼ南北主軸と考えてよかろう。床レベルは標高8.46～8.48mで、1層下面が弱く硬化することで床と捉えている。カマドは検出されていない。

＜竪穴の規模・柱穴の状況＞

長さ235cm、幅170～175cm、深さ10cmを測る面積約3.95㎡の頗る小型。柱穴は検出されず、遺構外にも伴う柱穴はみつかっていない。

＜竪穴覆土＞

10cmの覆土が確認できるが、ほぼ黒褐色を呈し、カーボンや焼土を含む人為的な層となっており、しまりを持つため自然堆積でない可能性をもつ。

＜遺物出土状況＞

大きく分けて、古代の時期のものと、中世の時期のものが出土している。床レベルから中世遺物が出土する。古代遺物は床下をメインに、覆土からも出土している。中世遺物も覆土から出土している。覆土から鉄滓が出土するが、1点のみである。

＜床下状況＞

大小2基の床下土坑が確認されている。深さは、浅い方が10cm程度、深い方が33cmを測る。

2.掘立柱建物跡

ＳＢ０１(第11図)

O～Q－9･10グリッドに位置する4間×2間の床束建物構造と考えられる掘立柱建物跡である。別の言い方をすれば、柱穴が小さいので、高床ではなく、低床をもつ総柱建物である。主軸方位を南北にもつとすれば、P2がずれるために西桁がやや歪んだ柱筋となるか。P9以外は底面に硬化する面をもち、柱圧痕と考えられる。このことから、柱は直接地面に入れられたと思われる。覆土は人為的で、柱は抜き取られ、埋められたと思われる。

規模は、柱間が200cmを主体に、短くて190cm、長くて226cm、面積は調査区外にのびる2分があると仮定して44.6㎡。但し、この建物がさらに南側へ延びる可能性は否定できない。深さは30cm前後が主体であり、深いものでP6のように45cm、浅いものではP1・10の25cmやP9・13の20cmとなる。削平された影響もあろうが、北側ラインの柱穴は40cm前後が主体となっており、その他は床束の性格が表れているとすれば、この建物は、さらに南へ延びる可能性は高くなろうと考えられる。

ＳＢ０２・０３(第14・12図)

SB03は、S～U－8・9グリッドに位置する、3間×2間の床束建物構造と考えられる掘立柱建物跡である。SB01と同じ構造の建物である。主軸方位は南北である。下底面に柱圧痕を確認しているP5・8はかろうじて確認している。柱は、ほぼ綺麗に並ぶがP1だけ内側に入り込んでいて、柱中心でなく外側に軸を据えると揃う。土層断面から、柱跡がP2・3・10・12・5・9から読みとれ、抜き取り痕がなく、堀り方埋土も残存するため、これらの柱は廃絶時に切られたか放置されたと考えられるが、この他は抜かれた可能性がある。この建物跡に対する規則性は感じられない。規模は、柱間が200cmを主体に、短くてP1･2間で174cm、長くて220cm、面積は41.2㎡。

SB02は、T・U－10グリッドに位置し、柱穴が東西に3本並ぶものである。下底面に柱圧痕、土層で柱跡を確認でき、堀り方埋土がそのまま残る。柱は切られて廃絶された可能性がある。この3本列からは遺物出土がないため時期は不明である。ここでSB03との位置関係をみると、P1がSB03主軸から

それているものの、他2本は主軸と合っている。SB02の柱穴は小さく、SB03と軸のずれる柱穴もあることで別遺構名が付けられているのだが、SB03に伴うものであった可能性が浮かび上がってくる。そして、両者間に地被熱が検出されており、炉跡の可能性がある。

以上から、SB03はSB02という簡単な覆屋をもったものか、壁柱として屋外までも空間に取り込んだ可能性がないか。その空間が屋内か屋外かの確実性はないけれど、なにか煮炊きをしたような空間を伴っていたと考えるのが自然でなかろうかと思う。

ＳＢ０４ (第13図)

T～U－9･10グリッドに位置する2間×2間の床束建物構造と考えられる掘立柱建物跡である。南北方向に主軸を持つ。P1とP9がSB03の範囲に入るので、機能していた時期は異なる。柱間(芯－芯)は240～250cmを主体に、短いP4・5間で215cm、長いP3・8間で255cmである。面積は23.0㎡。P1・6・7・9で柱跡と掘り方埋土が確認でき、廃絶時に切断または放置されたものと思われる。P2・9を除き柱圧痕が確認できる。柱穴の底径は20～25cmと揃うが、深さは20～50cmと幅がある。南の列と東の列が深くなっているが、何らかの意味があるのかどうか判然としない。

ＳＢ０５・０６ (第15・16図)

南北を軸とする2間×2間の掘立柱建物で、SB05を建て替えたと思われるものがSB06である。南北の長さ520cm、東西の長さ420cm、面積21.8㎡の規模を持つ。柱穴は、直径25～35cm、深さ20～25cmで、2つの柱穴が重なるP8(P14)で45cmである。SB05がほぼ長方形であるのに対し、SB06は北西と南東の角がやや尖った形となる。これは、全体を平行にずらした位置に建て替えたのではなく、P5は動かさないままで、元の柱のそれぞれの南側に新たに柱を設けたためと考えられる。

両者の構築時期の前後関係は、SB05のP8でありSB06のP14でもある柱穴の断面から判断される。柱穴の下底面では柱圧痕がみられ、覆土は地山ブロックやカーボンを含むなど人為的なものであることから、柱の抜き取り後に埋められたことがわかる。

P4はSB06に属すものとして分けたが、P3－5の柱列の軸から中心が20cmほど東側にずれるだけなのでSB05に含めるのが妥当かも知れない。

３.溝

ＳＤ０１ (第17・18図)

調査区西端A－2グリッドから南端K－9グリッドにかけて走る。経路はほぼ直線で、西側では東西ラインから北に約25度の傾きで、H－5グリッドから南側では約45度で走る。現況面(標高8.400m前後)での幅45～70cm、底の幅約20cm、深さ約80cmで箱掘りされており、明らかに人為的である。SD02との交点では堆積状況からSD01より新しいことが確認できる。遺物は、石器、須恵器、近世陶磁器が出土し、近世の遺構と考えられる。いずれの地点からも流水の痕跡は確認されておらず、また、大人一人がやっと歩ける幅で、使用形態の詳細は不明。

ＳＤ０２ (第19図)

調査区を軸から西に約30度の角度で縦断する。全体的に、40～45cmの幅で10cm強の深さを持つU字に近い形をしており、徐々に北側が低くなる。土師器を出土。

ＳＤ０３・４ (第20図)

調査区南端から北北東に延びる溝をSD03、東西ラインから北に約30度に走る溝をSD04とした。2条は直角にF－5グリッドで繋がる。SD02を横切った後直角に進路を変え、次第に浅くなりI・J－7グリッドで絶える。遺物なし。

ＳＤ０５

K～Mグリッド内で南北を軸に東に約45度の傾きを持つ溝。北側には重機の走行でできた6列の攪乱が横切るほか、上部が削られているため最も深い箇所でも検出面から4.5cmの深さしか残らず、K・Lグリッドの境付近では下底すらなかった。覆土は、5mm～1cm大の黄褐色の地山の粒を3%程度含む黒褐色砂壌土。遺物なし。

ＳＤ０６ (第21・22図)

調査区を南北(T－11～V－6グリッド)に突き抜ける。深さ50～60cm、底の幅30～50cm、南より北が低くなるよう箱掘りされ、下底面の大部分で硬化が見られる。V－6～W－7グリッドの大部分が攪乱に覆われていたため、調査区北端付近は周囲の形状を参考に現地で復元していることを断っておく。

SB06は、途中でSB04を横切るが、これはSB06の覆土除去後にSB04のP8を検出したので明らかである。また、T－11～U－11リッドではSD06の上部にSI02が築かれたのがわかる(第22図)。

SB04では、一部破壊を受けてはいたが幸いにも下の方が残っていた柱穴を確認でき、掘立柱建物の姿を明らかにすることができた。一方、T－10～U－11グリッドには柱圧痕を持ちながら相手の見あたらない柱穴が複数あるので、もともとは掘立柱建物の柱穴だったのをSD06が既に破壊して、建物として認識できなかったという可能性が残る。

遺物は、須恵器3点、土師器4点である。それらとSD06とSI02の出土状況及びSI02の遺物を手掛かりにすると、この溝は13世紀中葉までと考えられる。ただしSB04からSI02のものと同時代に区分される中世土師器皿が出土しているので、短期間に同じ場所で土木工事が行われたとみるか、1点あるいは数点の遺物のみを手掛かりとすることの不確実性の現れとみるか、悩ましいところである。

４.被熱面検出(炉)

ＳＪ０１ (第23図)

D－5～6グリッドで検出した。南北125cm、東西約20cm、深さ10cm。炭層は長さ57cm、深さ7cmの範囲であるが、焼土・遺物とも検出されていない。炉跡なのか、炭を廃棄した場所なのか、その用途や時期は全くわからない。

ＳＪ０２ (第24図)

S－10グリッド内にあり、2～3cm厚さの焼土層と、その周囲にそれぞれ1cm程度の還元焼土ブロックと地山ブロックを含有する7～13cmの層を持つ。遺物はない。

明確な掘り込みはないが、その位置がSB03のP6－9ラインから100cm余りの距離であるので、SB03に伴うものと推測できる。このことについては、SB03の項で触れたとおりである。

５.土坑

33基である。先に述べたとおり、落ち込みや立ち上がりを伴うものを土坑として扱ったので、貯蔵、廃棄、焼成といった用途が明確ではなくともここに含んでいる。遺物が少ないことは他の遺構にも言えることであるが、遺物を伴うものは、33のうち4基のみである。

以下、図版番号、所在グリッド名、大きさ、所見を記す。遺物の有無及び時期については、遺物出土の場合及び時期を推定し得る場合のみ記し、記述なき場合は、遺物なし、時期不詳である。なお、航測図と大きさや形に矛盾する箇所があるのは、掘り過ぎや土が崩れた部位に修正を加えたためなので了承いただきたい。

ＳＫ０１ (第24図)D～E－5。120×78cm、深さ36cm。下底はほぼ水平でほぼU字型。

ＳＫ０２ (第24図)G－5。290×105cm、深さ60cm。北側をSD01に切られているために正確なところはわからないが、最大300×150cmの大きさになる可能性がある。

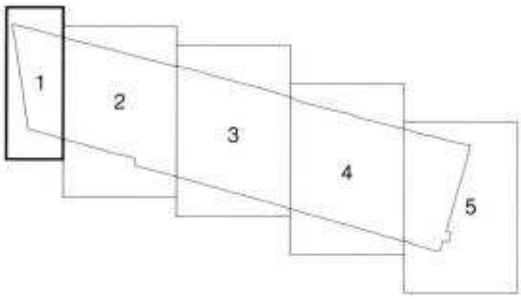
ＳＫ０３ (第24図)K－3。110×55cm、深さ25cm。北側が調査区北壁に切られる。下底は平ら。15cm余りの厚さの耕作土の直下に土坑の覆土である径5mm以下の地山の粒を含む層がきており、遺構検出面(標高8.600m)まで削平されていることを裏付ける。

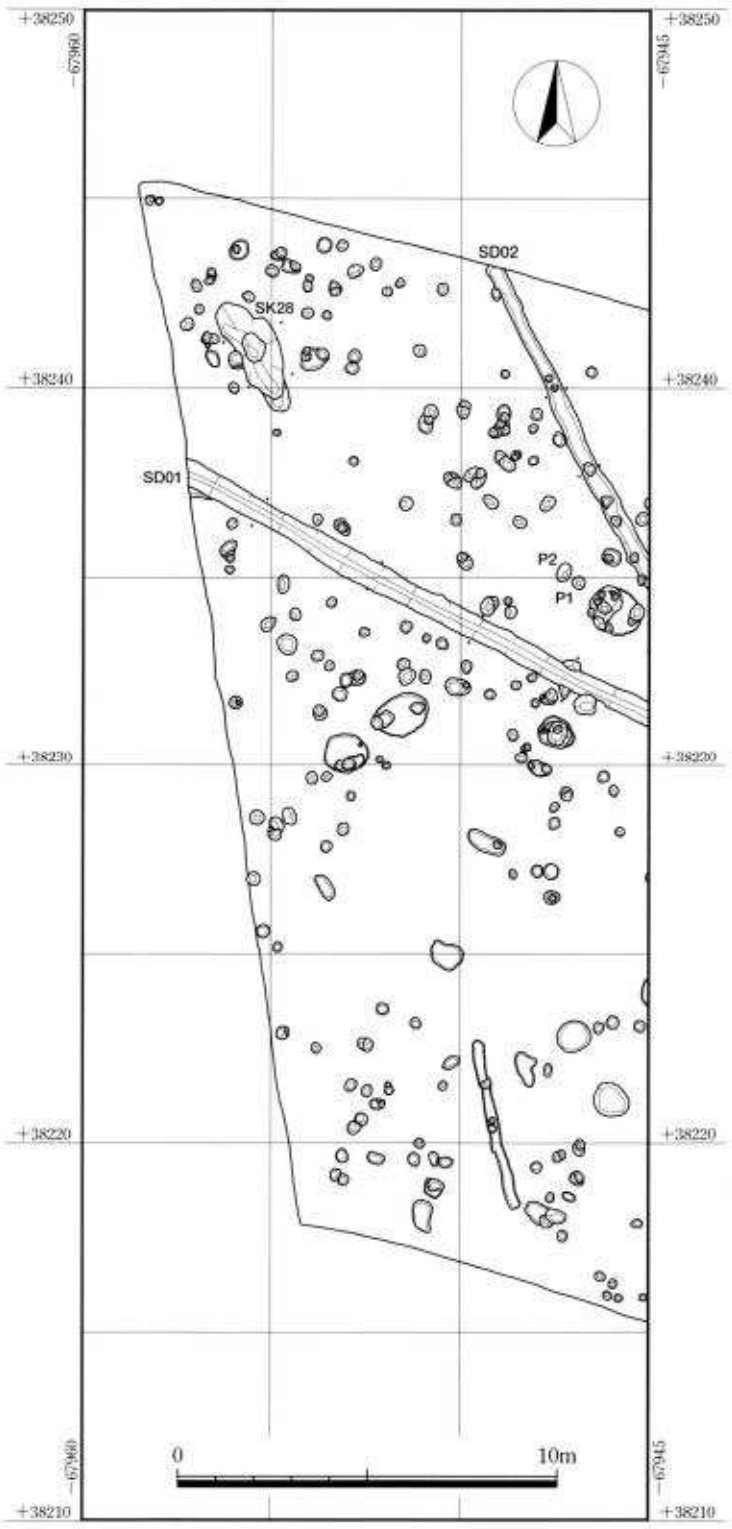
ＳＫ０４ (第25図)G－6～7。60×40cm、深さ23cm。下底面はやや傾斜するが15cm幅で平ら。

ＳＫ０５ (第25図)M－8。75×62cm、深さ34cm。楕円形をした椀状の落ち込みの下に杭穴(＝底径10cm)があるが、上層と杭穴との関わりはわからない。

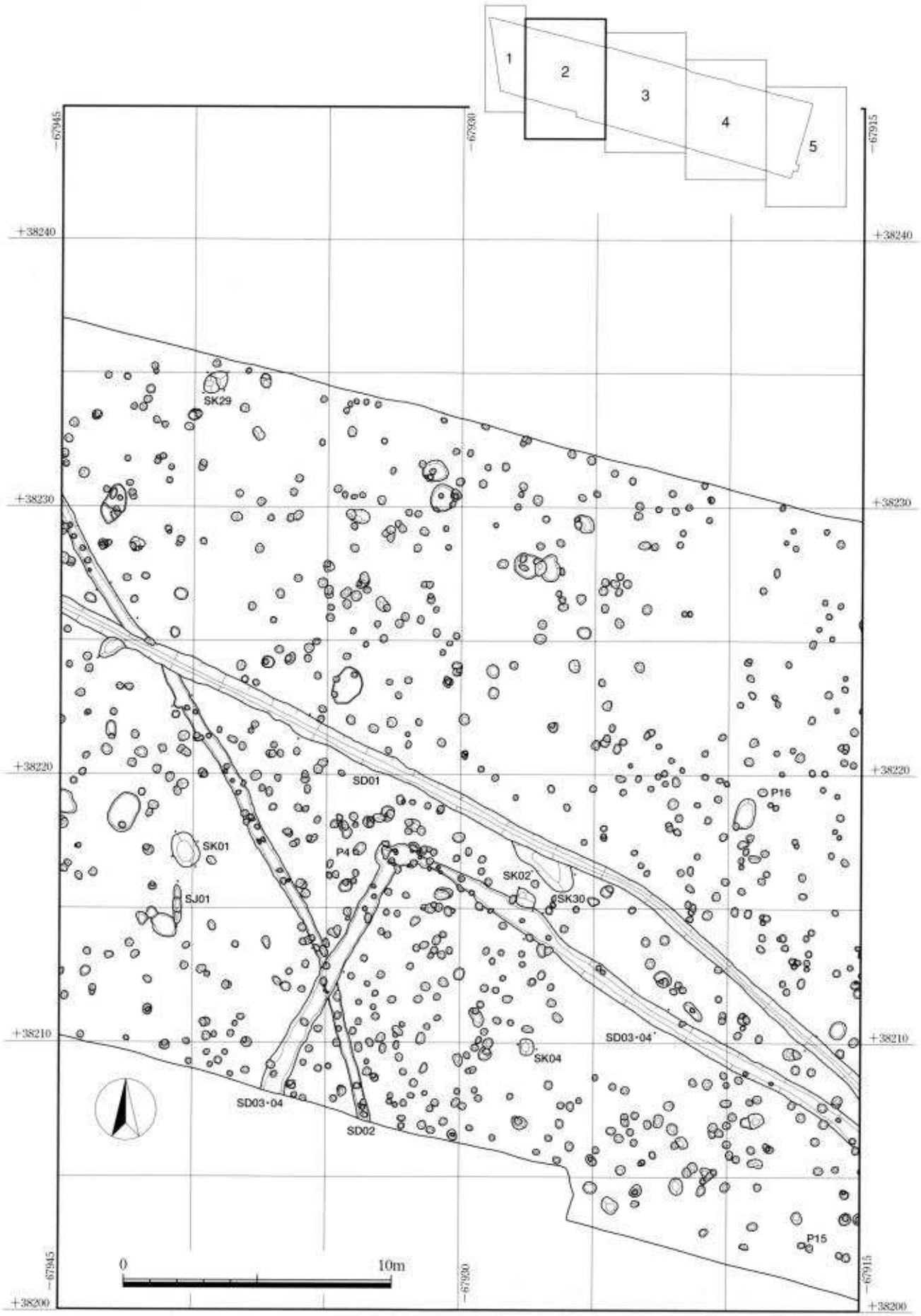
ＳＫ０６ (第25図)N～O－5。175×170cm、深さ28cm。円形に近く、かなりの容量を持つが、用途、時期ともによくわからない。

ＳＫ０７ (第26図)N－5。90×62cm、深さ45cm。SK06から西に10cmの距離だが関わりは不明。
ＳＫ０８ (第26図)Q－7。110×102cm、深さ18cm。緩やかに傾斜する。
ＳＫ０９ (第26図)P－10。102×85cm、深さ23cm。SB01のP10・11間に位置するが、関わり不明。
ＳＫ１０ (第27図)Y－8。110×34cm以上、深さ34cm。調査区東端ラインにかかるため正確な大きさは不明。下底はほぼ平ら。
ＳＫ１１ (第27図)T－8。75×72cm、深さ21cm。上層たまりに1cm大の炭化材があるほか、多量の炭化材と少量の焼土を含有する土が下底まで覆う椀状の落ち込みである。SB03のP4の北西20cmの距離に位置し、これに伴うものと考えられる。
ＳＫ１２ (第27図)T－8。93×87cm、深さ15cm。ただし最深部は別遺構と考えられるため平らな箇所の11cmを深さと見るべきであろう。カーボンと焼土を含む層を持ち、また下底面に被熱部がある。SB03のP3の北西20cmの距離にあり、SK11とSB03との位置関係に似ている。SK11とSK12が対のものだった可能性がある。
ＳＫ１３ (第28図)R－7。80×74cm、深さ15cm。地山ブロックとカーボンを含有する黒褐色砂壌土ただ1層で占められる。近世以降の新しいもの。
ＳＫ１４ (第28図)U～V－9。94×89cm、深さ33cm。
ＳＫ１５ (第29図)X－8～9。205×175cm、深さ30cm。SB05・06の東60cmだが関わり不明。
ＳＫ１６ (第28図)U－7。72×52cm、深さ8cm。1～2cmの炭化材を含む炭層だが、被熱面なし。
ＳＫ１７ (第29図)R－9。168×160cm、深さ23cm。抜根跡の可能性あり。
ＳＫ１８ (第30図)S－9。110×72cm、深さ36cm。SB03内に位置するが、風倒木の可能性あり。
ＳＫ１９ (第30図)Q－7。90×70cm、深さ20cm。
ＳＫ２０ (第31図)V－8。155×155cm、深さ32cm。いずれも破片であるが、須恵器3点、土師器2点と、砥石1点を出土。
ＳＫ２１ (第32図)P－8～9。40×25cm、深さ17cm。底は直径約30cmとなり、洗面器状の円形落ち込みである。位置はSB01のP5の真北約200cmで、覆土に焼土の含有があるが、両者の関係は不明。
ＳＫ２２ (第32図)R－10。105×90cm、深さ21cm。
ＳＫ２３ (第30図)W－11～X－12。240×210cm、深さ45cm。標高8.800m付近が現況面で、その下8.720～8.650mまでが耕作土、その直下に遺物を検出した層となる。外周の標高が8.600m前後、7点の遺物の検出地点が8.490～8.622mの範囲となるので、遺物とともに飛んでいる可能性は否めない。加賀焼、須恵器、土師器が出土する。
ＳＫ２４ (第32図)T－11。調査区南壁に切られているが推定して120×70cm、深さ28cm。土師器片1点が出土するが、詳細不明。
ＳＫ２５ (第31図)X－9。65×56cm、深さ13cm。5mm～1cmの焼土ブロックを含有するが下底面に被熱面は確認できない。
ＳＫ２６ (第31図)W－8～X－9。155×130cm、緩やかな曲線を描く部位での深さ17cm、最深部39cm。直径20～40cmの円筒形のくぼみが複数入るが、柱穴かどうか不明。
ＳＫ２７ (第32図)X－10。100×80cm以上。周囲に異なる色調の混在する箇所があったためにSK27の東端から調査区東端にかけてトレンチを掘ったため、SK27の境界がはっきりしない。地山ブロックを含有する包含層の堆積があるが遺物はない。
ＳＫ２８ (第33図)A－1～B－2。330×135cm、深さ50cm強。明瞭な掘り込みのない不定形落ち込み。
ＳＫ２９ (第34図)E－1～2。100×67cm、深さ20cm。
ＳＫ３０ (第33図)G－5。85×65cm、深さ40cm。SD04に切られる。
ＳＫ３１ (第35図)L－5。140×105cm、深さ26cm。SD05の下から検出。
ＳＫ３２ (第35図)P～Q－6。110×105cm、深さ25cm。縄文土器と土師器が検出されている。縄文土器の検出地点は、下底面の直上である3層である。
ＳＫ３３ (第34図)。O－5。110×102cm、深さ26cm。ピットの集合体と呼ぶべきもの。

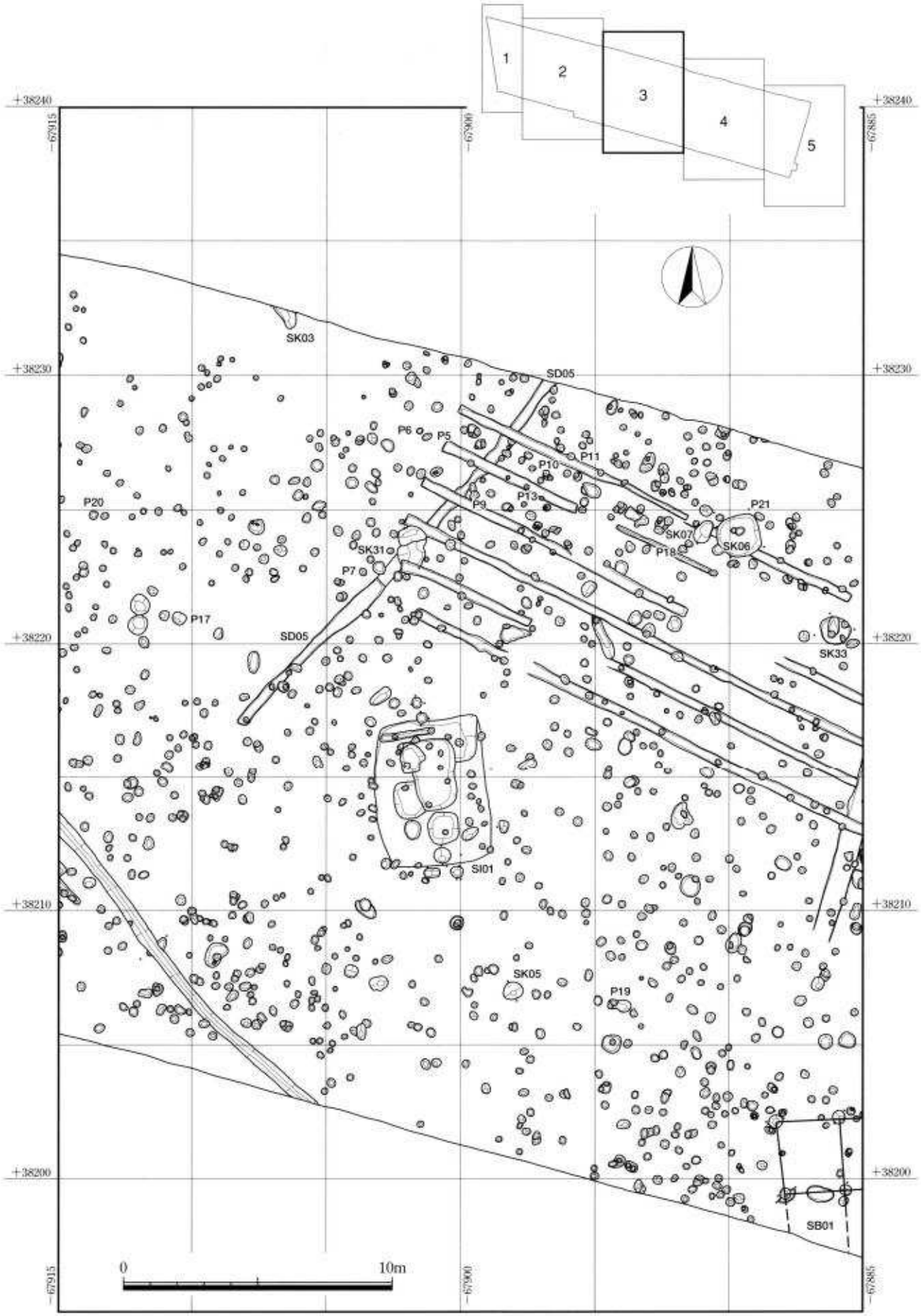




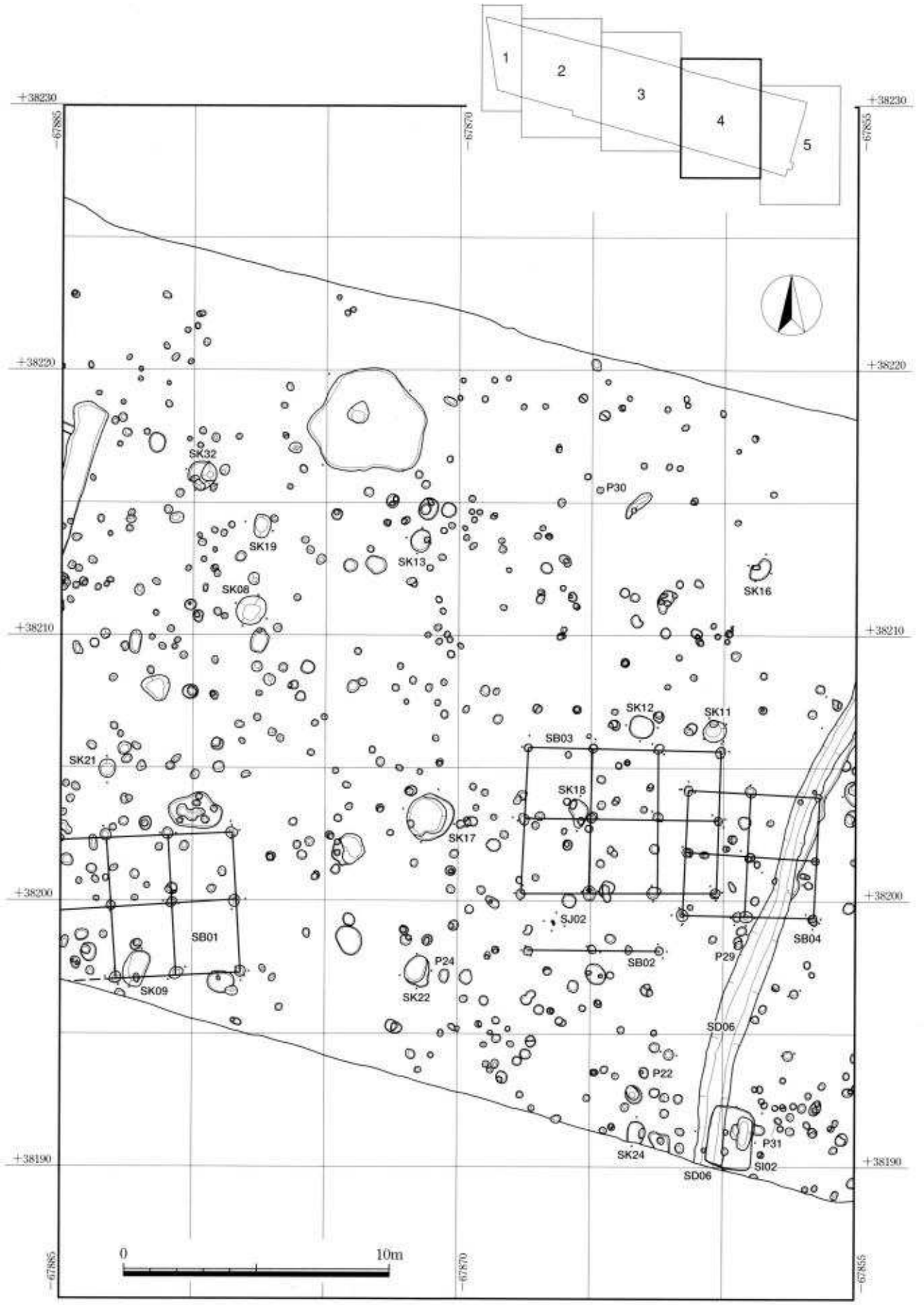
第6-1図　刀何理遺跡　平面図1（S＝1/200）



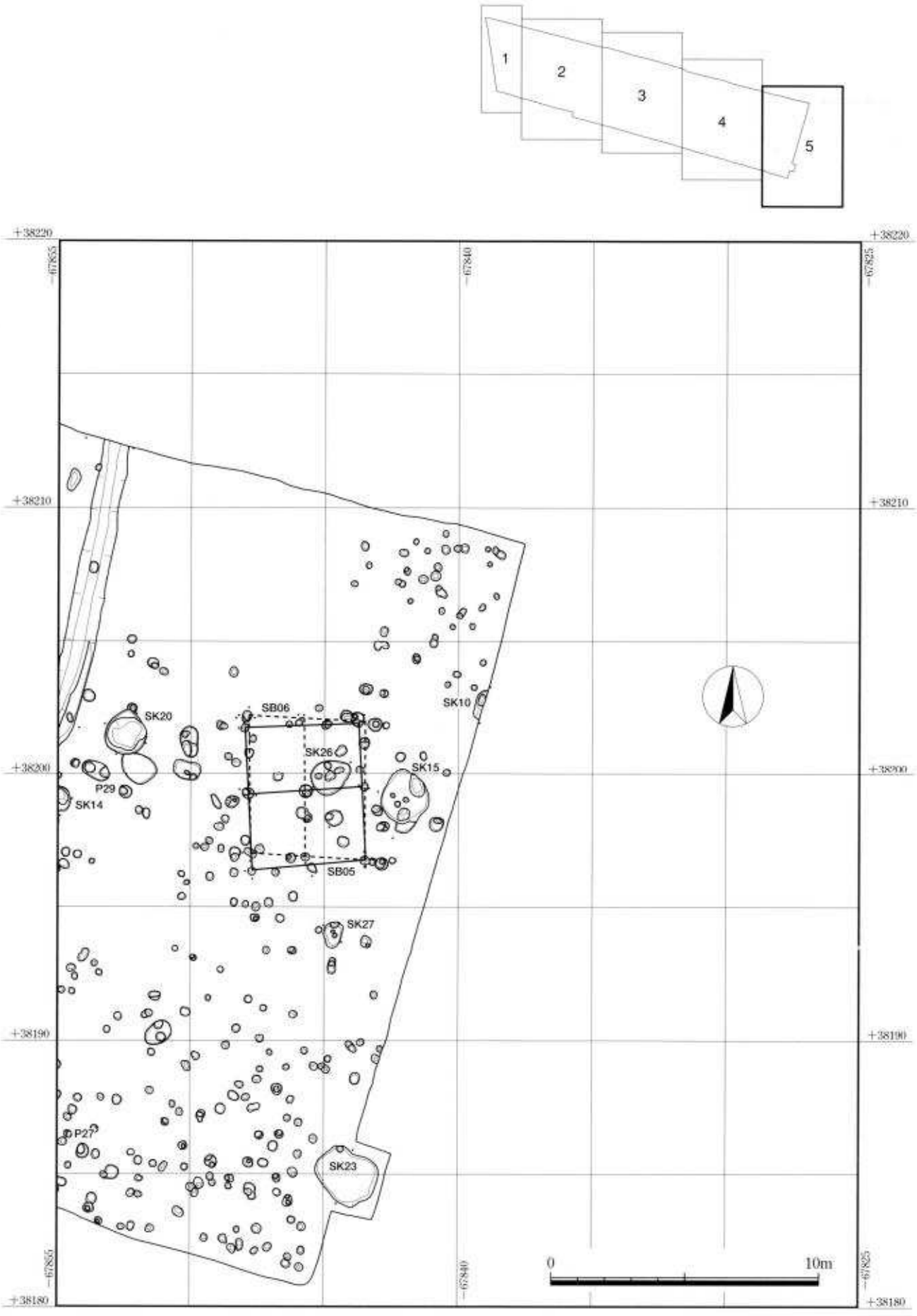
第 6 - 2 図　刀何理遺跡　平面図 2 （S＝1/200）



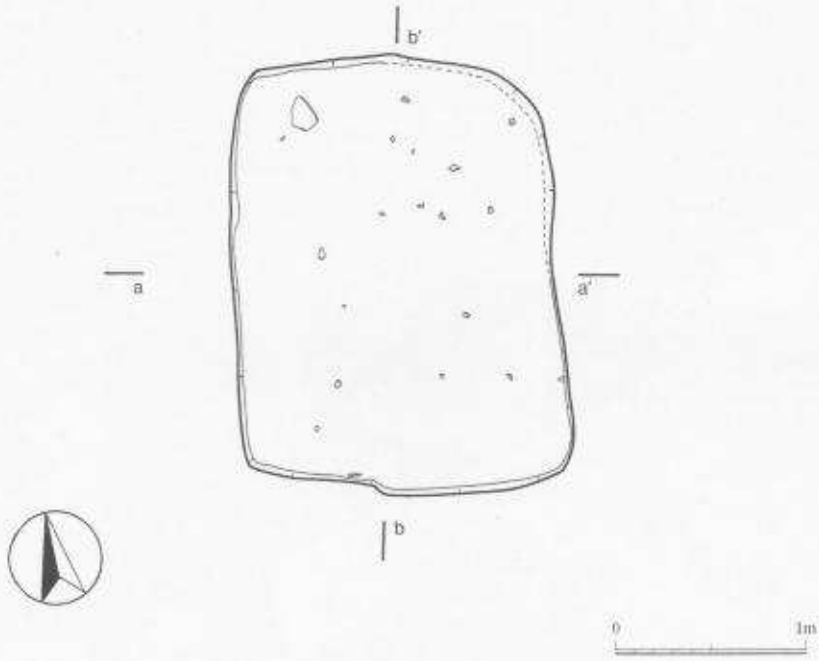
第6・3図　刀何理遺跡　平面図3（S＝1/200）



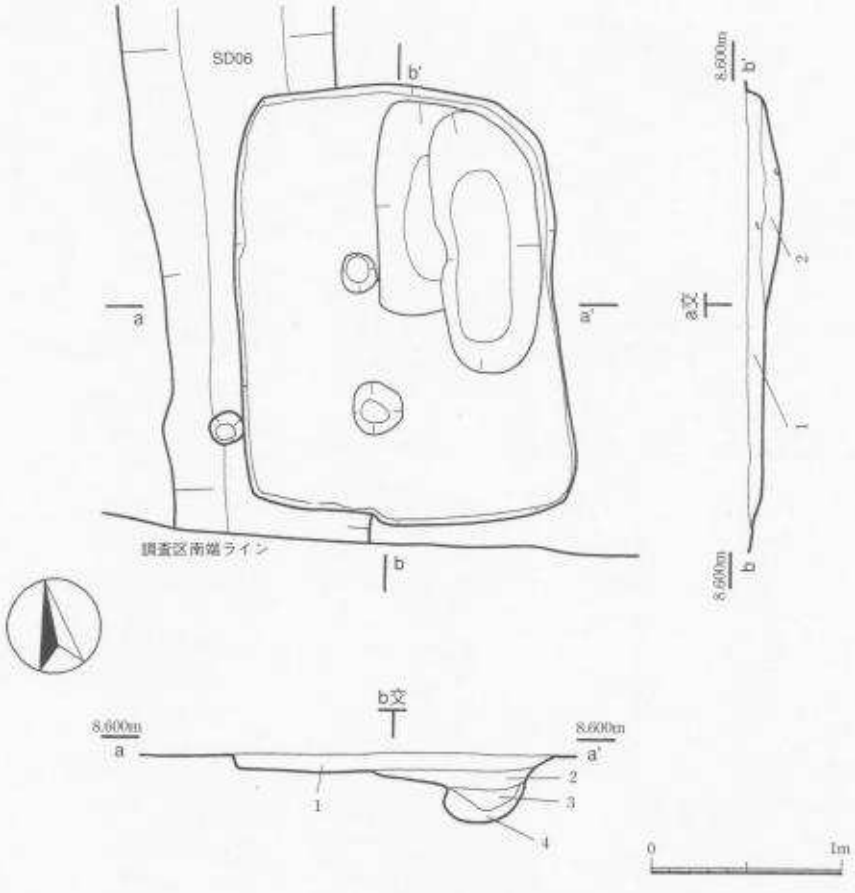
第 6 - 4 図　刀何理遺跡　平面図 4 （S＝1/200）



第6-5図　刀何理遺跡　平面図5（S＝1/200）



第7図　SI02 遺物・床面出土状況図（S＝1/40）



SI02　床セクション土層註

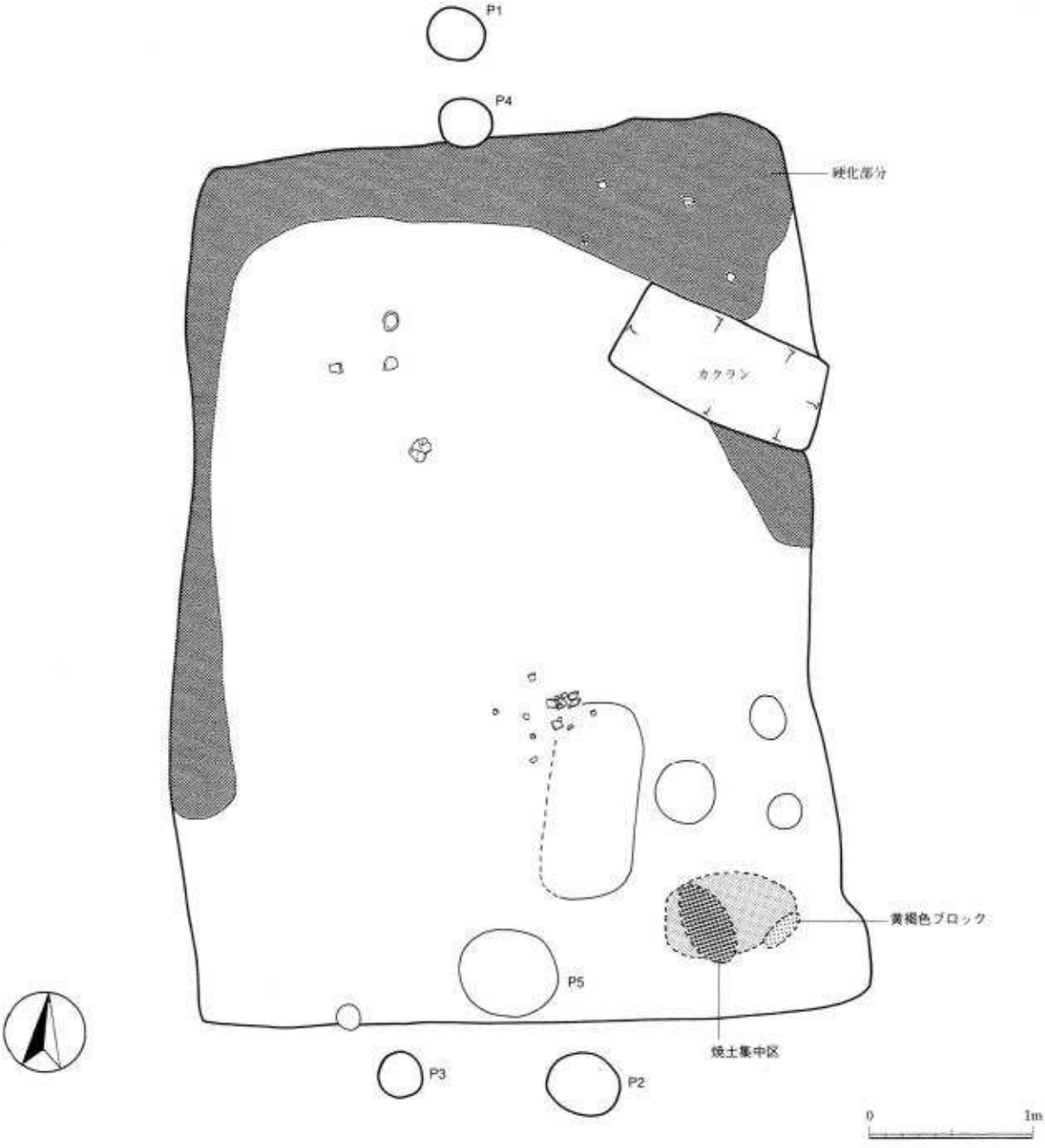
1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。しまり良く、1cm程度のカーボン及び焼土ブロック含有。なお下底面に整地面と思われる硬化部分あり。土器含有層。

2層　：10YR2/2～2/3 黒褐色砂壌土。1層に比しやや明るめ。3割程度地山ブロック含有。掘り方埋土。

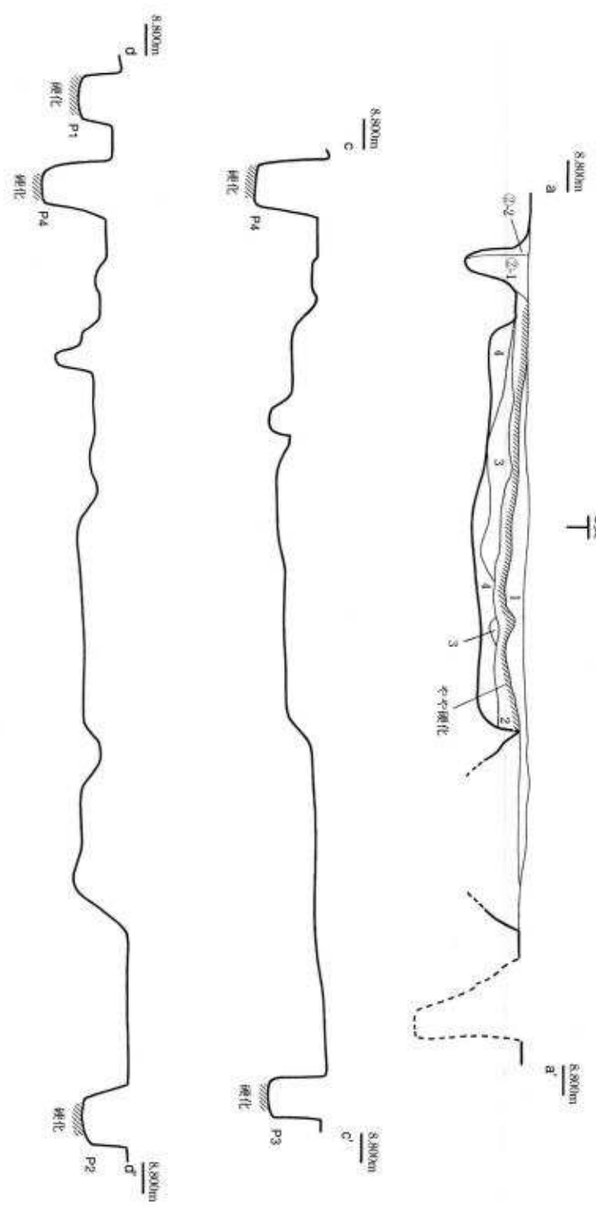
3層　：10YR3/3～4/4 暗褐色～褐色壌土。暗褐色土をメインに6割程度地山ブロック含有。

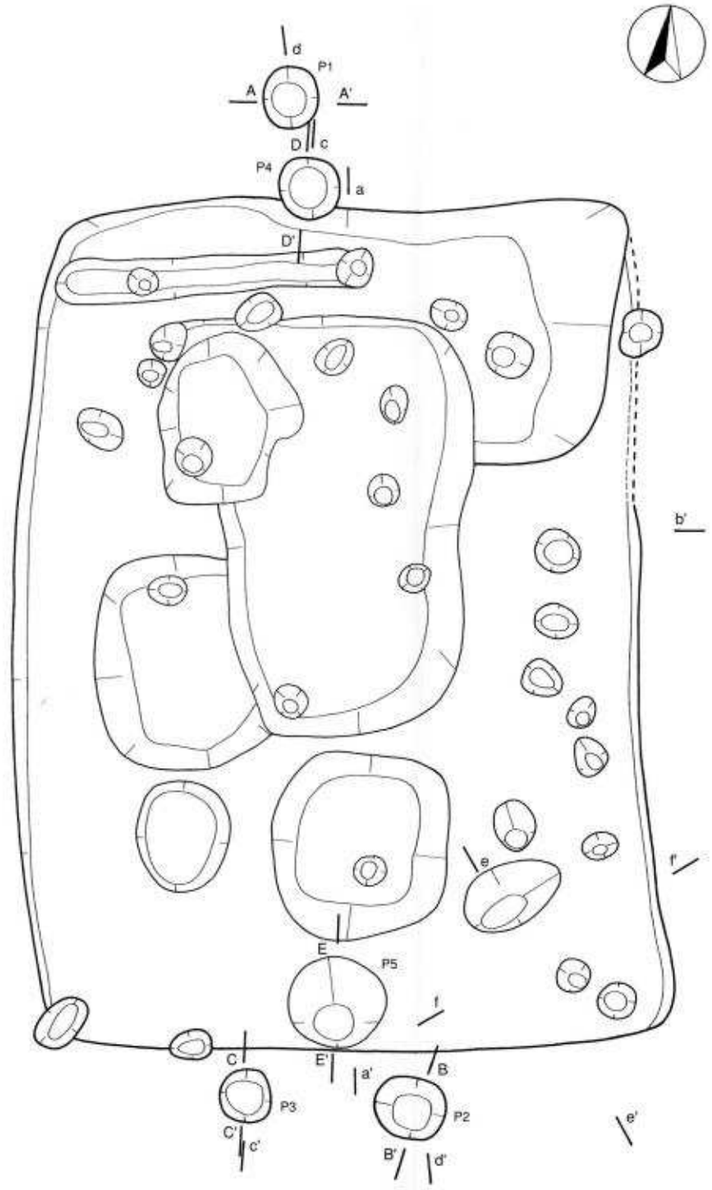
4層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。1・2層に比し、黒色みが強い。

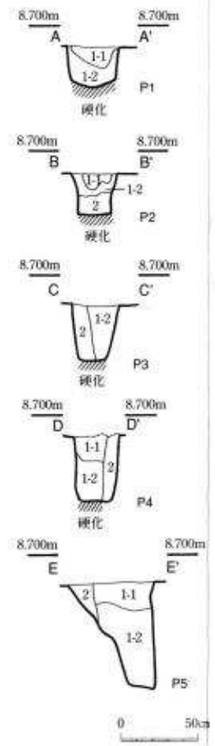
第8図　SI02 平面図・断面図（S＝1/40）



第9図　SI01 床面・遺物出土状況図（S＝1/40）





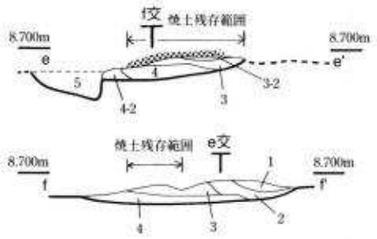


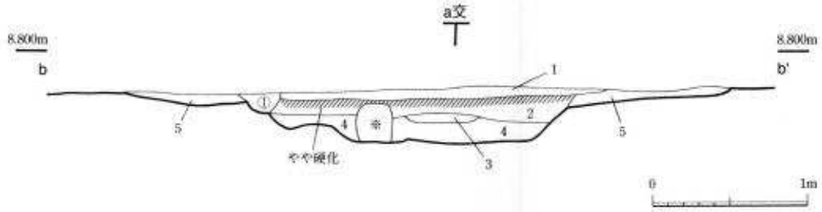
SI01　柱穴土層註（P1～P5）

P1　(A-A')　1-1層　：10YR2/2黒褐色砂壌土。3割程度地山ブロック含有。5mm程度のカーボン含有。
　　1-2層　：10YR2/2～2/3黒褐色砂壌土。1-1層に比べやや明るめ。
P2　(B-B')　1-1層　：10YR3/3 黒褐色砂壌土。暗褐色砂壌土をメインとし5割程度の地山ブロック含有。
　　2層　：10YR4/4～3/3褐色～暗褐色砂壌土。5割強地山ブロック。しまり悪し。
P3　(C-C')　1-2層　：10YR2/3黒褐色砂壌土。地山ブロックの含有あり。
　　2層　：10YR2/2黒褐色砂壌土をメインとし、4割程度地山ブロックを含有。掘り方。
P4　(D-D')　1-1層　：10YR2/3黒褐色砂壌土。5mm程度のカーボン含有。均質。
　　1-2層　：10YR2/3黒褐色砂壌土。1-1層に比し、地山ブロックの含有がありやや明るめ。
　　2層　：10YR2/2黒褐色砂壌土をメインとし、4割程度地山ブロックを含有。掘り方。
P5　(E-E')　1-1層　：10YR2/3黒褐色砂壌土をメインとし、3-4cm程度の地山ブロックを4割程度含有。
　　1-2層　：基本的に1-1層と同様のものをメインとし、地山ブロック比率が6割程度と高い。
　　2層　：10YR3/3～2/3暗褐色～黒褐色砂壌土。少量であるが地山粒含有。

SI01　焼土部分土層註（e-e'，f-f'）

1層　：10YR2/1黒色砂壌土。少量であるが1cm程度の焼土ブロック含有。
2層　：10YR2/3黒褐色砂壌土。1～2cm程度の焼土ブロック含有。5mm程度のカーボン含有。
3層　：10YR3/3暗褐色砂壌土。2層に比べてやや明るめ。2層以上に焼土ブロック多い。
3-2層　：3層に比べて焼土の含有多い。
4層　：10YR4/4褐色壌壌土。しまり良く部分的に焼土ブロック含有。
4-2層　：5YR5/6明赤褐色壌壌土。被熱面。
5層　：10YR2/2黒褐色砂壌土。1cm程度の焼土ブロック含有。

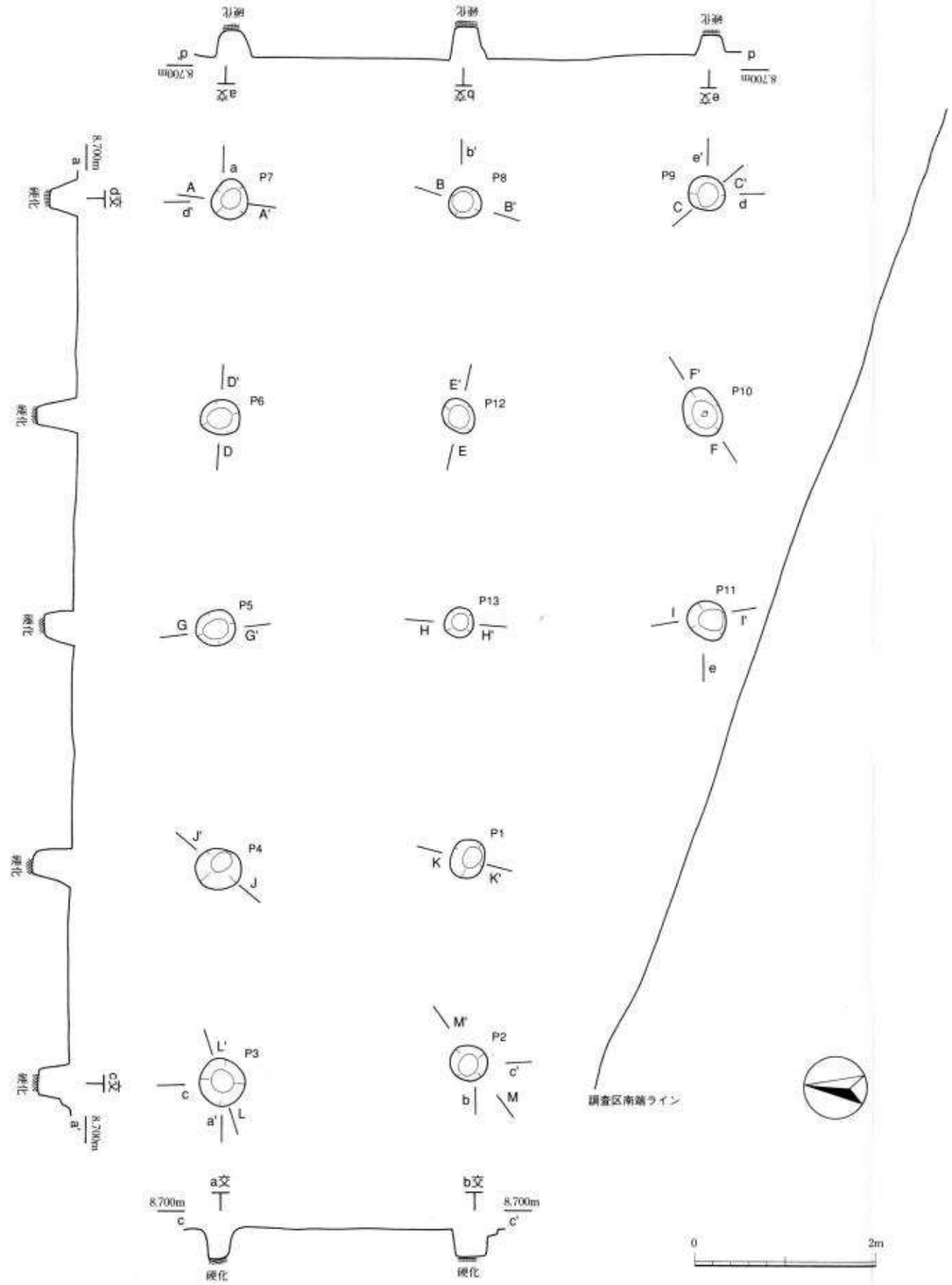


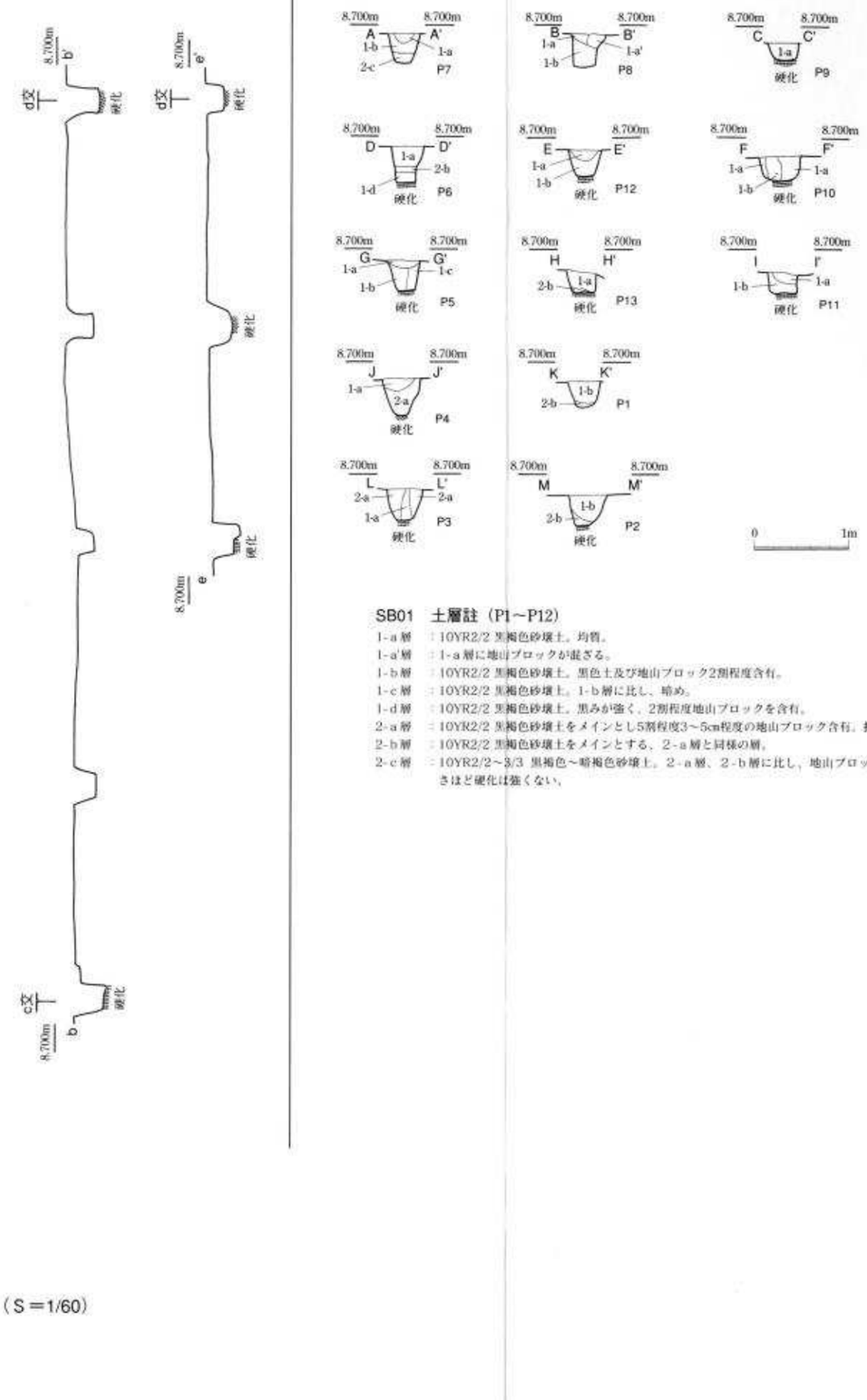


SI01　床セクション土層註（a-a'，b-b'）

1層　：10YR2/2黒褐色砂壌土。黒色味強く、部分的にカーボン。焼土粒含有。しまり悪い。
2層　：10YR2/2黒褐色砂壌土。1層に類似するが、上面に硬化部あり。竪穴の本来の床を示す可能性あり。1cm程度の焼土粒多く含有。
3層　：10YR2/2～2/3黒色砂壌土。2層よりも明るめ。焼土粒の量は増す。しまり良い。
4層　：10YR3/3～4/4暗褐色～褐色壌壌土。2～3cm程度の地山ブロック，1cm程度の焼土含有。
5層　：10YR2/3黒褐色砂壌土。下層面は地山（黄褐色土）に漸移する。1cm程度の地山ブロック含有。
①層　：10YR2/2～2/3黒褐色砂壌土。1層に類似。
②-1層　：10YR3/2黒褐色砂壌土。少量であるが焼土の混入あり。
②-2層　：10YR4/4褐色壌壌土。しまり良く、部分的に地山ブロックの混入あり。掘り方。
※　：1層の落ち込み状のブロックか？

第10図　SI01 平面図・断面図（S＝1/40）

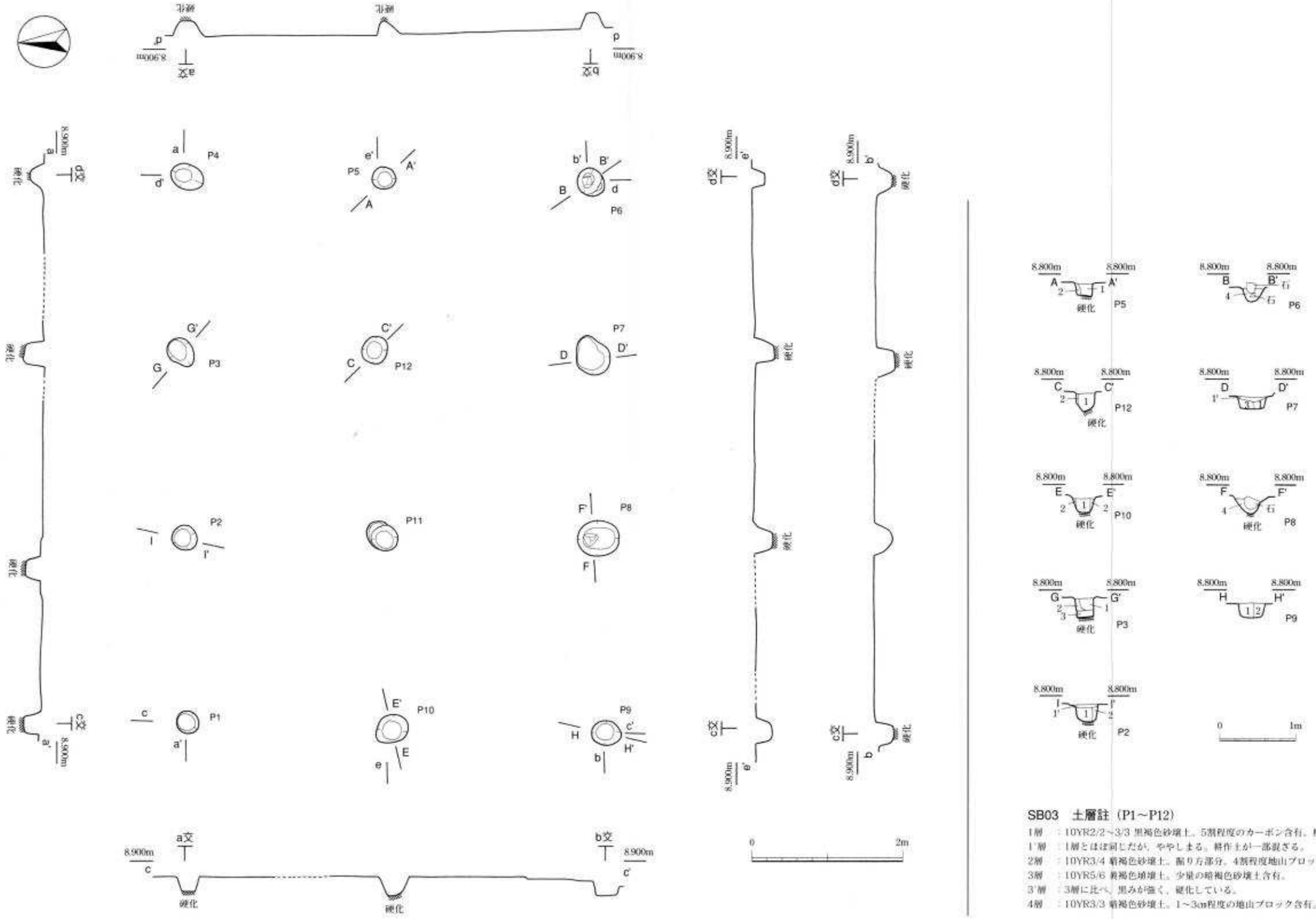




SB01　土層註（P1～P12）

1-a層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。均質。
1-a'層　：1-a層に地山ブロックが混ざる。
1-b層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。黒色土及び地山ブロック2割程度含有。
1-c層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。1-b層に比し、暗め。
1-d層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。黒みが強く、2割程度地山ブロックを含有。
2-a層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土をメインとし5割程度3～5cm程度の地山ブロック含有。掘り方。
2-b層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土をメインとする、2-a層と同様の層。
2-c層　：10YR2/2～3/3 黒褐色～暗褐色砂壌土。2-a層、2-b層に比し、地山ブロックが小さめで、きほど硬化は強くない。

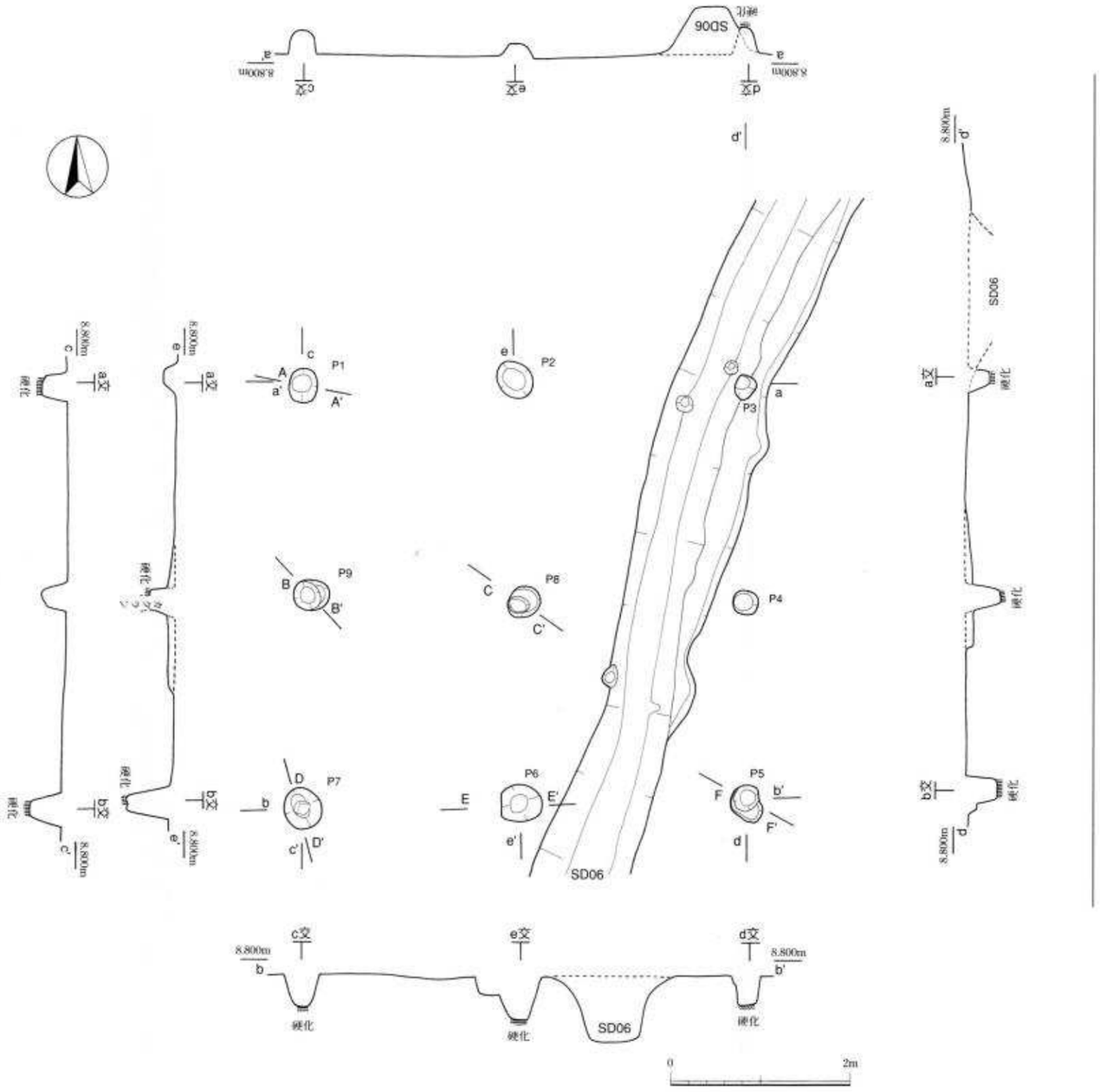
第11図　SB01 平面図・断面図（S＝1/60）

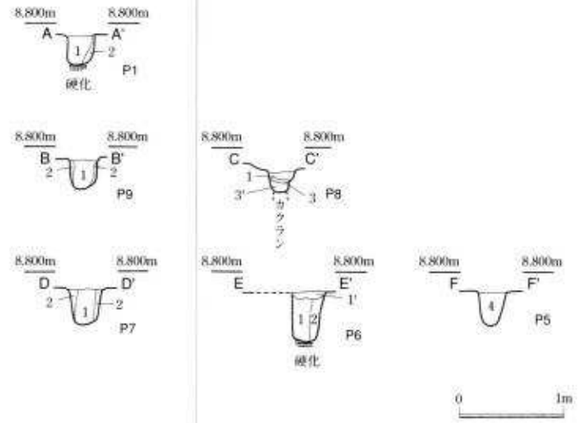


SB03　土層註（P1～P12）

1層　：10YR2/2～3/3 黒褐色砂壌土。5割程度のカーボン含有。柱根部分と思われる。
1'層　：1層とほぼ同じだが、ややしまる。耕作土が一部混ざる。
2層　：10YR3/4 暗褐色砂壌土。掘り方部分。4割程度地山ブロック含有。
3層　：10YR5/6 黄褐色壌質土。少量の暗褐色砂壌土含有。
3'層　：3層に比べ、黒みが強く、硬化している。
4層　：10YR3/3 暗褐色砂壌土。1～3cm程度の地山ブロック含有。1cm程度のカーボン含有。

第12図　SB03 平面図・断面図（S＝1/60）

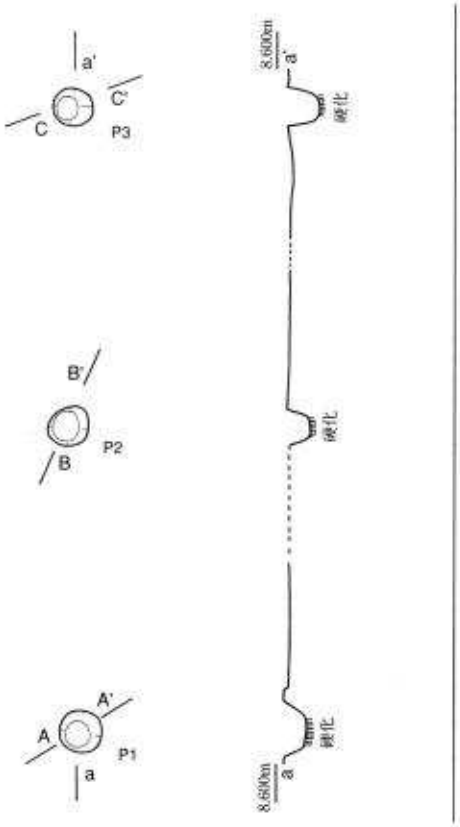


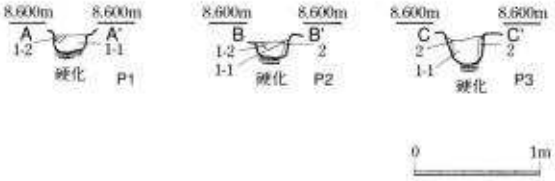


SB04　土層註（P1～P9）

1層　：10YR2/2～3/3 黒褐色砂壌土。5㎜程度のカーボン含有。柱根部分と思われる。
1'層　：1層とほぼ同じだが、ややしまる。積作土が一部混ざる。
2層　：10YR3/4 暗褐色砂壌土。掘り方部分。4㎜程度地山ブロック含有。
3層　：10YR5/6 黄褐色埴壌土。少量の暗褐色砂壌土含有。
3'層　：3層に比べ、黒みが強く、硬化している。
4層　：10YR3/3 暗褐色砂壌土。1～3㎝程度の地山ブロック含有。1㎝程度のカーボン含有。

第13図　SB04 平面図・断面図（S＝1/60）

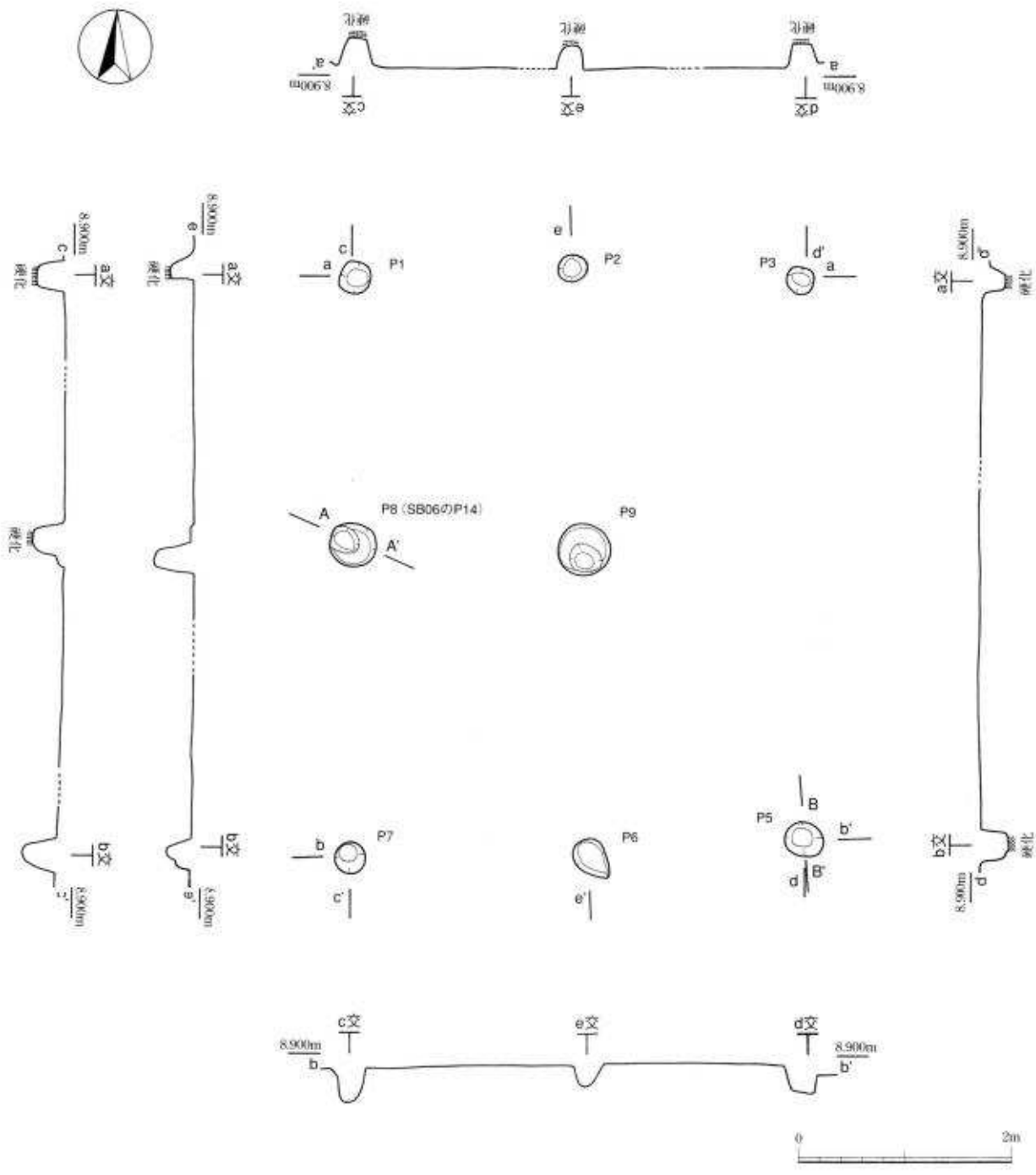


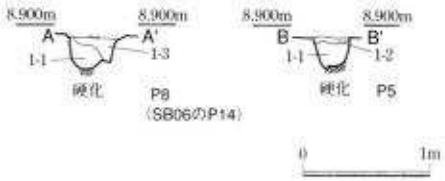


SB02　土層註（P1－P3）

1-1層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。5mm程度の地山ブロックを少量含有。
1-2層　：10YR3/3 暗褐色壌壌土。地山ブロック及び5mm程度のカーボン含有。
2層　　：10YR3/3～3/4 暗褐色砂壌土。1cm程度の地山ブロック含有。掘り方埋土。

第14図　SB02 平面図・断面図（S＝1/60）

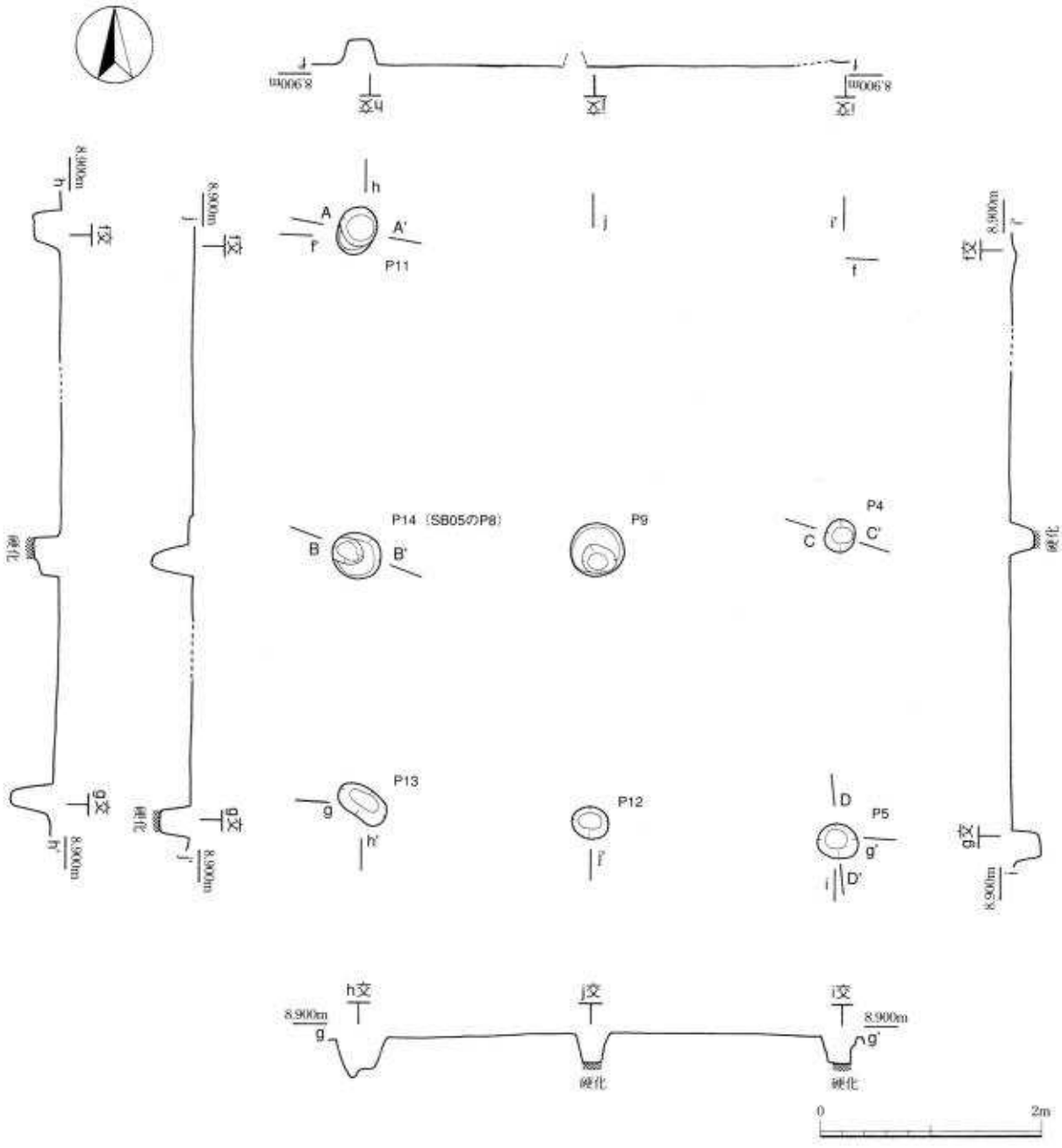


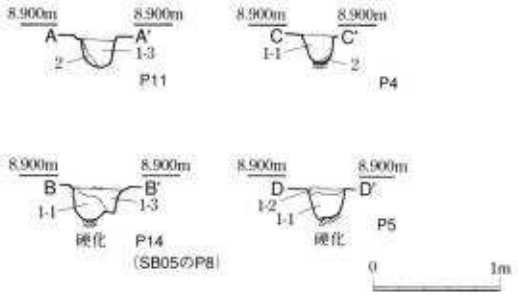


SB05　土層註（SB06と共通）

1-1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。柱穴覆土。少量の地山ブロック含有。
1-2層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。1-1層に比し、地山ブロックの量少ない。
1-3層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。1cm程度の地山ブロック含有。1cm程度のカーボン含有。上面にかわらけ出土。
2層　：10YR4/6～3/4 褐色埴壌土～暗褐色埴壌土。掘り方覆土。

第15図　SB05 平面図・断面図（S＝1/60）

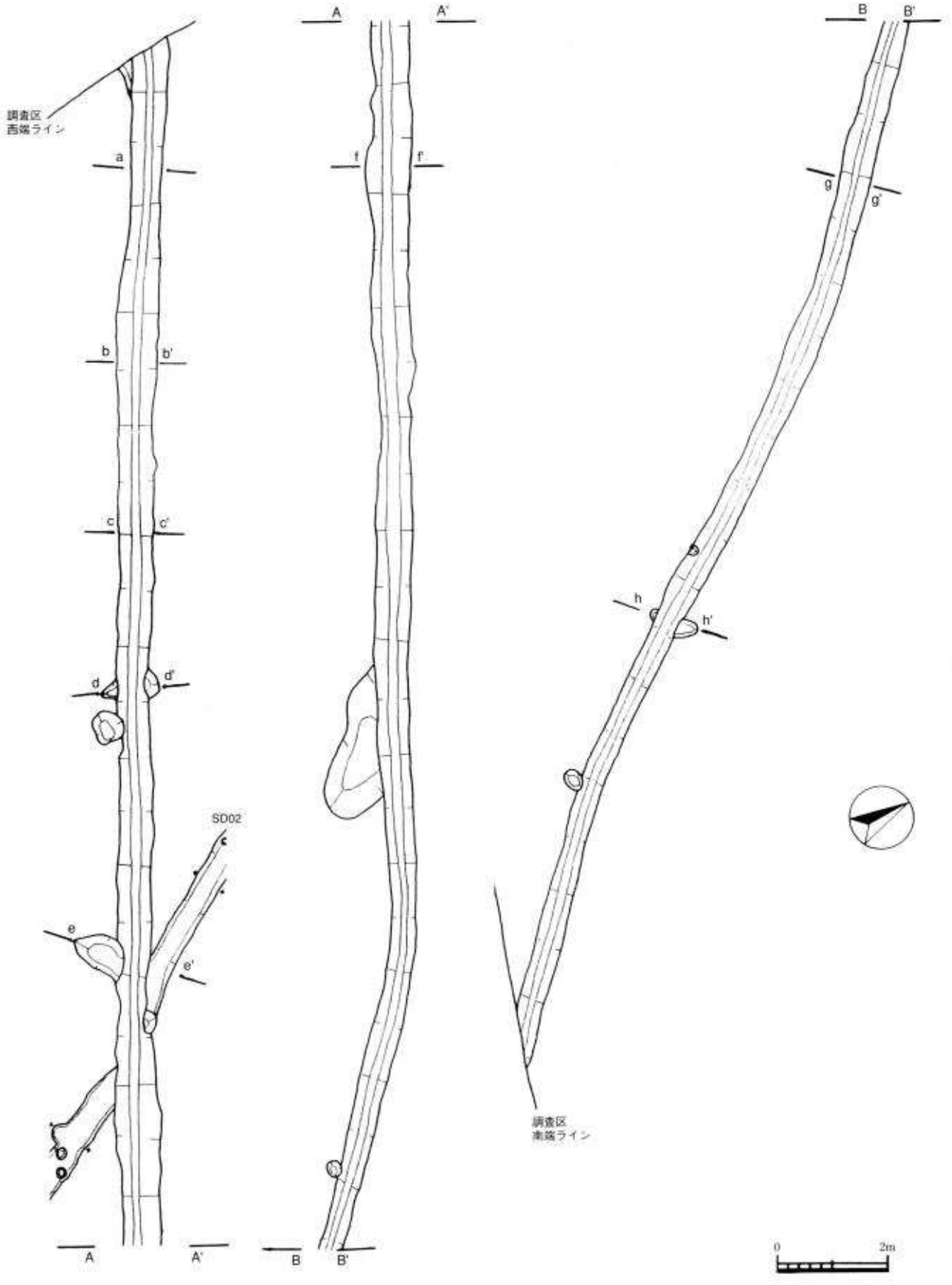




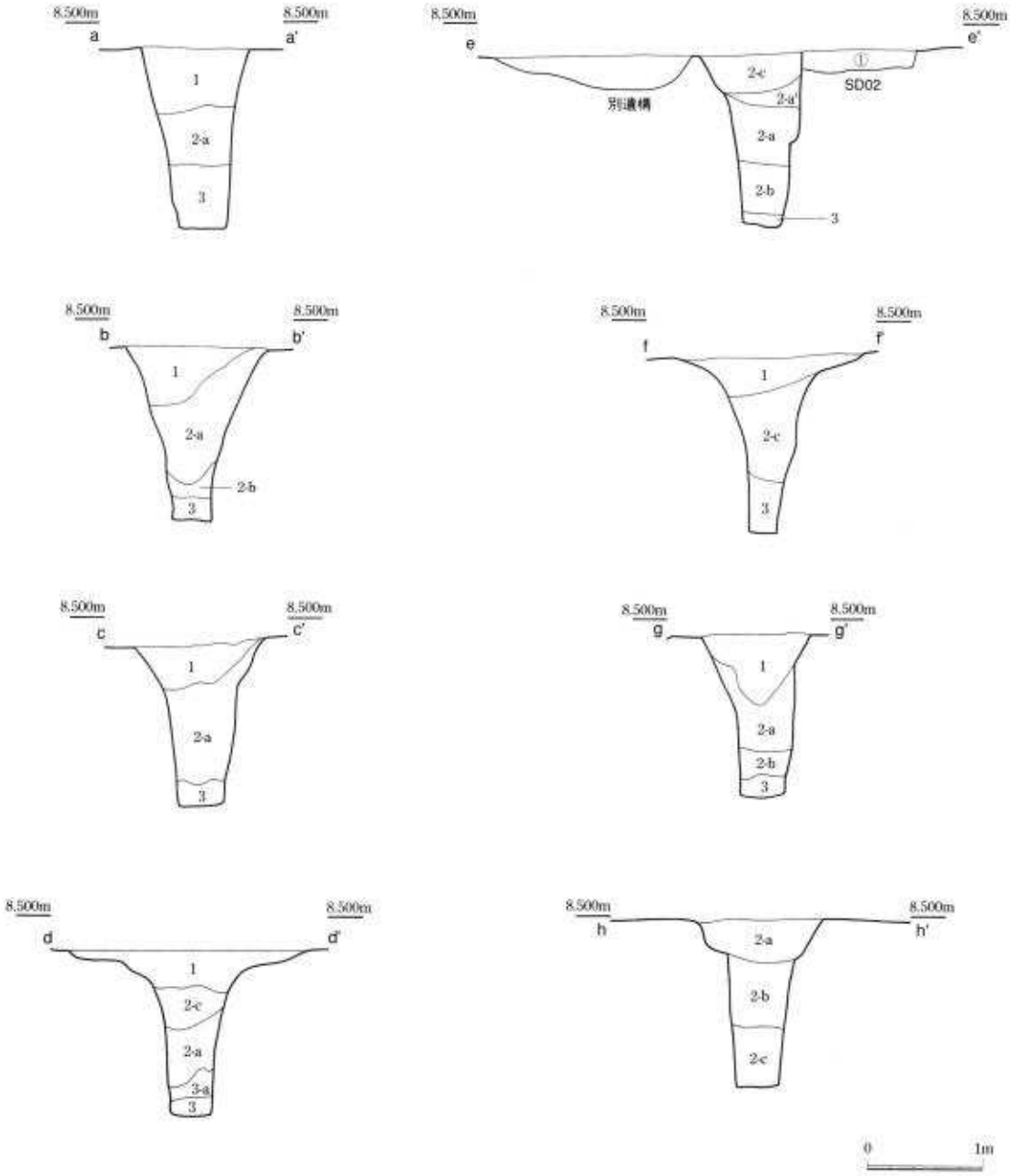
SB06　土層註（SB05と共通）

1-1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。柱穴覆土。少量の地山ブロック含有。
1-2層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。1-1層に比し、地山ブロックの量少ない。
1-3層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。1cm程度の地山ブロック含有。1cm程度のカーボン含有。上面にかわらけ出土。
2層　　：10YR4/6～3/4 褐色～暗褐色細壌土。掘り方覆土。

第16図　SB06 平面図・断面図（S＝1/60）



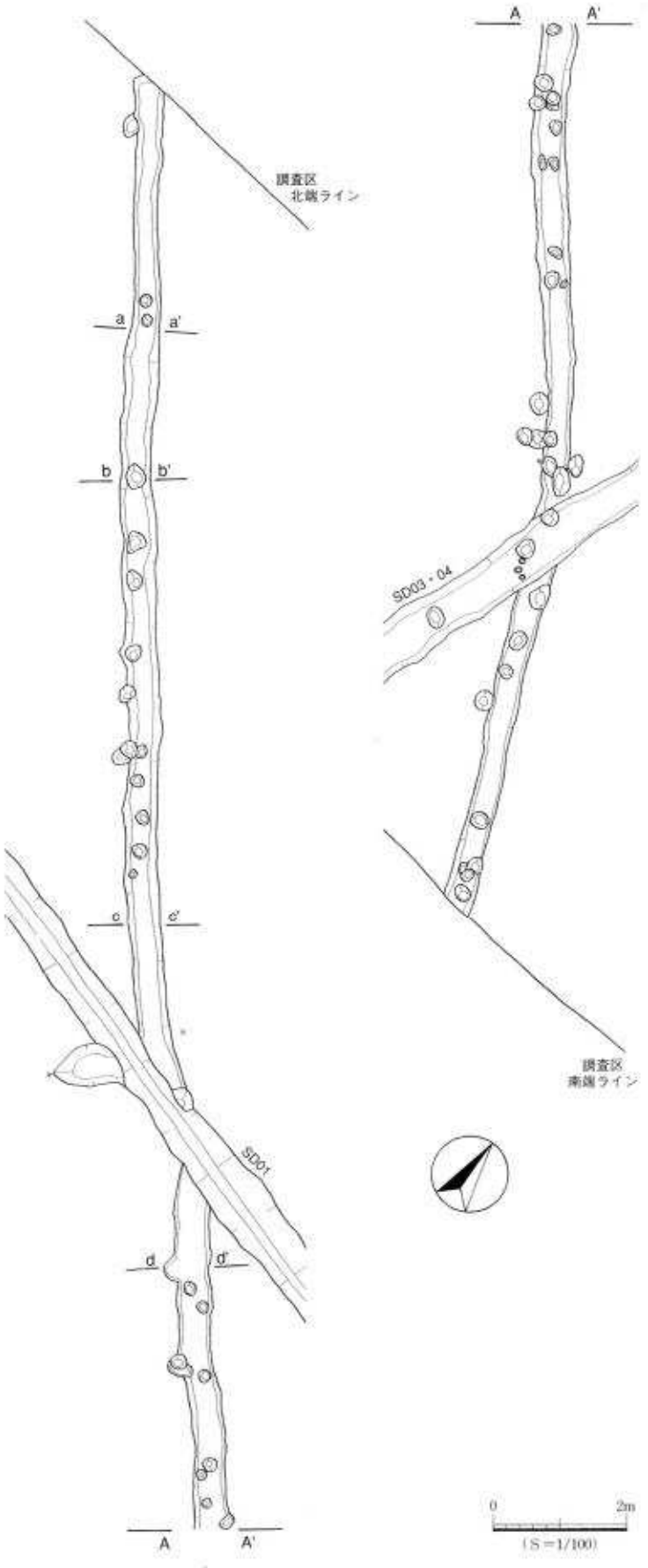
第17図　SD01 平面図（S＝1/100）

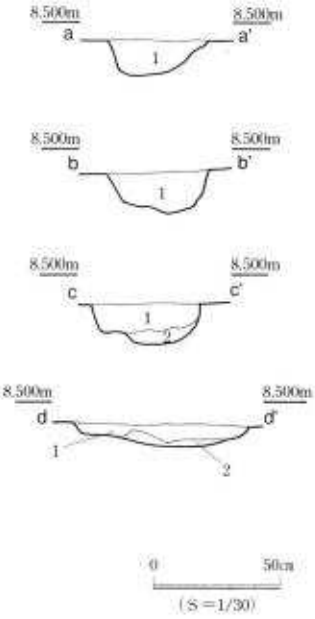


SD01　土層註

1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。上位覆土。少量であるが地山ブロック含有。軟質でしまり悪い。
2-a層　：10YR3/2～10YR8/6 黒褐色砂壌土～黄橙色埴壌土。場所により黄味の強い地山ブロックが5割程度占める。
2-a'層　：基本的に2-a層と同じ。やや地山ブロックが多い。
2-b層　：基本的に2-a層と同じ。やや地山ブロック少ない。
2-c層　：1層との中間漸移層。軟質。
2-c'層　：基本的に2層と同様。やや地山ブロックが多く、6割程度を占める。
3層　：10YR3/2～10YR2/1 黒褐色砂壌土～黒色壌壌土。下底面近くのため、こぶし大の地山ブロックの混入あり。黒色みが強く、しまり良い。
3-a層　：基本的に3層と同じ。黄色ブロックが9割以上を占める。
①層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。SD02 覆土。地山ブロックの含有は少ない。

第18図　SD01 断面図（S＝1/30）





SD02　土層註

a-a'　1層　：10YR3/2～2/3 黒褐色～暗褐色砂壌土。炭系に地山の黄褐色土が混入。層の下部ほど地山の混合が弱い。

b-b'　1層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。ほぼ均質。地山付近のみ黄褐色土混入。全体的にしまり悪い。

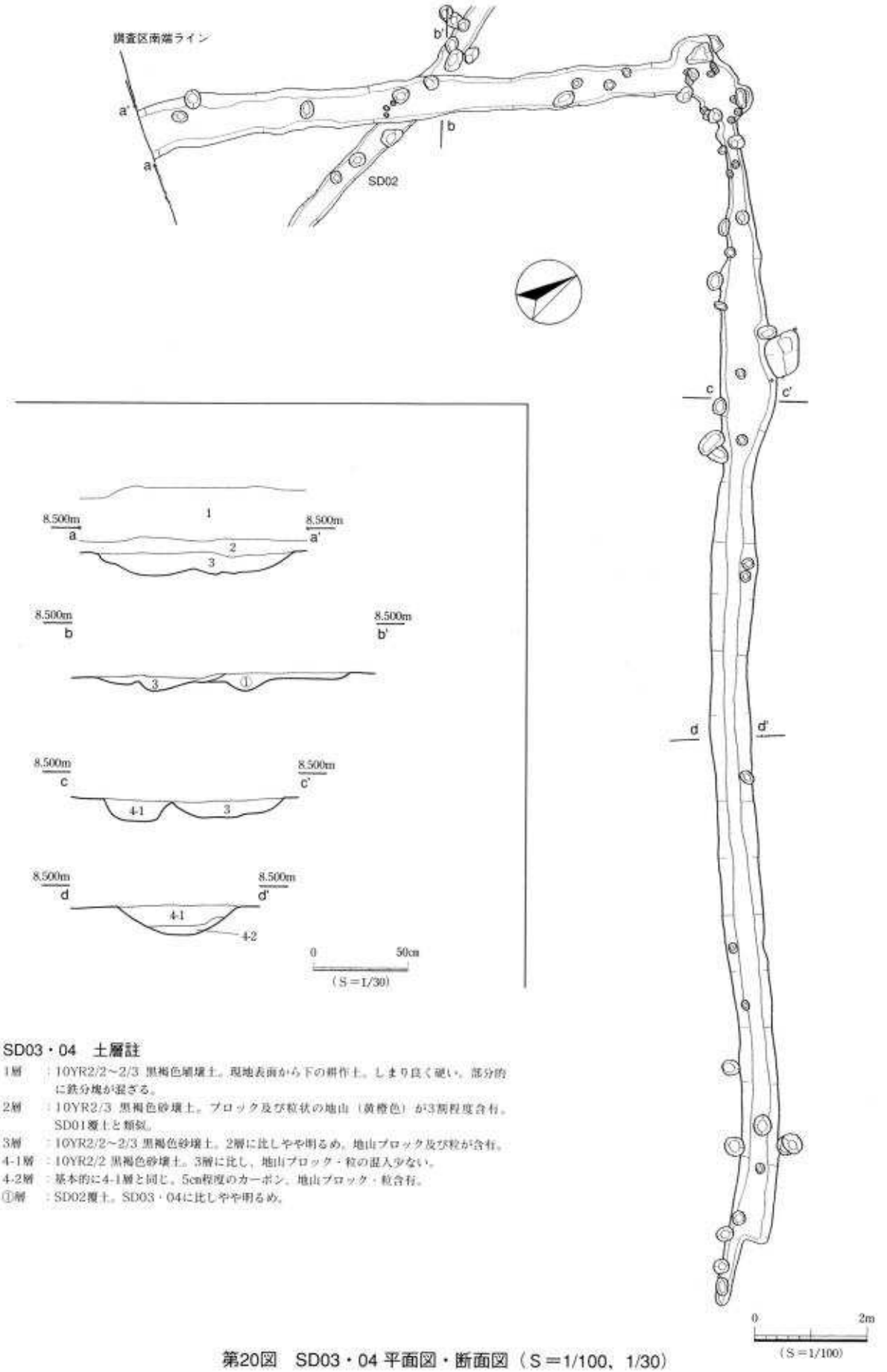
c-c'　1層　：10YR3/1～2/2 黒褐色砂壌土。2～3%の黄褐色地山の土（径mm～1cm程度）を含む。しまり悪い。

　　2層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。5～7%の黄褐色地山の土を含む。

d-d'　1層　：10YR3/1 黒褐色砂壌土。ごく一部に黄褐色土あり。ほぼ均質。しまり悪い。

　　2層　：7.5YR4/3～3/3 褐色～暗褐色埴壌土。黄褐色土をメインに褐色系のやわらかい土が混ざる。

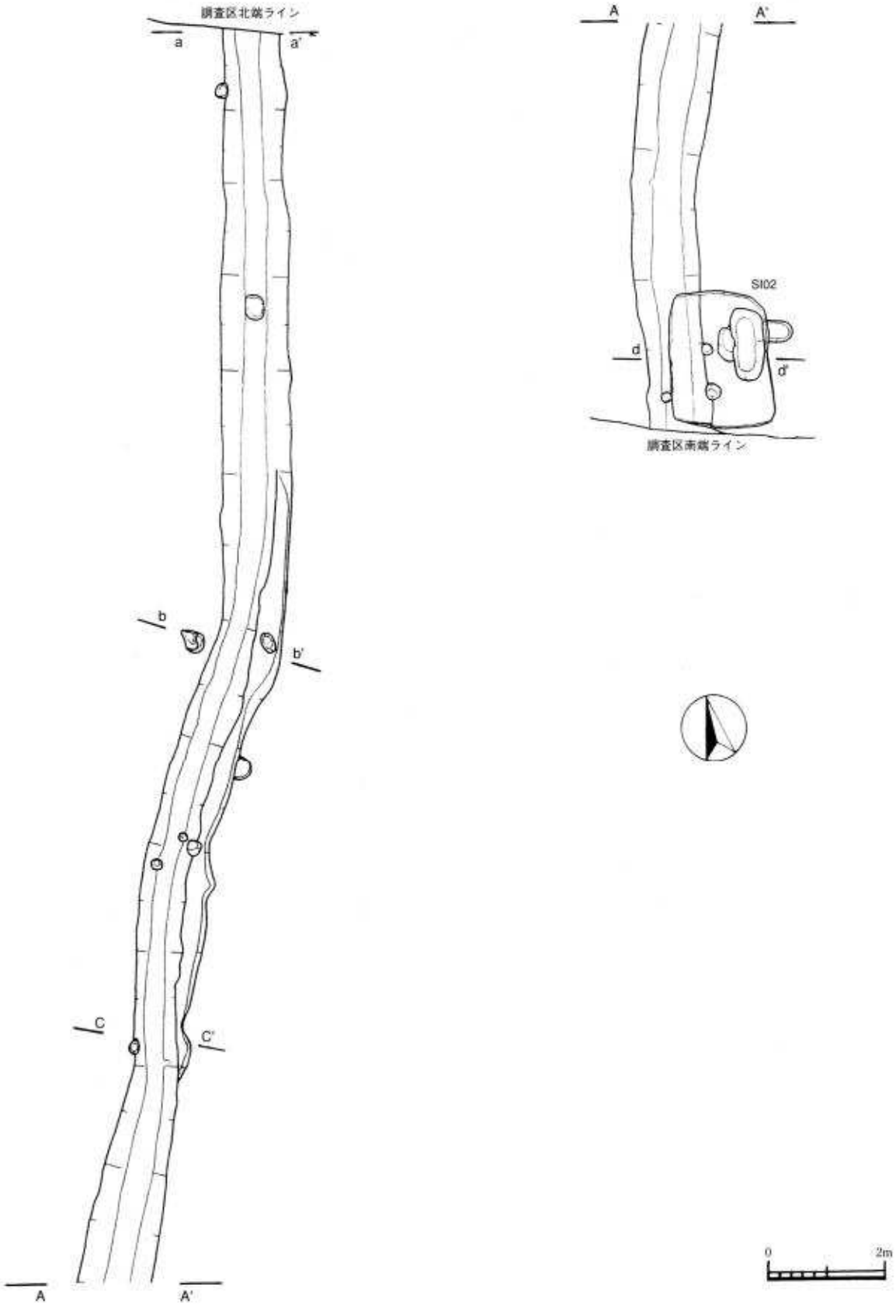
第19図　SD02 平面図・断面図（S＝1/100，1/30）



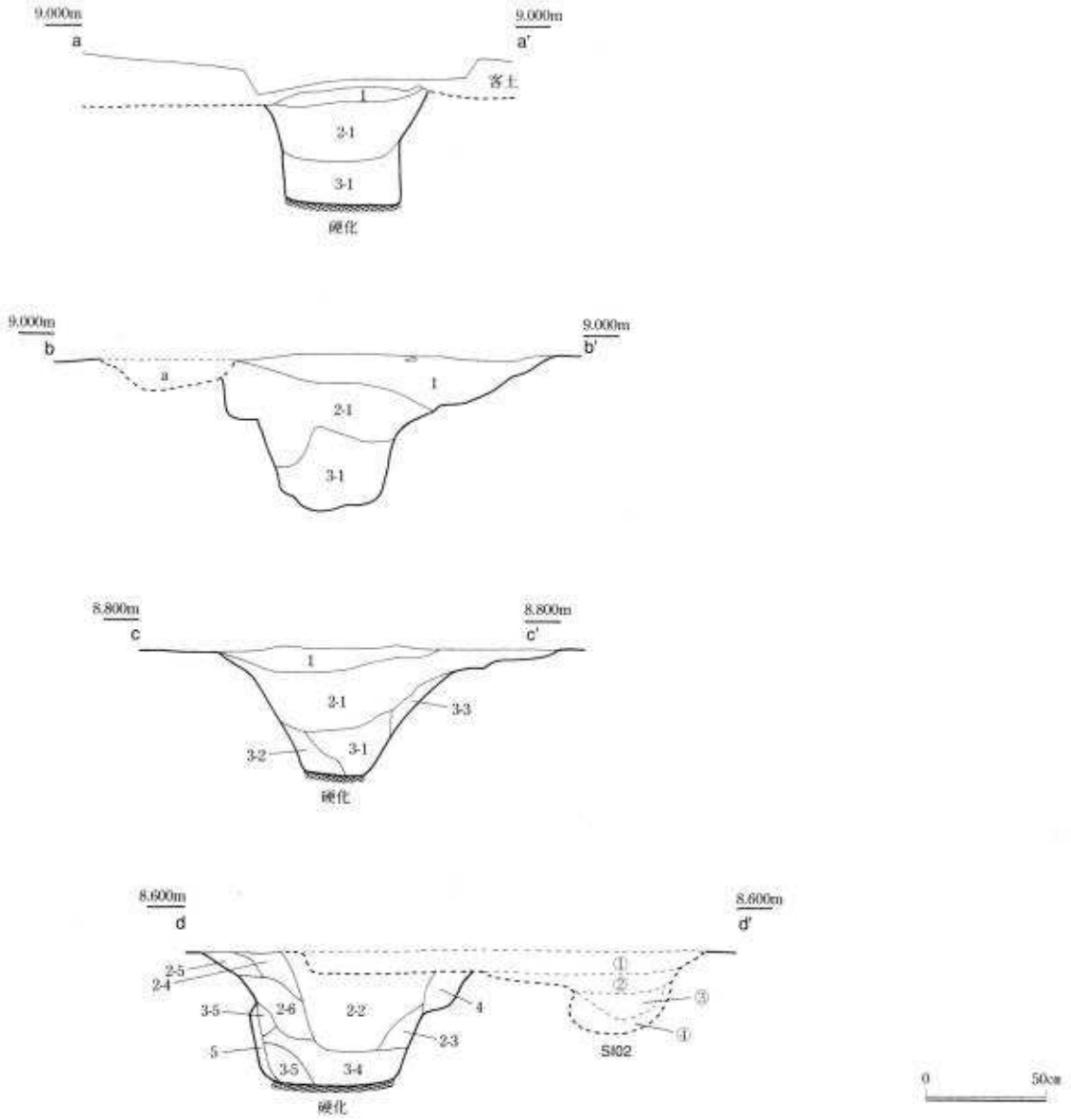
SD03・04　土層註

1層　：10YR2/2～2/3 黒褐色埴壌土。現地表面から下の耕作土。しまり良く硬い。部分的に鉄分塊が混ざる。
2層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。ブロック及び粒状の地山（黄橙色）が3割程度含有。SD01覆土と類似。
3層　：10YR2/2～2/3 黒褐色砂壌土。2層に比しやや明るめ。地山ブロック及び粒が含有。
4-1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。3層に比し、地山ブロック・粒の混入少ない。
4-2層　：基本的に4-1層と同じ。5cm程度のカーボン、地山ブロック・粒含有。
①層　：SD02覆土。SD03・04に比しやや明るめ。

第20図　SD03・04 平面図・断面図（S＝1/100、1/30）



第21図　SD06 平面図（S＝1/100）

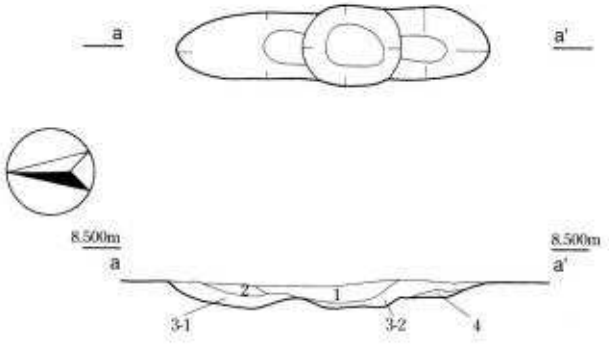


SD06　土層註

1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。5mm程度の地山ブロック少量含有（層の上方）。
2-1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。5mm程度の地山ブロック含有。1層に比し明るめ。
2-2層　：10YR3/3 暗褐色砂壌土。5mm～1cm程度の地山ブロック含有。
2-3層　：10YR3/3 暗褐色砂壌土。2-2層に比し黒みが強い。
2-4層　：10YR2/1～2/2 黒色～黒褐色砂壌土。地山を微量含有。
2-5層　：10YR2/1～2/2 黒色～黒褐色砂壌土。2-4層に比し明るい。
2-6層　：10YR2/1～2/2 黒色～黒褐色砂壌土。2-4･5層に比し、地山含有やや多く、しまり良い。
3-1層　：10YR3/4 暗褐色壌壌土。5mm程度の地山ブロックまばらに含有。カーボン含有。
3-2層　：10YR4/4～4/6 褐色壌壌土。暗褐色砂壌土を少量含む。
3-3層　：10YR4/4～4/6 褐色壌壌土。地山崩壊土。3-2層と色調が類似。
3-4層　：10YR3/2～2/4 黒褐色砂壌土。北側断面に比し、黒みの強い土が溜まる。2割程度地山含有。
3-5層　：10YR4/4～4/6 褐色壌壌土。地山ブロック及び粒の割合が高い。
4層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。2層に比し、地山ブロック粒含有少ない。
5層　：10YR4/4 褐色壌壌土。地山崩壊土。しまり良い。
a層　：10YR3/2～2/3 黒褐色砂壌土。1層に類似。5mm程度のカーボン及び焼土含有。b-b'セクションでSD06を切る別遺構の一部。
①層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。SI02の床。しまり良く、1cm程度のカーボン及び焼土ブロック含有。なお下底面に整地面と思しき硬化部分あり。土器含有層。
②層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。SI02掘り方。やや軟質。3割程度地山ブロック含有。
③層　：10YR3/3～4/4 暗褐色～褐色壌壌土。SI02掘り方。暗褐色土をメインに6割程度地山ブロック含有。
④層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。SI02掘り方。①・②層に比し、黒色みが強い。

第22図　SD06 断面図（S＝1/30）

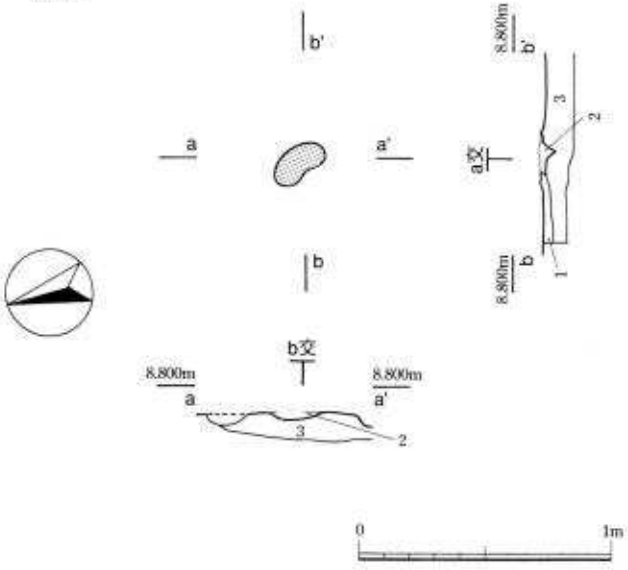
SJ01



SJ01　土層註

1層　：炭層。
2層　：10YR5/6～4/4 黄褐色～褐色砂壌土。暗褐色をメインとして極小の黄色砂含有。
3-1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。5mm以下の地山粒わずかにあり。
3-2層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。3-1層と基本的に同じ。ただし3-1層に比し地山含有量が多い。
4層　：10YR2/3～3/3 黒褐色～暗褐色砂壌土。地山漸移層。しまり良い。

SJ02

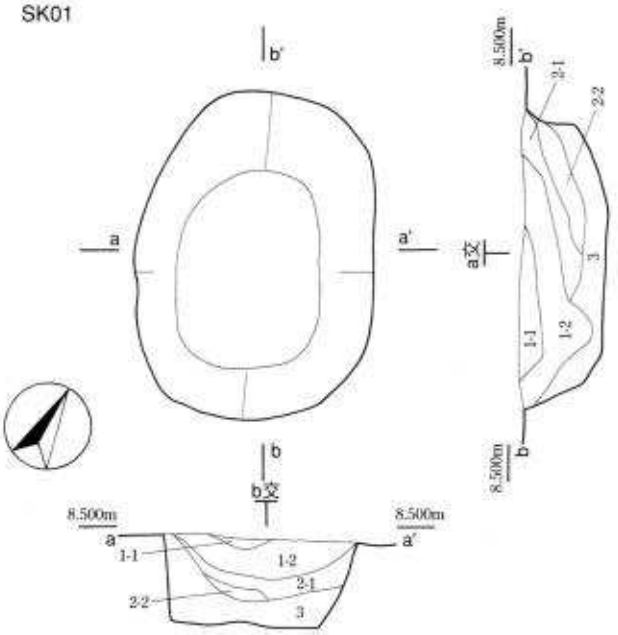


SJ02　土層註

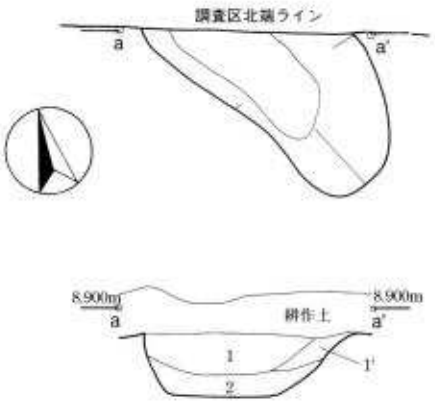
1層　：10YR4/3 黒褐色砂壌土。砂けを帯び、硬質。二次的包含層。
2層　：5YR5/8 明赤褐色土。焼土（被熱面）。2～3cmの厚み。
3層　：10YR3/3 暗褐色埴壌土。1cm程度の還元焼土ブロック（黒色ブロック）及び1cm程度の地山ブロック含有。

第23図　SJ01・02 平面図・断面図（S＝1/30）

SK01



SK03



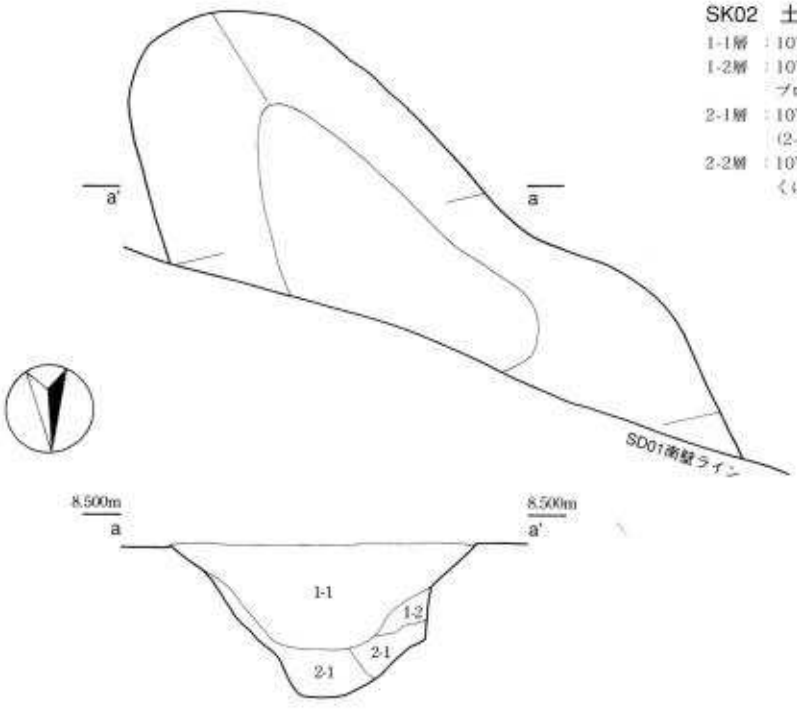
SK01　土層註

1-1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。地山ブロック少量混入。
1-2層　：10YR2/2～2/3 黒褐色砂壌土。1-1層に比して暗い。しまり悪い。
2-1層　：10YR5/6～4/3 黄褐色～にぶい黄褐色埴壌土。ほとんどが地山の層。しまり良い。
2-2層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。地山ブロック混入少ない。しまり悪い。
3層　：10YR2/3 黒褐色埴壌土。地山ブロック5割程度。黒色土（2mm程度）が混ざり。斑点状。

SK03　土層註

1層　：10YR3/3 暗褐色砂壌土。5mm以下の地山含有。しまり良い。
1'層　：10YR3/3～3/4。1層より明るい。地山崩壊土。
2層　：10YR4/3～4/4 にぶい黄褐色～褐色土。地山への漸移層。下底はほとんど地山と同じ。

SK02

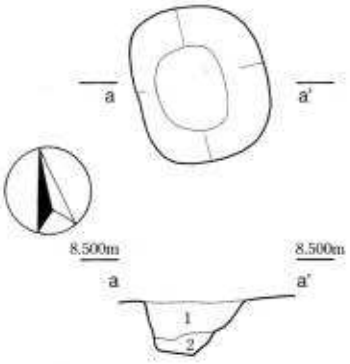


SK02　土層註

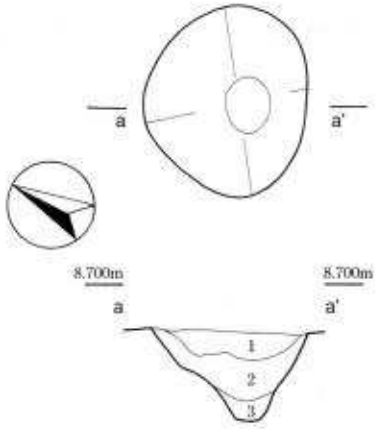
1-1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。しまり良く均質
1-2層　：10YR2/2～2/3 黒褐色砂壌土。しまり良い。2cm程度の地山ブロック（黄橙色埴壌土）少量含有。
2-1層　：10YR5/6～4/4 黄褐色～褐色埴壌土。地山に類似。黒褐色土（2-2層）まれにあり。
2-2層　：10YR2/3 黒褐色埴壌土。1層に比しやや明るく軟質。下にいくに従って明るくなる。

第24図　SK01～03 平面図・断面図（S＝1/30）

SK04



SK05



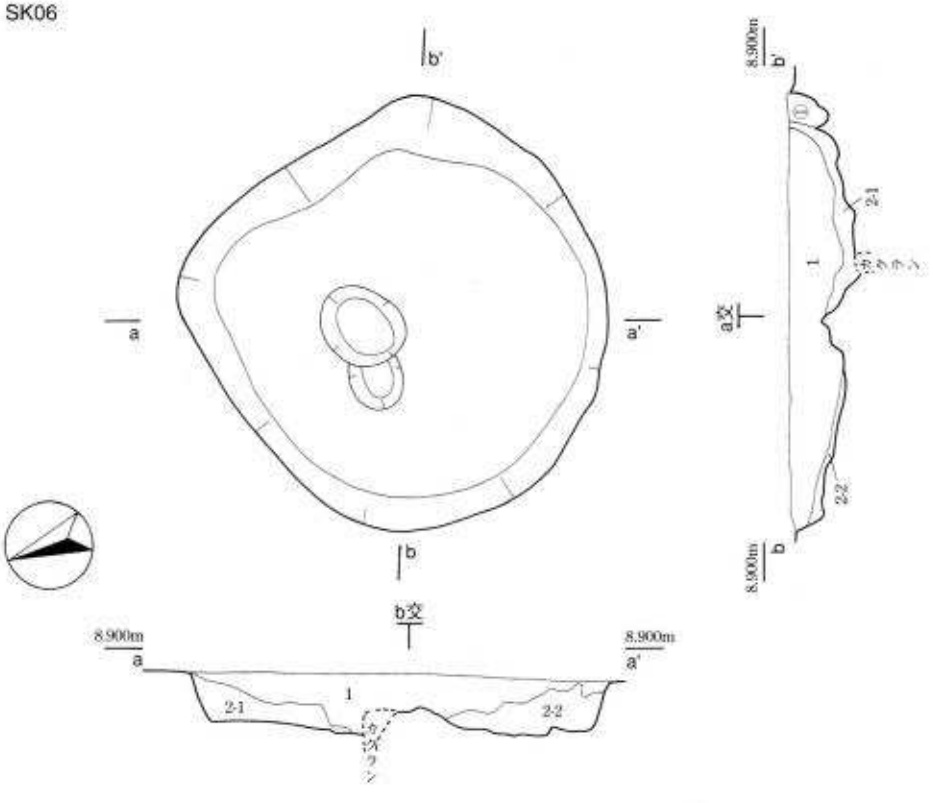
SK04　土層註

1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。地山ブロックまれにあり。
2層　：10YR3/3～4/4 暗褐色～褐色砂壌土。暗褐色をメインに地山ブロック4割程度含有。

SK05　土層註

1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。2～3cmの地山ブロック含有。
2層　：10YR2/3～3/4 黒褐色～暗褐色砂壌土。1層に比し1～2cmの地山ブロック含有量多い。
3層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土と10YR5/3黄褐色埴壌土（地山ブロック）が半々。杭穴で、1層、2層との関わりは不明。

SK06

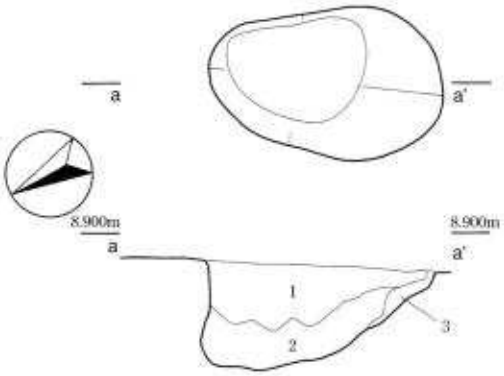


SK06　土層註

1層　：10YR3/2～2/2 黒褐色砂壌土。しまり良い。5mm程度の褐色土を数%均等に含む。場所により褐色土の大きさが若干大きい。
2-1層　：10YR4/3～3/3 黒褐色～にぶい黄褐色埴壌土。黒褐色土と褐色土が半々。褐色地山に見えるが掘るとボソッとし、しまり悪い。
2-2層　：2-1と同一。
①層　：10YR3/1 黒褐色砂壌土。きめの細かい均質な層。1層と同じくらいのしまり。

第25図　SK04～06 平面図・断面図（S＝1/30）

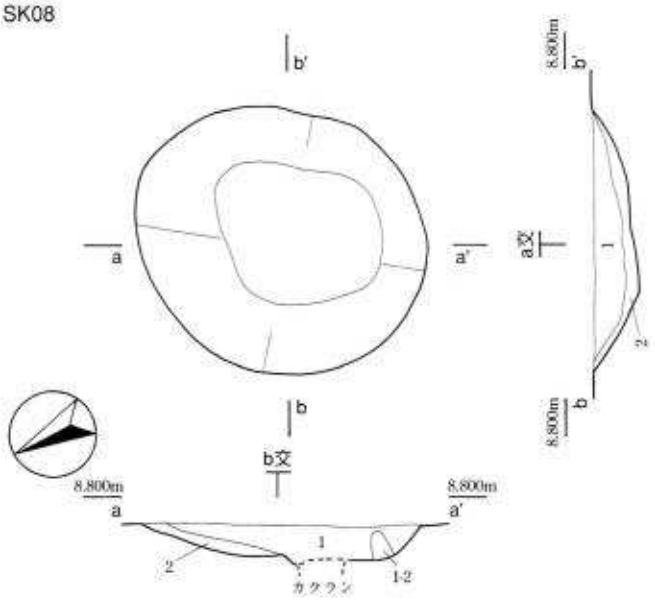
SK07



SK07　土層註

1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。やわらかく、5～20mmの黄褐色～褐色土を3%程度含有。
2層　：10YR1/3 黒褐色砂壌土。1層より若干多く褐色土を含む。
3層　：10YR3/4 暗褐色埴壌土。地山の褐色～黄褐色をメインに黒色土4割程度含有。

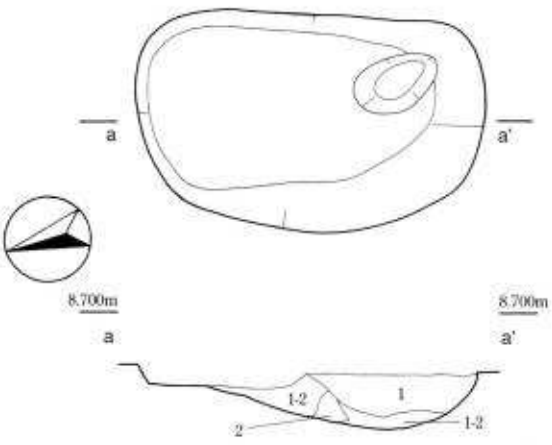
SK08



SK08　土層註

1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。5mm程度の地山ブロック少量含有。
1-2層　：10YR2/2～5/6 黒褐色砂壌土。6割程度地山ブロック含有。
2層　：10YR5/6 黄褐色埴壌土。2cm程度のブロック状黒色砂壌土含有。

SK09

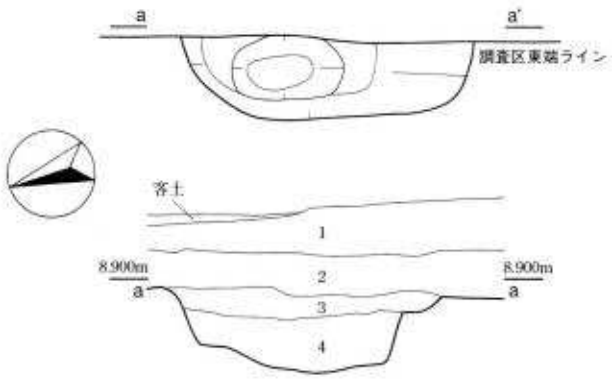


SK09　土層註

1層　：10YR2/2黒褐色砂壌土。やや軟質でしまり悪い。2割程度地山ブロック含有。
1-2層　：10YR2/3黒褐色～暗褐色砂壌土。4～5cm程度の地山ブロック3割程度含有。
2層　：地山ブロックのかたまり。

第26図　SK07～09 平面図・断面図（S＝1/30）

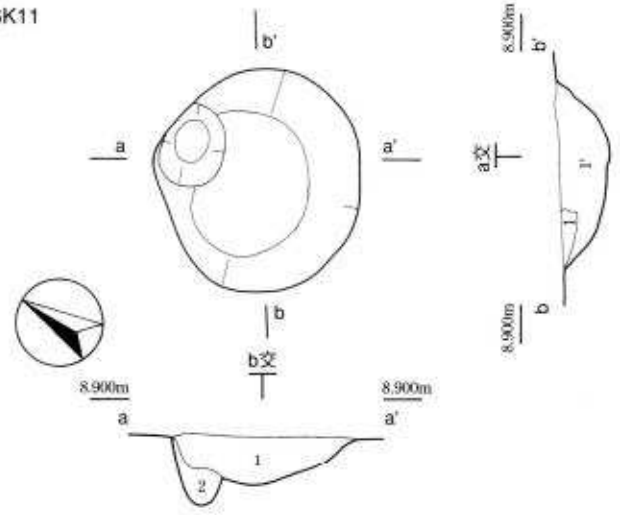
SK10



SK10　土層註

1層　：包含層。2～3cm程度の地山ブロック含有。
2層　：包含層。1層に比し地山ブロック含有少ない。
3層　：10YR3/2～2/2 黒褐色砂壌土。均質でしまり良い。
4層　：10YR3/2～3/3 黒褐色埴壌土。しまり良い。3割程度黄褐色埴壌土含有。

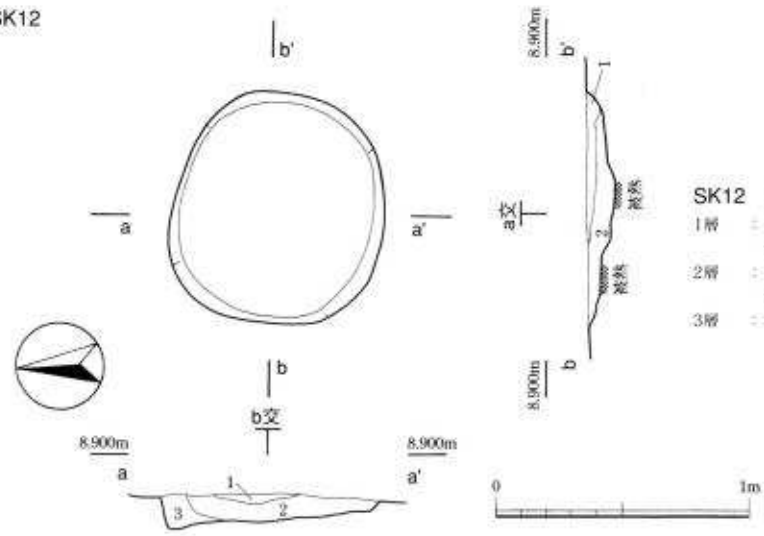
SK11



SK11　土層註

1層　：10YR3/3 暗褐色砂壌土。1cm程度の炭化材含有（上層たまり土）。
1'層　：10YR2/1～2/2 黒色～黒褐色砂壌土。1～2cmの炭化材を多量に含有。焼土を少量含有。
2層　：10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色砂壌土。1'層の炭化材の混入あるが別遺構と思われる。

SK12

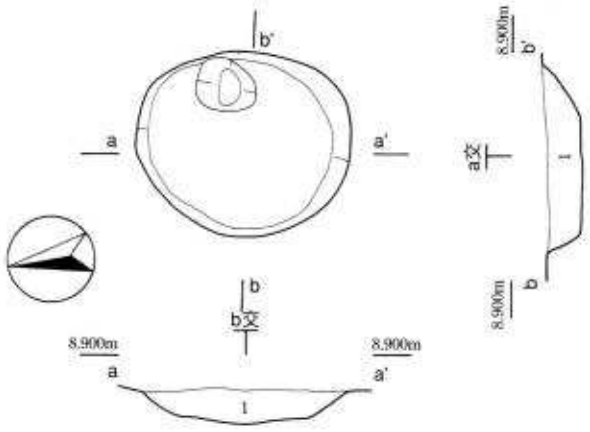


SK12　土層註

1層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。カーボン少量含有。地山ブロック2割程度含有。
2層　：10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色砂壌土。1cm程度のカーボン、焼土含有。
3層　：10YR3/3～3/4 暗褐色砂壌土。1,2層に比し明るい。別遺構か？

第27図　SK10～12 平面図・断面図（S＝1/30）

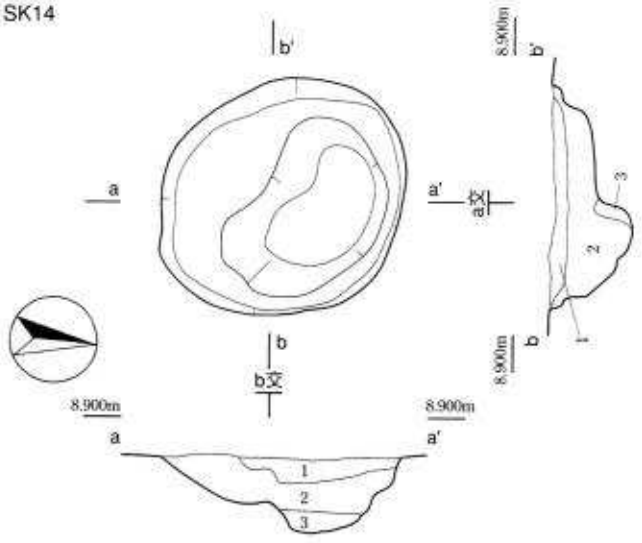
SK13



SK13　土層註

1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。1cm程度の地山ブロック、カーボンを少量含有。

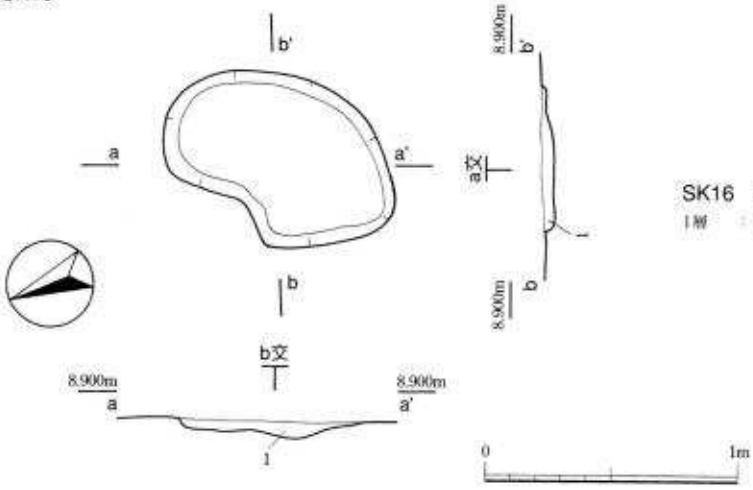
SK14



SK14　土層註

1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。地山粒、カーボンを少量含有。上層たまり土。
2層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。1～2cm程度のカーボン、地山ブロック含有。
3層　：10YR4/6 黄褐色埴壌土。部分的に黒褐色土含有。

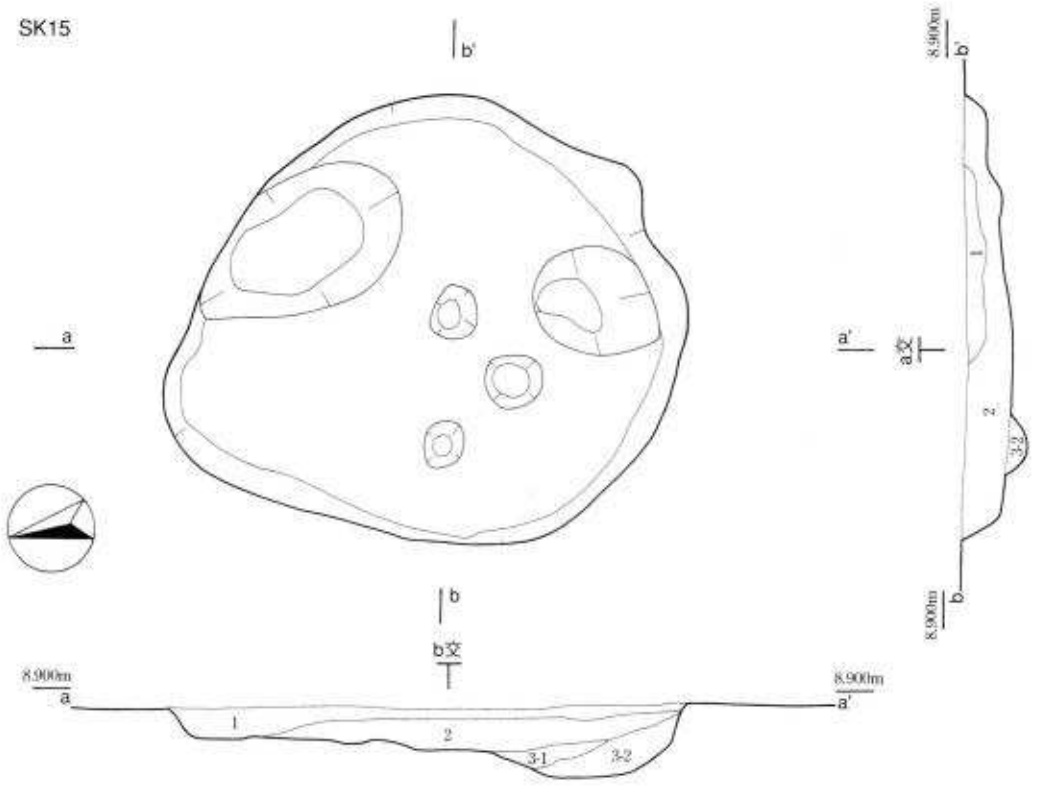
SK16



SK16　土層註

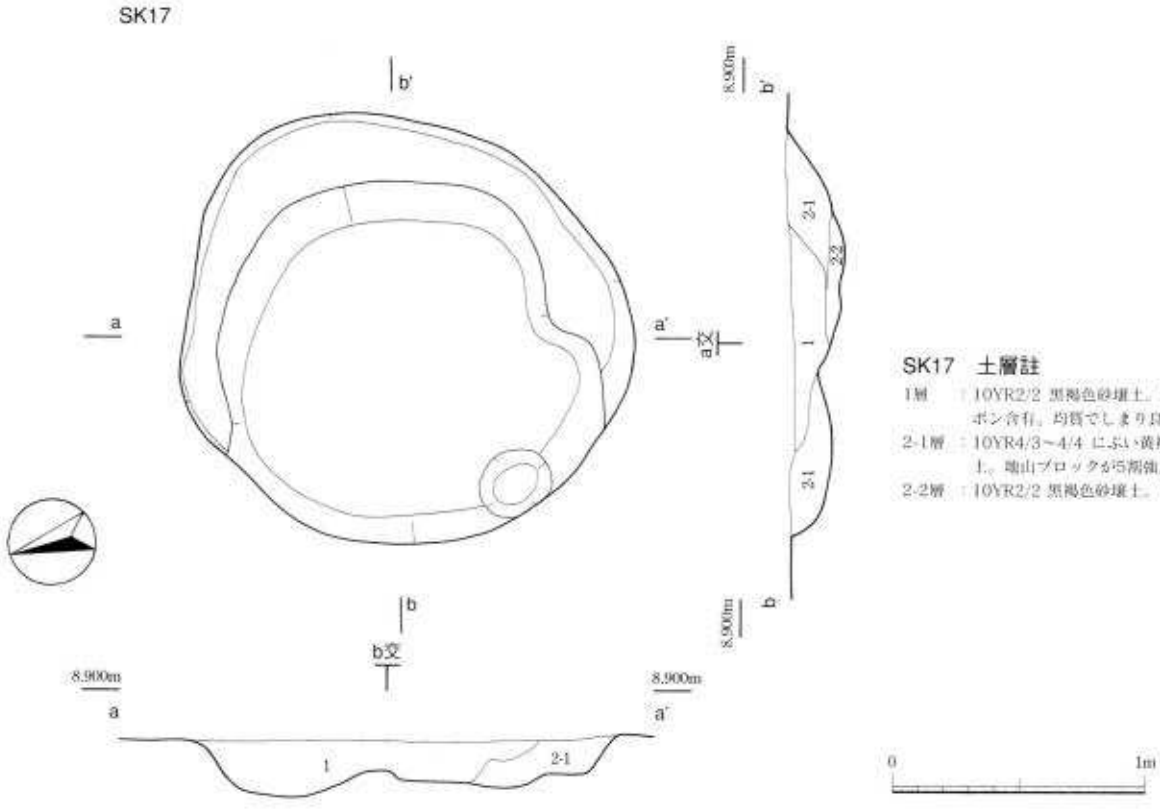
1層　：10YR2/1黒色砂壌土。

第28図　SK13・14・16 平面図・断面図（S＝1/30）



SK15　土層註

1層　：10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色砂壌土。1cm程度の地山ブロック3～4割含有。
2層　：10YR2/2黒褐色砂壌土。1層に比し、黒色み強く地山ブロック含有率低い。
3-1層：10YR5/6黄褐色埴壌土。2割程度黒褐色砂壌土含有。
3-2層：10YR5/6黄褐色埴壌土。3-1層に比し、黒褐色砂壌土の含有率高い。

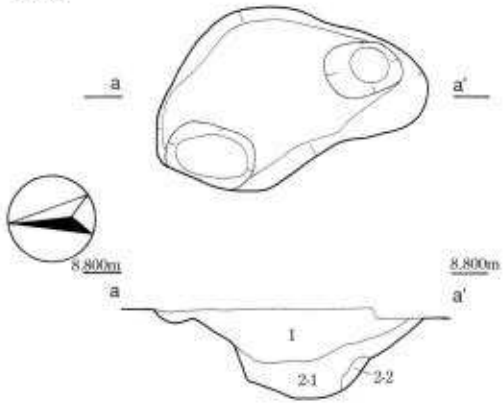


SK17　土層註

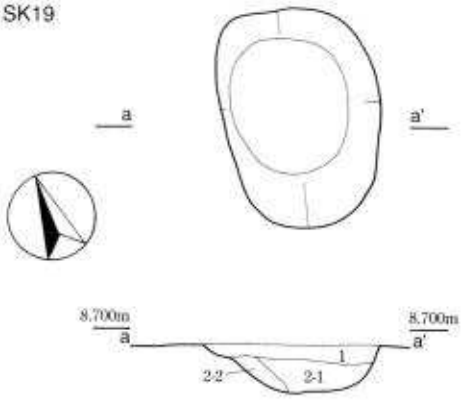
1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。5mm程度のカーボン含有。均質でしまり良い。
2-1層：10YR4/3～4/4 にぶい黄褐色～褐色埴壌土。地山ブロック5割強。しまり悪い。
2-2層：10YR2/2 黒褐色砂壌土。1層に類似。

第29図　SK15・17 平面図・断面図（S＝1/30）

SK18



SK19



SK18　土層註

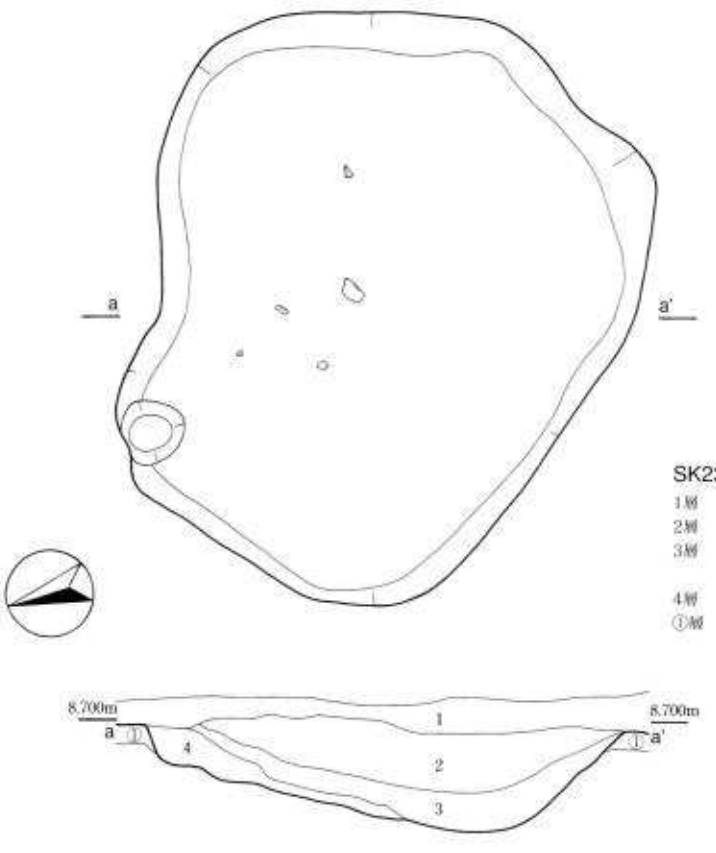
1層　：10YR2/2 黒褐色～黒色砂壌土。均質。しまり良い。5cm程度の地山ブロックまれにあり。
2-1層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土～壌土。5mm程度のカーボン、地山ブロック少量含有。
2-2層　：10YR4/4 褐色埴壌土。しまり良い。大半が地山土。

SK19　土層註

1層　：10YR2/1～2/2黒色～黒褐色砂壌土。地山ブロック含有少ない。
2-1層　：10YR3/3～3/4黒褐色～暗褐色埴壌土。地山ブロック3割程度含有。
2-2層　：10YR3/2黒褐色埴壌土。2-1層に比し、緩め。地山ブロック少ない。

0　1m

SK23

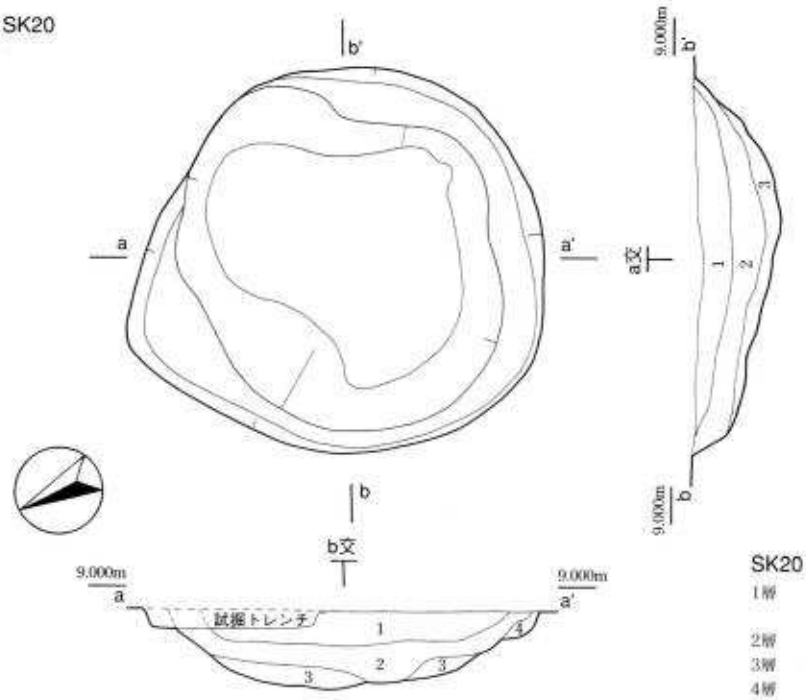


SK23　土層註

1層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。耕作土。
2層　：10YR3/3 黒褐色砂壌土。3割程度地山ブロック含有。
3層　：10YR2/2～3/3 黒褐色砂壌土。2層に比し軟質で黒み強い。下底面に近付くにつれ地山ブロック含有増える。
4層　：10YR3/3 暗褐色埴壌土。4割程度地山ブロック含有。しまり良い。
①層　：10YR2/1～2/2 黒～黒褐色砂壌土。ベース面。

第30図　SK18・19・23 平面図・断面図（S＝1/30）

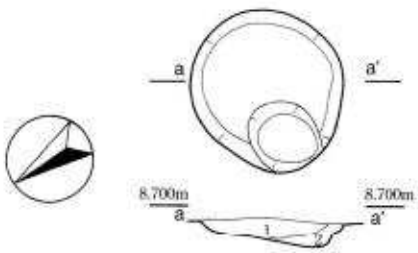
SK20



SK20　土層註

1層　：10YR2/3～3/3 黒褐色～暗褐色砂壌土。5mm程度の地山粒。カーボン含有。
2層　：10YR3/3 暗褐色砂壌土。下底面付近に筋状に地山粒混入。
3層　：10YR3/4 暗褐色埴壌土。地山ブロック3割程度含有。
4層　：10YR4/3 にぶい黄褐色埴壌土。

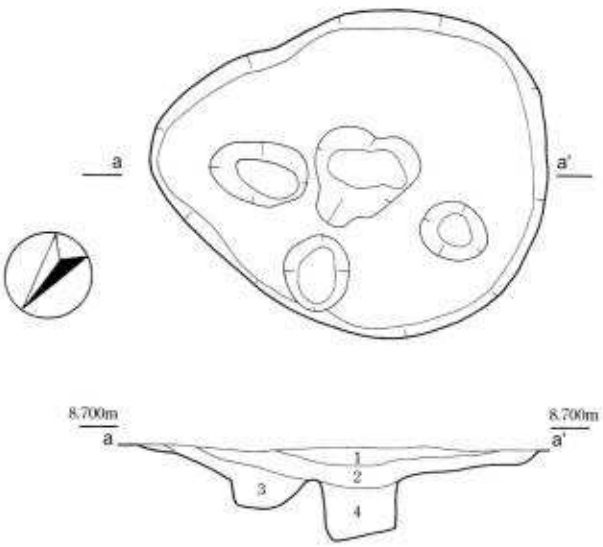
SK25



SK25　土層註

1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。5mm～1cm程度の焼土ブロック5割程度含有。
2層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。1層に比し焼土少ない。床面に比熱面見られず。

SK26

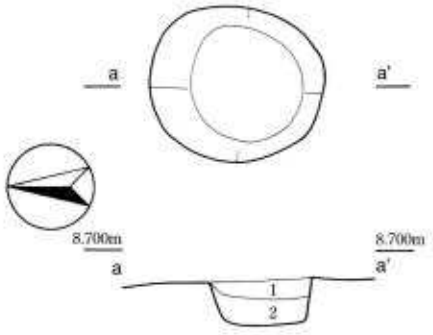


SK26　土層註

1層　：10YR2/3黒褐色砂壌土。しまりやや悪い。
2層　：10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色砂壌土。1～2cm程度の地山ブロック含有。
3層　：10YR3/2黒褐色砂壌土。地山ブロック少量含有。柱穴かどうかは不明。
4層　：10YR3/2黒褐色砂壌土。2層に比し地山ブロック少ない。下底は動物の穴で破壊される。

第31図　SK20・25・26 平面図・断面図（S＝1/30）

SK21

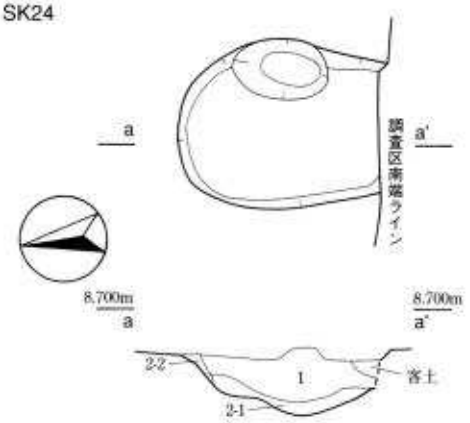


SK21　土層註

1層　：10YR5/6 黄褐色埴壌土。1cm程度の焼土ブロック、5mm程度のカーボン含有。

2層　：10YR5/6 黄褐色埴壌土。1層より含有量は少ないが焼土ブロックあり。

SK24



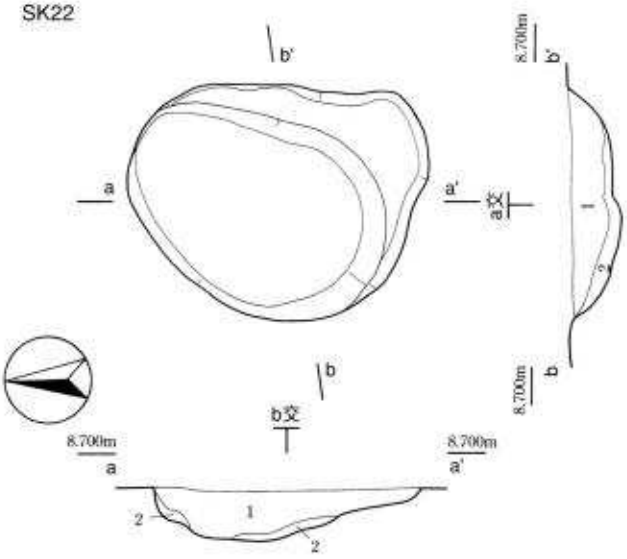
SK24　土層註

1層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。1～2cmの地山ブロック少量含有。

2-1層　：10YR3/3 暗褐色埴壌土。1層より明るく、地山ブロック含有多い。

2-2層　：10YR3/3～4/3 暗褐色～にぶい黄褐色埴壌土。しまり良い。地山崩壊土。

SK22

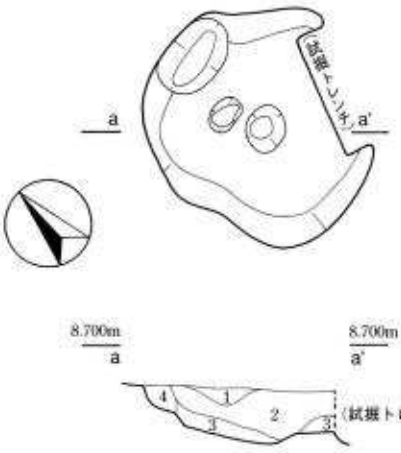


SK22　土層註

1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。下底面付近に筋状に地山ブロック含有。

2層　：10YR3/3 暗褐色埴壌土。5割程度地山ブロック含有。しまり良い。黒色ブロックも少量含有。

SK27



SK27　土層註

1層　：包含層。2～3cm程度の地山ブロック含有。

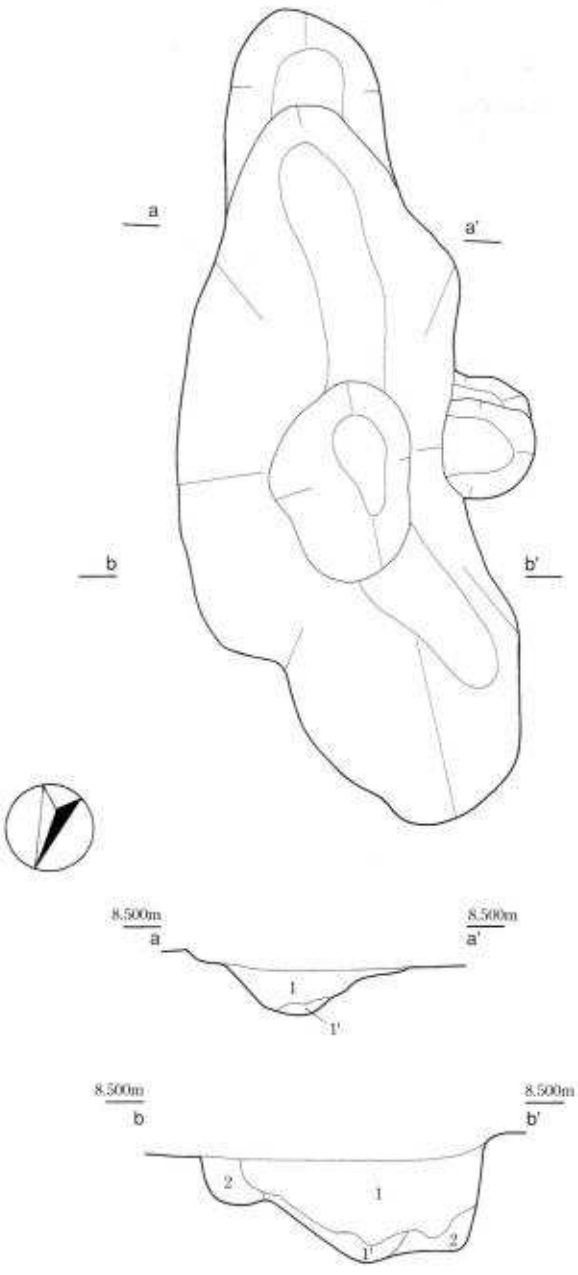
2層　：包含層。1層に比し地山ブロック含有少ない。

3層　：10YR3/2～2/2黒褐色砂壌土。均質でしまり良い

4層　：10YR3/2～3/3黒褐色埴壌土。しまり良い。3割程度黄褐埴壌土含有。

第32図　SK21・22・24・27 平面図・断面図（S＝1/30）

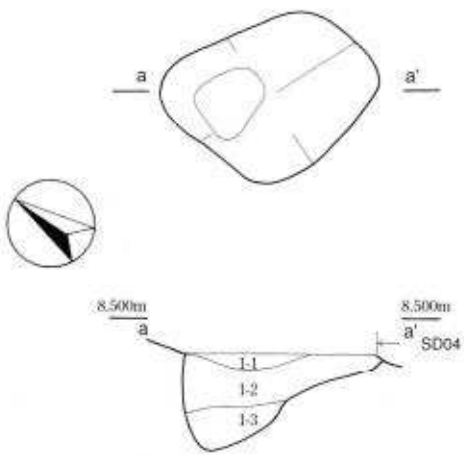
SK28



SK28　土層註

1層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。しまり悪く軟質。
1'層　：10YR3/2～2/2 黒褐色砂壌土。1cm程度の地山の混入があり1層より明るい。
2層　：10YR4/3～4/4 にぶい黄褐色壌壌土。層の上方には黒色土含有。

SK30

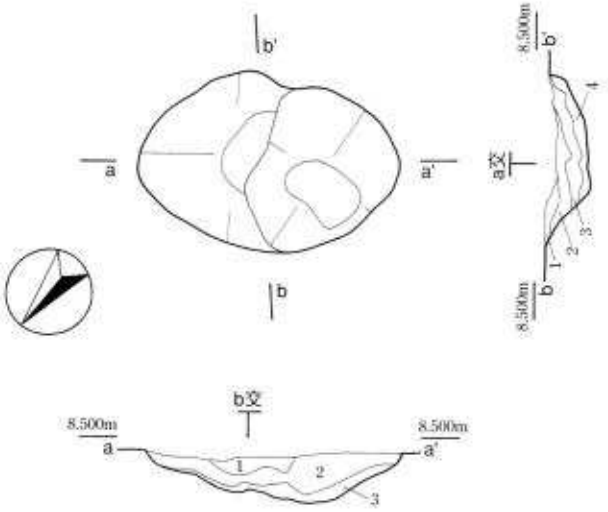


SK30　土層註

1-1層　：10YR3/2 黒褐色砂壌土。地山ブロック粒少量含有。
1-2層　：10YR3/2～3/3 黒褐色～暗褐色壌壌土。黒褐色土をメインに1～2cm程度の地山ブロック混入。
1-3層　：10YR3/3 黒褐色壌壌土。地山ブロック少量含有。しまり良い。

第33図　SK28・30 平面図・断面図（S＝1/30）

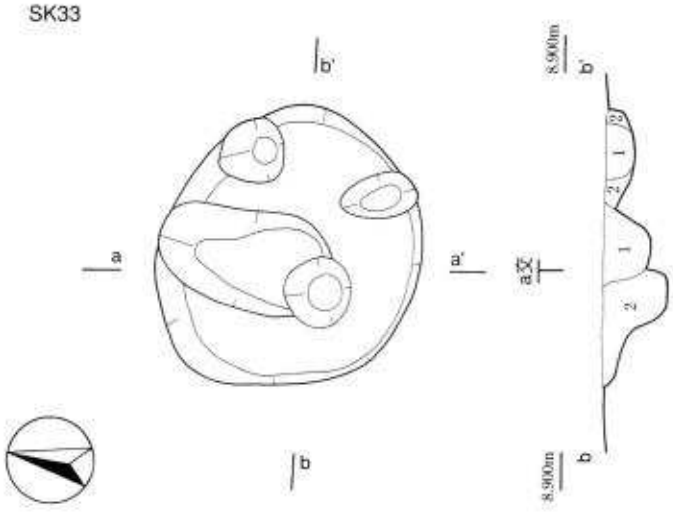
SK29



SK29　土層註

1層　：10YR4/2～4/3 灰黄褐色～にぶい黄褐色砂壌土。
2層　：10YR5/6～4/4 黄褐色～褐色砂壌土。黄褐色土に褐色土が混ざる。
3層　：10YR3/1～2/3 黒褐色～暗褐色砂壌土。
4層　：10YR5/6～4/4 黄褐色～褐色埴壌土。褐色土に地山が混ざる。

SK33

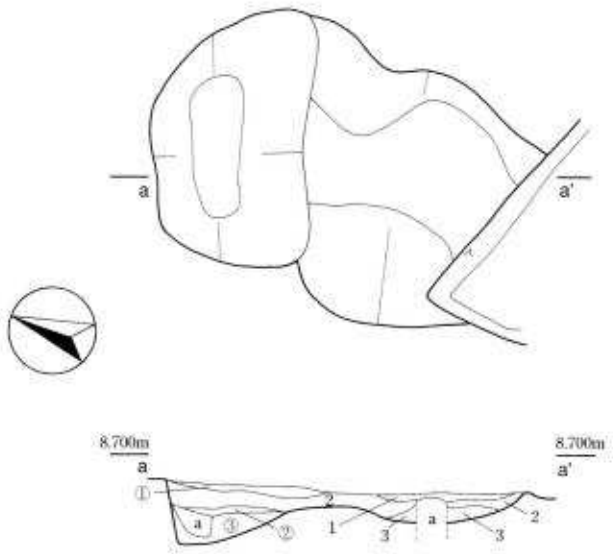


SK33　土層註

1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。しまり良い。部分的に地山ブロック含有。
2層　：10YR4/4 褐色埴壌土。しまり良く均質。
3層　：10YR2/2 黒褐色砂壌土。1cm程度の地山ブロック粒含有。

第34図　SK29・33 平面図・断面図（S＝1/30）

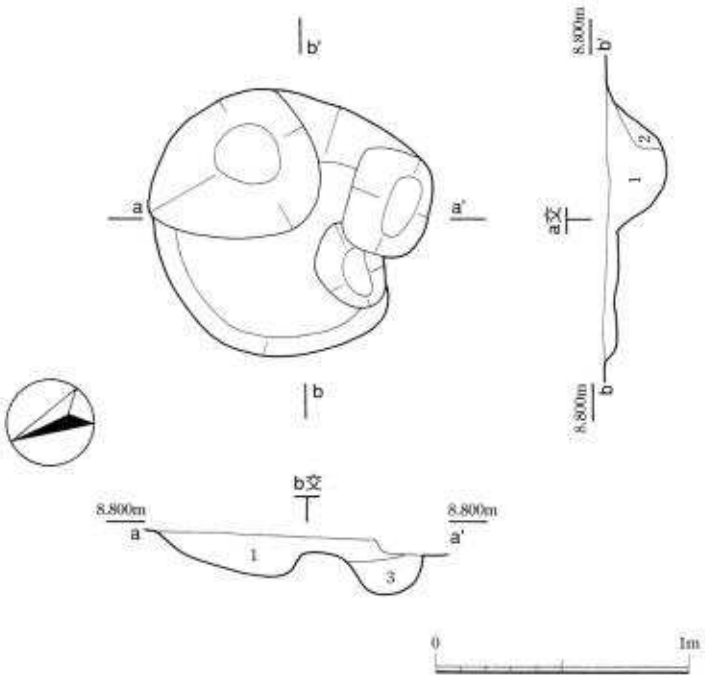
SK31



SK31　土層註

1層　：7.5YR2/2 黒褐色砂壌土。均質でしまり悪い。
2層　：7.5YR2/3～2/2 黒褐色砂壌土。黒褐色土に2～5mmの地山粒10%程度含有。ややしまる。上方ほど1層に類似。
3層　：10YR4/6 褐色埴壌土。褐色土と暗褐色土が半々に混ざる。粒は細かい。2層に比ししまり良い。
a層　：10YR2/1 黒色砂壌土。攪乱。非常にしまり悪い。
①層　：7.5YR2/2 黒色砂壌土。黒色土に5mm程度の褐色土が数%混入。しまりはあまり良くない。
②層　：10YR2/1 黒色砂壌土。ほぼ均質な黒みの強い層。
③層　：10YR4/6 褐色埴壌土。黒褐色と褐色が混ざる層。褐色土は部分的に2cm程度のかたまりで存在。

SK32



SK32　土層註

1層　：10YR2/3 黒褐色砂壌土。5mm程度のカーボンと焼土含有。
2層　：10YR4/6 褐色埴壌土。地山崩壊土。しまり良い。5割程度の褐色砂壌土含有。
3層　：10YR3/3 暗褐色埴壌土。地山粒及びカーボン含有。

第35図　SK31・32 平面図・断面図（S＝1/30）

第4章　遺　物

第1節　遺物の出土・分布状況

刀何理遺跡から出土する遺物は、石器1点、縄文土器11点、焼石10点、石製品9点、須恵器55点、土師器59点、土師質製品1点、焼成粘土塊3点、不明陶製品1点、加賀焼7点、越前焼2点、中世土師器15点、瓦質土器1点、鉄滓3点、輪羽口1点、中世青磁2点、近世陶磁器21点である。出土量としては非常に少なく、遺構が削平されている影響が顕著に表れている。このうち内訳として、石製品では、磨石4点、砥石3点、石皿1点、石錘1点の内訳となっている。須恵器では、食膳具22点、貯蔵具32点、器種不明1点、土師器では食膳具12点、煮炊具36点、器種不明10点。中世土師器では皿が12点、椀2点。近世陶磁器では肥前系の磁器製品が11点、唐津4点、国産青磁2点、瀬戸・美濃が1点、その他不明品が3点であった。

本遺跡の出土遺物は細片も多く、実測不可能なものもある。実測可能であったものだけを掲載しており、その他のものについては文でのみ述べたいと思う。また、実測可能であって掲載されたものについては、小見出しゴシックで表示している。遺構を検出しているが遺物の出土していないものは、遺構名を提示していない。

遺物の時期については、本来総合的に判断して行われるべきことを十分理解しているつもりであるが、本遺跡では遺物量が極めて少ないため、単体での検討を試みているものがある。このような判断状況は厳しいと考えているのだが、ご容赦願いたい。なお時期も含め第5章で最終的な検討としたい。

凡例

・遺物図版は出土地点ごとにまとめて提示し、須恵器のみ断面を黒ベタ塗りしてある。
・遺物図版内の縮尺は1/3としている。第40図83のみ2/3縮尺となっている。
・土器図版中で示す右側断面に書き込んである「↑↑」は、ヘラケズリの範囲を、左表面並びに展開図中の「→」はケズリの方向を示す。
・土器図版中、右断面の中の破線は、粘土紐接着痕を示す。
・色調については、表面、断面、内面、外面で色調が異なる場合はそれぞれ提示しており、表面は内外の色調が同じ場合に使用した。提示がない場合は内外断面とも同色である。色調で示した記号は「新版標準土色帖」に基づいている。
・完存率は、無記であれば全体での完存割合、口縁、底部、台などの表示があれば、その部位のみ完存割合を示す。径36分割中の割合を記している。
・縄文時代の遺物については宮田明の助言を得た。
・本書で示した古代の土器編年並びに暦年代観については、1988年北陸古代土器研究会シンポジウムでの田嶋明人氏の古代土器編年軸を基本とした。
・古代土器の器種名は、基本的に須恵器・土師器ともに北陸古代土器研究会で使用するものに準じた。文中の壺Fは、型式分類名で、なで肩、無台、長胴の特徴をもつ広口壺を示す。
・古代の貯蔵具の胴部成形・調整で示すタタキ及び当て具の分類については、花塚信雄氏の分類（「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』金沢市教育委員会 1984年）に基づいており、「Ha類」＝木目直行の平行文、「Hb類」＝木目左下がりの平行線文、「Hc類」＝木目右下がりの平行線文、「He類」＝木目の見えない平行線文、「Da類」＝木目の見えない同心円文、「Db類」＝木目が年輪状に入る同心円文、「Dc類」＝柾目状木目が入る同心円文、「SD類」＝年輪木目のみが見える細かな同心円文（木製無文）で示してある。
・坏Bの重焼痕分類は、北野博司氏の分類（「重焼の観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター1988年）に基づいている。Ⅰ類は、蓋身正位に合わせたものを1単位として2段程度に重ねたも

の。Ⅱa類は、蓋を逆位にして身を重ねたものを1単位として柱状に重ねたもの。Ⅱb類は、蓋を逆位にして身に重ねたものを1単位として交互に蓋口同士が合わさるように柱状に重ねたものを示す。
・胎土で示す用語は、須恵器では、「通常」が南加賀窯跡群の戸津オオダニ地区で通常見られる、素地が粘土質で適度に砂粒が混在する土を示す。これを基準として、通常の胎土よりも砂の混入が多いものを「砂を多く含む」とし、砂粒の混入が少ない良質の土を「砂が少ない」と示した。
・主に須恵器で、焼成、焼き色(色調)で示す用語は、「堅緻」＝良好以上の強い焼きのもの、「良好」＝堅緻よりも焼き締まりの弱いもの、「良」＝還元状態は保つが焼き締まりの弱いもの、「酸化」＝表面が酸化するもの、「半生」＝良と生焼けの中間の状態のもの、「生焼け」＝白い還元状態のものや焼成不良で軟質のものをそれぞれ示す。
・中世・近代の遺物については、川畑謙二の助言を得た。なお、中世の土師器分類・区分については、1997年北陸中世土器研究会編「第2章第2節 中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸 －考古学が語る社会史－』の第2章加賀国の様相第2節中世加賀国の土師器様相に基づいている。

第2節　出土遺物

1．ＳＩ０１出土

須恵器の坏Ｂ蓋が2点、土師器のロクロ小甕3点（口縁部1点、頸部破片1点、胴部破片1点）、ロクロ鍋胴部破片1点、ロクロ甕口縁部1点と胴部破片？1点、器種不明の内外摩耗が著しい土師器破片3点、そして土師質焼成粘土塊1点が出土している。坏Ｂ蓋は、口縁端部が折れ曲がる田嶋編年Ⅱ$_3$期（8世紀前半）の特徴を備えているもので、他破片と接合可能であり、ほぼ完形に近いものが出土している。完形品といっても、焼き歪みが極めてひどく、内外降灰しており、須恵器窯で使用される置台としか考えられないもので、実測されていない。以上の遺物は、半分ずつの割合で、床レベル若しくはこれ以下の出土、覆土から出土している。

土師器　ロクロ甕（1・2）

1は、ロクロ小甕である。外面と内面口縁にカキメを伴う口径14.1㎝、頸部径13.4㎝を測る口縁完存率5/36の破片。胎土には砂が多く、焼成は良好である。色調は、外面にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面・断面が浅黄橙色(10YR8/4)である。

2は、ロクロ甕の口径推定20.5㎝を測る口縁完存率1.5/36の破片で、胎土は砂が多く、焼成は良好、色調は内外断面ともに明黄褐色(10YR7/6)である。

2．ＳＩ０２出土

この遺構からは、加賀焼3点、中世土師器8点、土師器17点、須恵器4点、鉄滓1点、土師質焼成粘土塊2点が出土している。土師器は、ロクロ小甕口縁部、食膳具の細片、赤色塊底部破片、ハケ甕3点が確認できるが、この他は表面が摩耗していて不明品も多い。これ以外は古代とも中世とも言えない。須恵器は、食膳具破片と貯蔵具破片が各々2点ずつ。食膳具1点は坏Ｂ蓋の口縁端部。須恵器4点の内、床直面から出土するのは1点だけで、その他は覆土からのものである。貯蔵具破片は瓶・壺類の底部と胴部破片で、この内1点は床下堀り方内からの出土である。

以上のように、須恵器やハケ甕が出土しているものの、床面出土の主体は中世遺物である。中世土師器は皿・塊が出土していて1点を除く7点の実測を試みている。

中世土師器　　皿・塊（3～9）

いずれも非ロクロ成形のもので、3・4の小皿、やや大きめである小皿(3)、7～9の大皿、塊と思われる(6)ものが出土している。いずれも床面からの出土である。胎土は、3～6，8が粘土に砂を含むという在地の特徴をもっている可能性がある。

3は、口径7.9㎝、口縁完存率2/36、色調は浅黄橙色(10YR8/4)、摩耗が著しく、焼成は甘い。また、胎土には砂混入が少ない。

4は、口径7.8cm、口縁完存率4.5/36の色調がにぶい黄橙色(10YR7/4)、焼成は堅緻でしっかりしており、胎土に砂が含まれ、ざらつく。口縁端部の内外に煤がうっすらと付着しており、灯明皿の可能性がある。

5は、北陸土師器の区分・分類でCタイプとされるもので、口径9.7cm、口縁完存率6/36、色調は4と同色だが断面色調が灰黄褐色(10YR6/2)、焼成はしっかりしている。胎土は在地のものと考えられるが、砂が少なく、赤色粒が僅かに確認できる。

6は、口縁完存率2/36、口径推定11.7cmを測るもの。色調は、浅黄橙色(10YR8/3)を呈し、砂が多く混入していて手触りがざらざらする。焼成は非常に甘く、生焼けと思われる。

7は、口径11.7cm、口縁完存率が4/36、色調は、表面がにぶい黄橙色(10YR7/3～7/4)、断面が灰白色(10YR8/2)、焼成はしっかりして堅い。胎土には多めの砂と赤色粒が混入する。

8は、口縁完存率1/36の破片で、口径推定11.8cm。色調は、表面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、断面浅黄橙色(10YR8/3)を呈す。胎土には砂と粒径３㎜の大きなものを含む赤色粒が混入し、手触りがざらざらする。焼成は通常である。

9は、口径12.7cm、口縁完存率3/36。色調は表面が灰黄褐色(10YR5/2)、断面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、胎土に砂が混入し、焼きはしっかりしている。

以上の中世土師器皿は、区分でⅡ-Ⅱ期（13世紀前葉～中葉）、古くてもⅡ-Ⅰ$_3$期（13世紀初頭）あたりになろうと思われる。灯明具の出現がⅣ期（14世紀後葉～15世紀中葉）とされており、4が確実に灯明皿とすればもっと時期が下る可能性はある。ただ、この灯明具の出現時期については例外もあるようだ。

加賀焼（10・11）

10は、口径28.0cm前後と推定される片口鉢の破片である。口縁完存率は2/36。胎土には砂が非常に多く含まれる。色調は、表面が褐色(7.5YR4/3)、断面がにぶい褐色(10YR5/4)となって、良好に酸化焔焼成されているもの。口縁端面の酸化光沢部分が擦れており、使用痕と思われる。また、内外の口縁端部より3cmに渡り降灰が確認できる。

11は、甕の胴部破片。胎土に砂が多く混入、色調は外面にぶい赤褐色(5YR4/3)、内面・断面がにぶい橙色(7.5YR6/4)を呈す。内面は板状の工具痕で撫でられ、中央に粘土紐痕が確認できる。

土師器（12～14）

古代に位置づけられるもので、いずれもロクロ成形の食膳具類である。完存率はいずれも口縁1/36と細片である。

12は、坏と考えられる口縁端部。内外ミガキが確認でき、本来赤彩を施すようなものであろうが、赤彩はすべて剥離している。色調は、褐色(7.5YR6/6)、胎土は砂の混入が少ない。

13・14は、口縁が内湾する器形の、椀Hと考えられるものである。13は、口縁が若干内湾し、色調は褐色(7.5YR6/6)、胎土では砂が少ない。

14は、口縁がはっきりと内湾し、色調が褐色土(7.5YR7/6)で、胎土は砂を含む通常のものである。

3．ＳＢ０１出土

この遺構のP1、P8、P10からそれぞれ1点ずつ遺物が出土している。合計3点のみ。P8は須恵器坏B蓋の天井部、P1は須恵器瓶類の首部破片、P10は中世土師器の小皿である。しかしP1、P8から須恵器が出土するものの遺構上面からのものであり、遺構も古代というよりは古代末や中世に入ってからの掘立柱建物構造（床束建物）であることから、P1、P8へ古代のものが紛れ込んだと考えるのが妥当と思われる。

須恵器　坏Ｂ蓋・瓶（16・17）

16は、坏B蓋の天井部で、削りを伴うもの。色調は青灰色、焼成は良で、胎土は通常である。外面降灰しており、重焼Ⅰ類？か。

17は、口縁端部が欠損する瓶類の首部分破片。内面にカキメ、外面に沈線1条が確認できる。焼成

は良好で、色調は青灰色を呈す。

中世土師器　皿（15）

口径7.6cm、器高1.2cm、底径4.4cm、口縁完存率3/4の非ロクロ小皿である。端部に面取り、端部下に横撫でが1周する。所謂Cタイプである。焼成はよく締まり、胎土は砂が入らない。色調は基本として橙色(7.5YR7/6～6/6)だが、底部内外はすすけた色合いとなっており、にぶい黄褐色(10YR6/4)である。断面も同色であった。この皿の時期区分はⅡ-Ⅱ期（13世紀前葉～中葉）と思われる。

4．ＳＢＯ3出土

磨石（18）

P6出土の磨石が1点出土するのみ。1面に使用痕が認められ、つるつるとした感触になっている。使用面を観察すると、小さな傷が多い。残存長8.2cm、残存幅7.9cm、残存厚2.8cm、重さ213.8ｇ、石材はデイサイトで、被熱を受け断面で赤化を確認できる。縄文時代のものと特定はできず、普通にどこにでも転がっている石ということである。

5．ＳＢ０４出土

中世土師器　皿（19）

P8から中世土師器皿が1点だけ出土している。底部完存率8/36の、口径7.8cm、底径7.5cm、器高1.3cmを測る非ロクロの小皿である。体部立ち上がりに段をもち、体部はやや外反気味、口縁端部は先細りに仕上げられている。所謂Dタイプである。色調は浅黄橙～明黄褐色(10YR8/4～7/6)を呈し、断面は灰白色。胎土には砂が入らず、焼成はしっかりしている。この皿の時期区分はⅡ-Ⅱ期（13世紀前葉～中葉）と思われる。

6．ＳＢ０６出土

中世土師器　皿（20）

P14から中世土師器皿が1点出土しており、口縁完存率4.5/36、口径12cmを測る破片である。非ロクロ成形の大皿でΛタイプ。色調は、橙色(7.5YR7/6)と浅黄橙色(7.5YR8/6)を合わせたような色合いで、断面も同色である。胎土は砂を若干含み、ざらつく。所謂在地の土と似ている。焼成はしっかりしていて堅緻。この皿の時期区分はⅡ-Ⅱ期（13世紀前葉～中葉）と思われる。

7．ＳＫ２０出土

この土坑からは、須恵器の甕破片2点、食膳具底部破片？1点、土師器の煮炊具破片2点が出土するが、生焼けや摩耗が多い。土師器の1点では外面にカキメを確認、ロクロ成形のものである。砥石も1点出土している。すべて覆土からの出土である。

砥石（21）

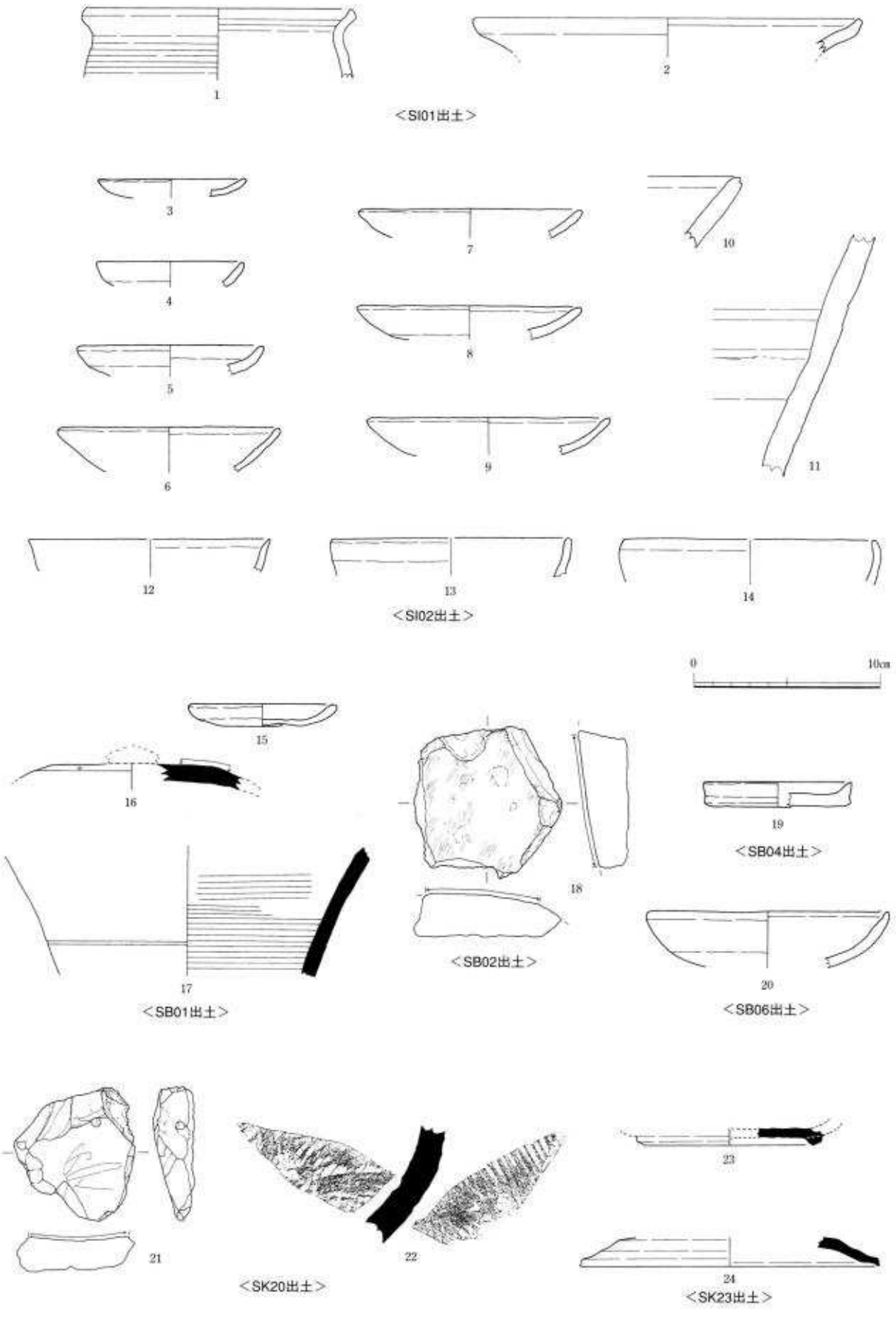
石材は砂岩。長さ7.2cm、幅6.5cm、厚さ2.2cm、重さ82.5ｇ。反り返る1面をもち、斜めに入る穿孔を確認できる。いつの時代でも出土するタイプで時期は不明である。

須恵器　甕（22）

底部付近破片である。内面で同心円文（以下当て具と記述する）Dc類、外面で平行線文（以下タタキと記述する）He類を確認できる。胎土は通常、焼成は堅緻で、色調は灰色である。内外降灰するが、内面の自然釉がガラス状を呈している。

8．ＳＫ２３出土

加賀焼、須恵器、土師器が出土している。加賀焼は甕胴部破片1点、須恵器は坏B身の底部破片2点と坏B蓋の口縁端部1点、土師器3点は煮炊具で、被熱を受けた痕跡をもち熱により器面が脆くなっている状態。このうち1点は甕胴部と判断できる。これらの遺物は2層からの出土が中心である。



第36図　出土遺物（1）（S＝1/3）

須恵器　坏身・蓋（23・24）

23は、台完存率1/36の坏B身底部破片で、台径推定8.9cm、台高0.5cmを測るもの。台形態は踏ん張るタイプ。切り離しはヘラ切り、焼成は良好、胎土は通常、色調は青灰色である。

24は、口縁完存率1/36、口径推定16.0cmの破片。焼成は堅緻で、色調は灰色、胎土は通常。外面端部のみ降灰するので、重焼Ⅱb類と思われる。口縁端部形態から、時期は田嶋編年Ⅱ3期相当と思われる。

9．ＳＫ２４出土

この土坑から土師器破片が1点出土する。煮炊具系と思われるが、詳細はわからない。

10．ＳＫ３２出土

この土坑からは2点のみ遺物が出土している。1点は、下底面の直上から出土した縄文土器、もう1つは覆土からの出土で土師器の甕である。

縄文土器（25）

括れをもつ器形のものと思われる破片で、内面剥離が著しい。薄手。胎土に土器の粉砕粒が多量に含まれ、手触りも粗い。色調は、外面にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面が浅黄橙色(10YR8/4)、断面が灰色(N4/)であった。外面に肩？と考える部分に刺突文が確認でき、前田式のものである。時代は中期末から後期初頭。

土師器甕（26）

ロクロ成形の胴部破片で、砂を多く含有する胎土をもち、外面タタキHe類、内面で粘土紐痕が確認できるもの。色調は、表面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、断面が暗褐色である。

11．ＳＤ０１出土

縄文時代に位置づけられる石皿と石錘各々1点、須恵器では甕胴部破片2点、高坏脚部破片1点、坏B蓋天井部破片1点、瓶類の首部破片1点、不明陶製品1点、石製品として砥石1点、磨石3点、越前焼すり鉢破片1点、加賀焼の甕胴部破片1点、近世陶磁器として肥前系の白磁や染付碗が3点、刷毛唐津の碗体部破片1点、そして被熱を受けた痕跡をもつ石が7点出土している。

以上の出土遺物の出土位置を見ると、近世陶磁器と磨石が遺構の下底や下層から出土し、これ以外は上層や遺構確認面レベルから出土している。よって、近世に機能していた溝と位置づけ可能だろう。なお、可能な限り実測しているが、焼石は実測されていない。

石錘（28）

長軸両端に抉入剥離を加えた打欠石錘である。石材は安山岩で、斜長石が抜けて多孔質となっている状態。長さ5.4cm、幅7.0cm、厚さ1.5cm、重さ70.4ｇである。

石皿（31）

完形でない。1面にて浅い凹みが確認できる。すり減っているとみえて、手触りはつるつるする。石材はデイサイト、残存長10.1cm、残存幅7.9cm、厚さ2.8cm、重さ200.1ｇを測る。

磨石（27・29・30）

磨石は3点出土しており、いずれも被熱を受けているもの。縄文時代のものと言えず、中世に至るまで出土するものである。石材はいずれも安山岩である。

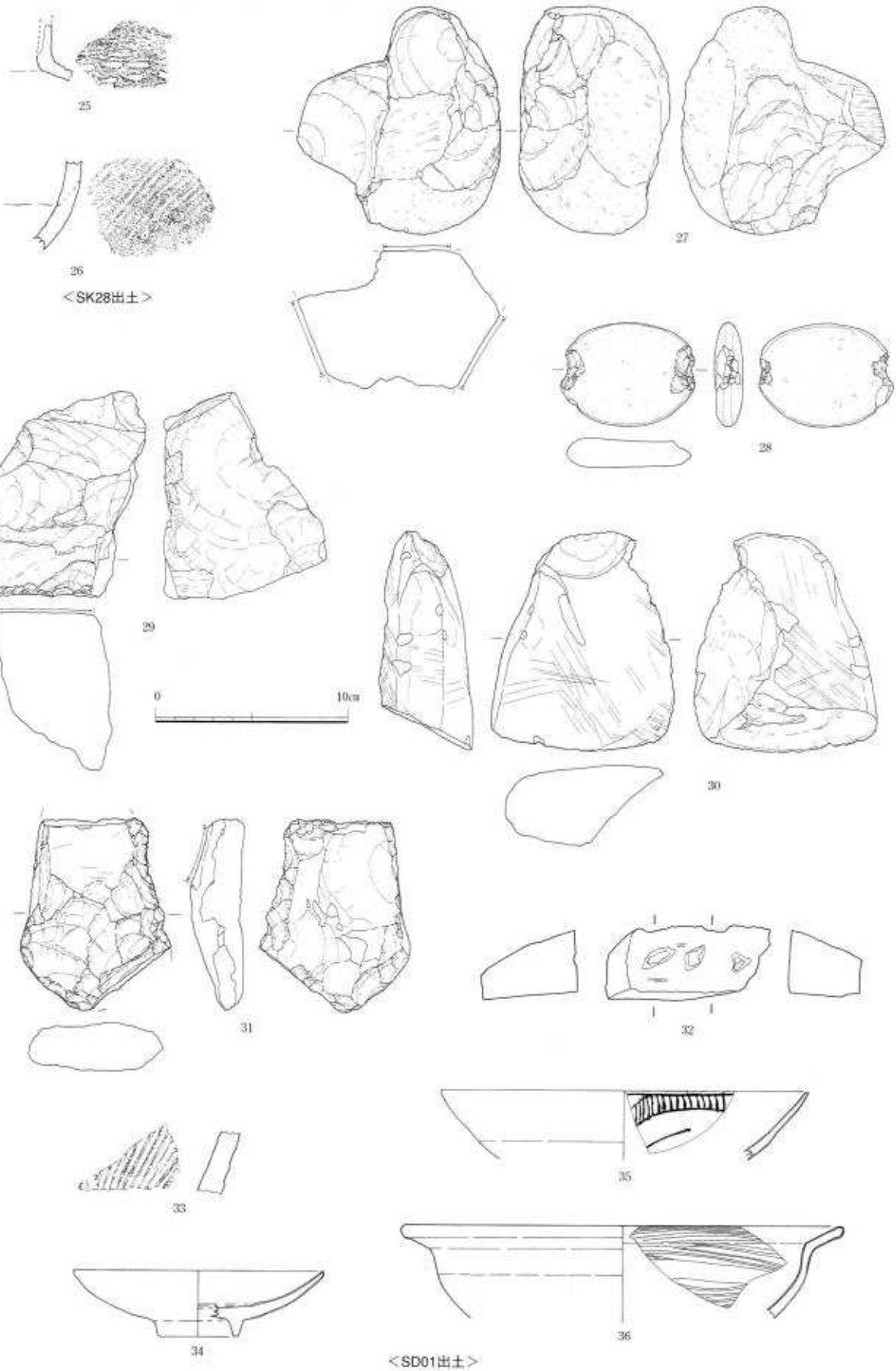
27は、長さ11.95cm、残存幅10.55cm、残存厚7.85cm、重さ1053.9ｇを測る。

29は、長さ10.8cm、幅8.4cm、厚さ8.5cm、重さ656.4ｇ。

30は、長さ11.5cm、幅9.6cm、厚さ4.9cm、重さ491.0ｇを測るもので、被熱は弱く受けたものと思われるもの。

砥石（32）

欠損が著しいが、面を画するタイプの砥石と思われる。一面がつるつるする使用痕跡をもち、この



第37図　出土遺物（2）（S＝1/3）

面で3箇所の欠けが確認できる。残存長3.0cm、残存幅7.4cm、残存厚5.0cm、重さ194.6ｇ、石材は安山岩である。

越前焼（33）

中世越前焼のすり鉢破片である。内面におろし目、外面に実測していないが3条のロクロヒダが確認できる。焼成は非常に焼き締まって堅緻、色調は外面灰褐色(7.5YR4/2)、内面褐灰色(7.5YR4/1)、断面は灰黄褐色(10YR5/2)を呈す。越前焼として典型的な質をもつもの。なお、おろし目の入る時期は中世後期の新段階ということである。

近世陶磁器（34～36）

34は、台完存率14/36、口径12.8cm、器高3.4cm、台径4.1cmを測り、内面には蛇の目釉剥ぎ、削りだし高台をもつもの。色調は、表面が明緑灰色(7.5GY7/1)、胎土が灰白色を呈す。肥前系の白磁碗で18世紀代のものと思われる。

35は、口縁完存率4/36、口径19.0cmを測る染付碗の口縁部破片。色調は、表面灰白色(5GY8/1)、胎土が白色で、34と同じ肥前系18世紀代のものと思われる。

36は、刷毛唐津の皿で、口縁端部が外反する器形。口縁完存率3.5/36。色調は、釉の部分で暗灰黄色(2.5Y4/2)～灰黄色(2.5Y6/2)、胎土は暗灰黄(10YR5/2)。釉に細かな貫入が確認できる。

須恵器　坏B蓋・高坏・甕（37～41）

37は、坏B蓋天井部破片で、口縁端部とツマミが欠損しているもの。天井ケズリ、内面撫で調整が確認できる。焼成は良好、色調は灰色、胎土は通常。外面は全面降灰しており、重焼Ⅰ類になるだろう。

38は、壺蓋もしくは坏B蓋天井部破片。天井部にケズリを伴い、内面にヘラ記号が確認できる。焼成は良好、色調は暗灰色、胎土には砂が多い。また、外面は降灰、一部に重焼痕が確認できる。

39は、高坏脚部破片。中空タイプで、外面に2条沈線、内面に絞り痕と指撫でが確認できるもの。胎土は通常、焼成は良好、色調は青灰色である。

40・41は甕破片。40は胴部破片で内面当て具Da類、外面タタキHa類が確認できるもの。胎土には砂が多く含まれ、焼成は堅緻、色調は暗灰色である。内外降灰する。断面実測箇所が悪く申し訳ないが、図版拓本からわかるように、自然釉の垂れ位置から本来はもう少し横になるものである。

41は、底部破片。内外よく降灰している。外面タタキHb類、内面当て具Da類が確認でき、胎土は砂が多く、焼成は堅緻で、色調は暗灰色である。

不明陶製品（42）

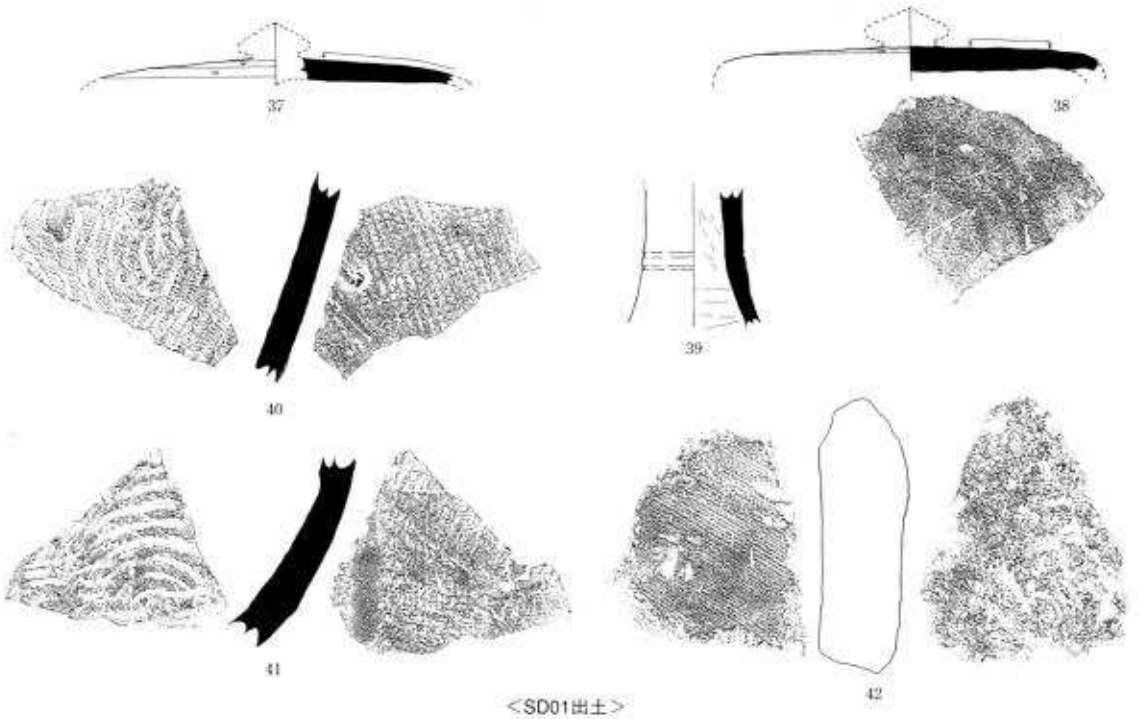
須恵質である。残存長11.0cm、残存幅8.5cm、厚み3.5cmを測るもの。外面に刷毛調整、内面に同心円文Da類が確認できる。胎土に砂が非常に多く含まれ、焼成は良、色調は暗青灰色、一見瓦かと間違えてしまうような質を持っている。図では内外逆に提示され申し訳なく思うが、ハケ調整の認められる方が外面である。この図中断面の外面上端部分位置で、若干外反気味となる。用途が何なのか判断がつかないのだが、以下の可能性がある。外反気味となる部分が身と蓋の接触部付近に似ることや、外面の刷毛調整から、陶棺の可能性。しかし、陶棺とするには厚すぎるということである。次に鴟尾や相輪・九輪の可能性。古代寺院存在の有無という大きな問題が残る。次に塼の可能性。塼にしては薄いとのことで、同心円文をもつ塼もあるそうであるが、分布圏内が限られるため北陸まで及ばないということである。この陶製品の質は、古代のもので間違いなかろうということである。

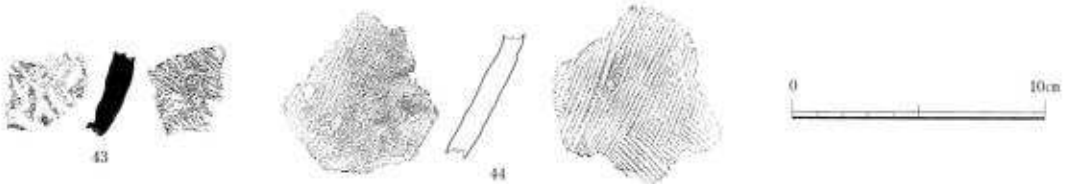
12．ＳＤ０２出土

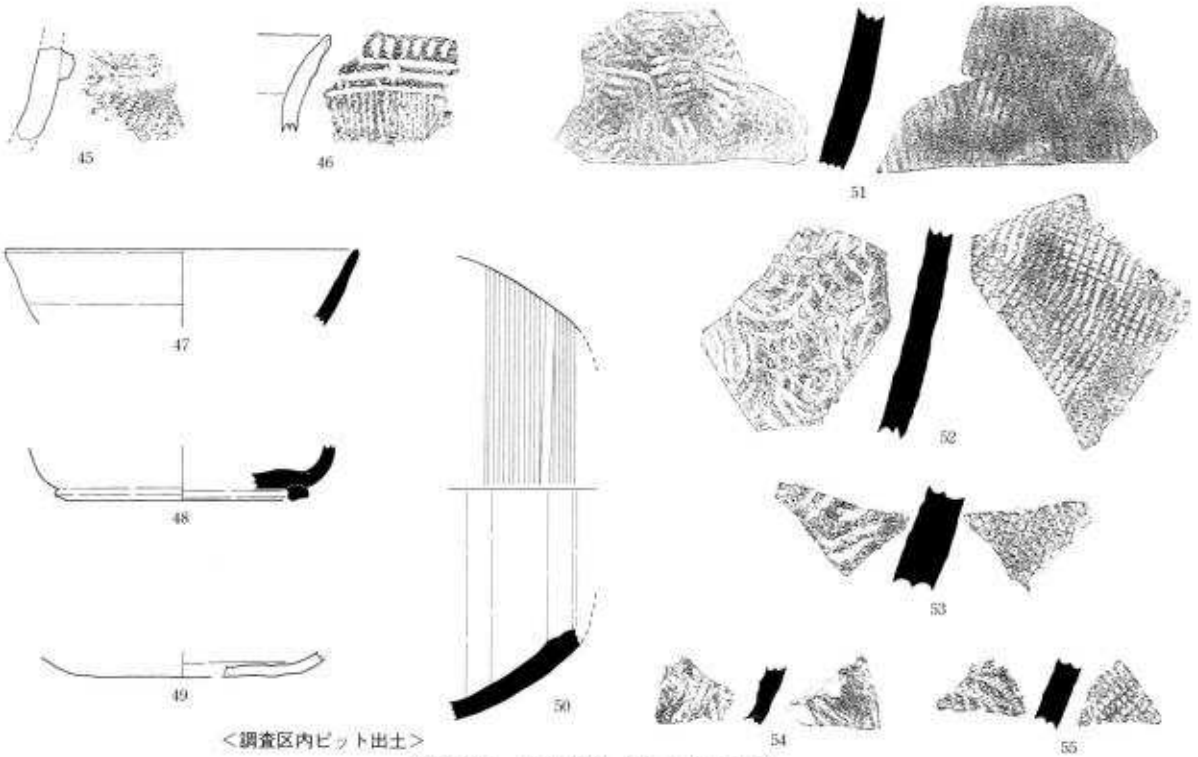
土師器ハケ甕破片1点、土師器で被熱を受けている煮炊具胴部破片が1点、合計2点が出土するだけである。出土層位は、ハケ甕が溝の底面から、もう1点が覆土からである。実測はされていない。

13．ＳＤ０６出土

須恵器3点、土師器4点が出土している。内訳は、須恵器が、坏B身底部、甕胴部破片、双耳瓶か平







第38図　出土遺物（3）（S＝1/3）

底壺Fの底部破片で、土師器が、外面に焦げを持つハケ甕口縁端部破片、ハケ鍋胴部、小甕頸部破片、そして外面にケズリを伴う煮炊具胴部破片である。以上の遺物はすべて覆土から出土している。

須恵器　甕（43）

底部に近い部位の胴部破片。内面当て具Da類、外面にカキメが確認できる。断面実測に合わせるために拓本位置が曲がって掲載されているが、本来カキメが横方向にのびるもの、許されたい。また、胎土は砂が多く、焼成は堅緻で、色調は青灰色である。

土師器　ハケ鍋（44）

破片のアールが緩やかで鍋胴部と考えられるもの。内外にハケメ調整が認められる。胎土には、砂が少ないが、土器粉砕粒なのか赤色や橙色粒が含有している。焼成では土師器としては堅緻、色調は外面にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面にぶい黄橙色(10YR6/3)、断面は灰白色(10YR8/2)である。

14．調査区内ピット出土

縄文土器4点、須恵器9点、中世土師器1点、土師器5点、土錘1点、鉄滓2点、近世陶磁器2点が出土している。出土地点はピットから各々1点ずつ出土するというパターンが殆どであり、1箇所だけ3点出土するものがあるだけである。要するに非常に出土数が少ない。ここで、実測をしていない遺物について少し触れたいと思う。

P2からは縄文土器細片が出土している。内面に焦げ、外面が被熱を受けたため赤化し器面が剥落している状態で、胎土には土器粉砕粒が多量に含まれる。P6からは被熱を受け内外器面が剥落した縄文土器破片が出土する。P4からは土師器の甕胴部破片が出土していて、外面に平行線文タタキを確認できるが、内面は摩耗して不明である。P5からは、土師器の小甕？破片、実測した須恵器の大甕破片、近世陶磁器の細片が出土している。P14からは須恵器坏Aの底部破片、P15・17からは鉄滓、P18からは土師質の土錘破片。P22からは、土師器食膳具細片が出土、内外剥離が著しい。P24・29からは土師器細片が出土、胎土に赤色粒を含有しており、中世のものかもしれないが、内外とも剥離が著しく何とも言えないものである。P31からは近世陶磁器の底部破片が出土、ケズリ出し高台を伴い、肥前系のものである。

上記以外の遺物が実測可能であったので、これから詳細を述べる。

縄文土器（45・46）

45は、P1出土の土器粉砕粒が多量に入る縄文土器独特の質をもつ破片。被熱を受けたことによる表面剥離が著しい。浮帯と、縄文施文を確認できる。原体RLの撚糸文か。浮帯と縄文の特徴から古府式の可能性がある。色調は、外面が明赤褐色(2.5YR5/8)、内面がにぶい赤褐色(5YR4/3)、断面は黒褐色である。なお、この破片の図掲載は間違っており、90度右へ回した位置が正位置となる。被熱からも底部付近の破片ということである。

46は、P16出土の口縁部に櫛形の刺突文、口縁部下に3条の半截竹管による半起隆線文、その下に原体LLの縄文が確認できるもの。内面は磨かれている。胎土には土器粉砕粒を含有、色調は表面が橙色(7.5YR7/6)、断面が褐灰色(7.5YR5/1)である。古府式に位置づけられよう。

須恵器　　坏・坏B身・横瓶・甕（47・48・50～55）

47は、P19出土の坏口縁部破片。AかBかは不明である。口縁完存率2.5/36で、口径13.7㎝。胎土は通常、焼成は良好、色調は青灰白色である。

48は、P10出土の坏B身の底部破片で、台完存率2/36、台径10.0㎝、台高0.5㎝を測る。台形態は踏ん張るタイプで、体部立ち上がりがやや箱形になるものと思われるもの。内面は降灰せず、外面から台底にかけて降灰、黒光りしている。胎土は通常、焼成は良、色調は青灰色である。

50は、P13出土の横瓶で円盤閉塞部破片。外面にカキメ、内面に指撫で、閉塞部分で円盤を接着した指圧痕が確認できる。胎土は通常、焼成は堅緻、色調は青灰色である。外面のみ降灰する。

51～55は、甕破片である。51はP7出土の胴部破片で、内外とも降灰が著しく調整の分類がよくわからない。外面にてタタキ調整後横指撫でだけ確認できる。底部付近の破片と思われる。胎土は砂が多

く、焼成は堅緻、色調は暗青灰色である。

52は、P27出土の胴部破片。内面当て具Dc類、外面タタキHa類、胎土に砂が多く、焼成は良好、色調は暗灰色である。

53は、底部付近の破片でP5出土のもの。内面当て具Dc類、外面はよくわからない。内外頗る降灰しており、胎土に砂が多く含まれ、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

54は、P9出土のもので、内外よく降灰し、内面に釉だまりがみられる。外面タタキHa類、内面当て具Dc類が確認でき、胎土は通常、焼成は堅緻で、色調は灰色である。底部付近の破片であろう。

55は、P21出土のもので、外面タタキHa類、内面当て具Dc類、胎土は砂が多く、焼成は良好で、色調は暗灰色である。

中世土師器　皿（49）

非ロクロ成形の土師器皿底部である。底部完存率6/36。底径は7.8cm。色調は橙色(7.5YR7/6)、胎土は在地の土であるが、砂が少ない。焼成はしっかりしているが、堅緻とまではいかないものである。質などから中世のものと思われる。P28出土である。

15. 調査区内グリッド・包含層出土

調査区のグリッド・包含層遺物は、遺構検出面より上層で出土したものや、遺構に伴わないものである。出土数は、石器剥片1点、縄文土器6点、須恵器25点、土師器21点、土師質陶製品の土鈴1点、鞴羽口破片1点、砥石1点、越前焼1点、加賀焼2点、瓦質土器1点、中世陶磁器（青磁）2点、中世土師器2点、土錘4点、近世陶磁器14点、焼石5点が出土している。

出土点数が少ないため、やはり実測は可能な限り行っているが、実測されていないものの中から、以下少し記述しておきたい。縄文土器は6点出土、すべての胎土に土器粉砕粒を多量含有する。内面に焦げをもつものや大杉谷式のものが確認できるが、表面剥離が著しい小破片ばかり。須恵器では実測したもの以外に、高坏脚部、短頸壺肩部?、壺?、盤A?、タタキ・当て具を持たない貯蔵具の胴部破片が出土している。土師器は、21点出土中1点のみ実測掲載している。外面にタタキをもつ甕胴部、小甕口縁・胴部、ロクロ小甕、外面にケズリをもち厚みもある鍋と思われるもの、ハケ甕が確認できている。この他は、被熱を受けていて煮炊具と思われるものが多いが、内外摩耗が著しい。ハケ甕破片は2点出土しており、1点実測、もう1点は胴部破片。そして以上の他に器種の不明な破片が出土している。土錘で実測していないものは、完存率が1/3以下の破片で、このうち1点は細長いタイプと予想できるものである。鞴羽口は、細片で実測不可能のもの。越前焼1点は、すり鉢の底部で、内面が擦れてつるつるする使用痕跡をもつもの。中世土師器2点中1点は実測している。もう1点は埦の口縁部で外面に煤？が付着する。中世陶磁器は、青磁の細片破片。このうち1点で蓮弁紋を確認している。近世陶磁器は全部で14点出土しており、内訳は、備前系8点、唐津3点ですべて刷毛唐津。国産青磁破片2点、瀬戸・美濃系の鉄釉碗体部破片1点である。刷毛唐津は1点実測、実測されていない1つは口縁部細片、もう1つは体部破片。備前系は、染付碗5点中1点実測、この他は口縁部細片や体部細片。染付ではない底部3点は実測している。焼石は、被熱を受けている石で加工痕等はないもの。

では、以下実測された遺物の詳細を述べてゆく。

須恵器　　坏B蓋・坏・甕・小鉢・小壺（56～68）

56は、坏B蓋の口縁端部で、口縁完存率1/36、口径は推定で15.7cm前後と思われるもの。胎土は通常、焼成は良好、色調は灰色である。外面は全面降灰しており、重焼Ⅰ類か。口縁端部形態から田嶋編年Ⅱ$_3$期に位置づけられる。

57～59は、坏口縁部でAかBかはわからない。57は、口縁完存率が3/36、口径推定12.7～13.0cm。胎土に砂が多く、焼成は良好で、色調は青灰色である。外面のみ降灰している。

58は、口縁完存率2/36で、口径推定12.8cm前後。胎土は通常で、焼成は頗る堅緻、色調は灰色である。外面のみ降灰しており、口縁端部から1.5cm範囲に限られている。坏Aの可能性があるか。

59は、口縁完存率1/36で、胎土は通常、焼成は良好、色調は青灰色である。外面全面と内面の端部

から0.5cm範囲に降灰がみられる。

60は、小鉢胴部と考えられるもの。外面にケズリ調整が確認でき、内面の降灰が著しい。胎土は砂を多く含み、焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈す。

61～67は甕の破片である。61は、実測図に表されていないのだが、外面カキメ上からケズリ調整が確認できる。内面にも当て具Da 類のちナデ処理が確認できる。胎土は通常、焼成は良好、色調は青灰色である。

62は、胴部下半の破片で、焼成は良、胎土は通常で、色調は暗灰色である。外面タタキHb類、内面当て具Dc類が確認でき、外面は全面降灰する。

63は、外面タタキHa類、内面当て具Da類が確認出来るもの。胎土に砂が多く、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。外面は全面降灰し、ややガラス状となっている。

64は、底部破片である。外面で、上半分にHa類のタタキ調整が確認できる。内面は撫でられている。胎土に砂を多く含み、焼成は堅緻で、色調は灰色である。外面のみ降灰する。

65は、外面タタキHa類、内面当て具Da類、胎土に砂を多く含み、焼成は良好、色調は暗灰色の内外降灰する胴部と考えられる破片。

66は、外面タタキHa類、内面当て具はDa類？、内外降灰し、特に外面がよく降灰する胴部破片で、胎土は通常、焼成は良好、色調は暗灰色のものである。なお、カキメが外面に施されて、図掲載の拓本位置が間違っていること許されたい。

67は、外面タタキHa類、内面当て具は器面摩耗のため不明の胴部破片である。胎土に砂が多く混入し、焼成は良好、色調は青灰色のものである。

68は、小壺の底部破片で、外面に糸切りが確認できる。完存率が底部4/36、底径8.0cm。胎土に砂が多く、色調は暗灰色、焼成は良好だが、とても雑な印象を受けるもの。

土師器　ハケ甕（69）

ハケ調整を確認できるもので器肉が薄いことからハケ甕としている。内面の調整は確認できない。胎土は通常、焼成は良。色調は、表面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、断面が褐灰色(10YR5/1)である。

土錘（70）

土師質の土錘である。幅1.6cm、残存長4.6cm、孔径0.4cmを測る。胎土は通常で、土師質としては堅緻、色調は表面が浅黄橙色(10YR8/4)、断面が灰白色(10YR8/2)である。残存重量8.5 g。

土鈴（71）

幅3.9cm、残存長4.8cm、孔径0.4cmを測る土師質の土鈴である。土師質としては堅緻で、胎土は砂がやや少ない。色調は、浅黄橙色(10YR8/3)を呈す。外面は部分的に皺が入り全体に指押さえの痕跡、内面には絞り痕跡が確認でき、先端を細らせるために摘み上げるように絞ったものと思われる。穿孔は図左方向から行っており、はみ出した粘土を指で押さえている。時期は不明だが、土鈴ということもあり、古代に位置づけられるものであろう。

砥石（72）

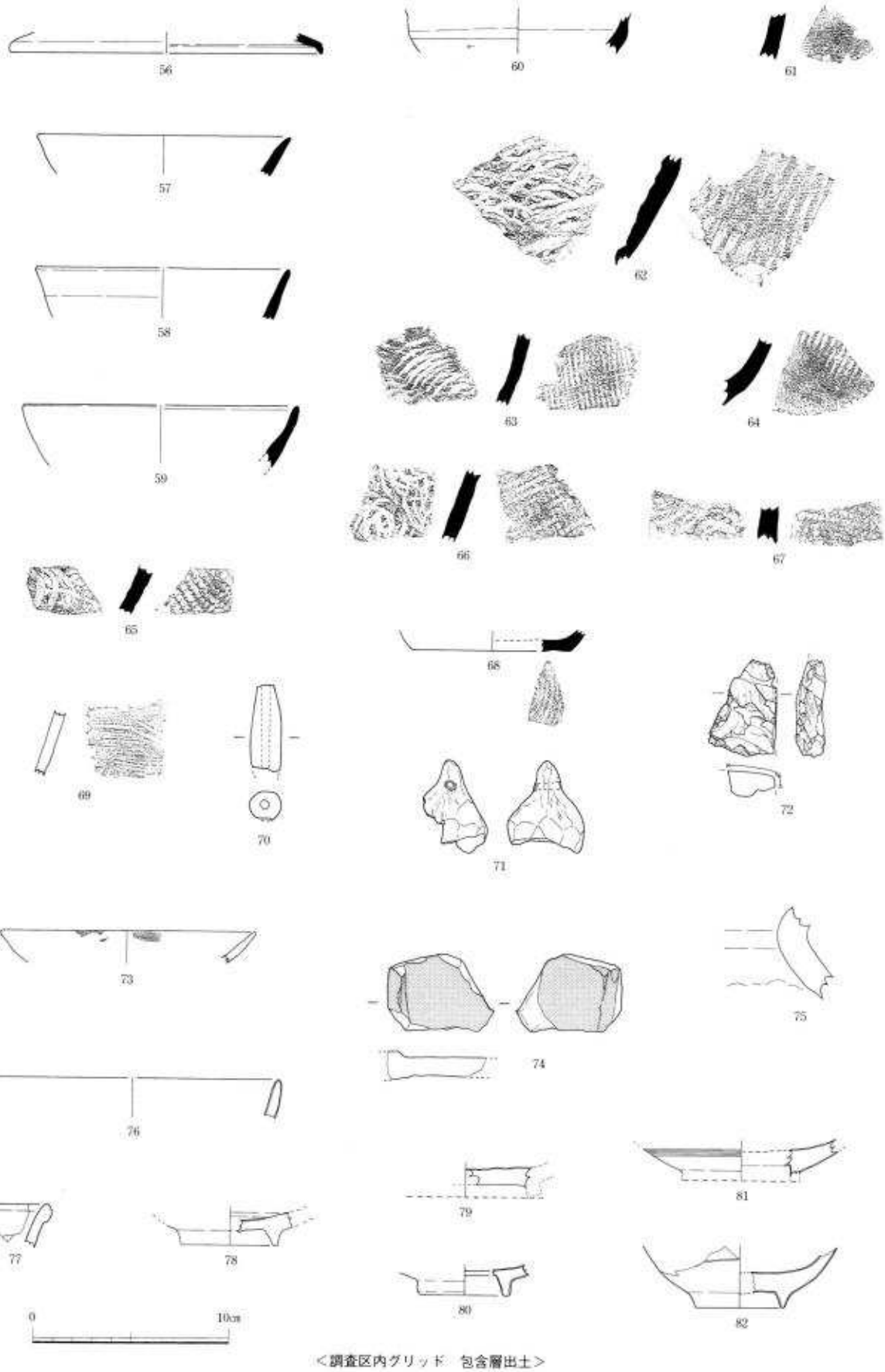
残存長5.0cm、残存幅1.5cm、残存厚1.5cm、重さ23.3 g を測る。石材は流紋岩で、長方形等に切り出して砥石とするタイプ。

中世土師器　皿（73）

口縁完存率1.5/36の破片で、口径推定12.9cm前後になろうか。端部内外に油膜痕が確認でき、灯明皿と考えられる。土師器としては焼成が堅緻で、色調は灰黄褐色(10YR5/2)、胎土は砂を少し含む。中世の土師器皿と考えているが、古代のものかもしれない。

瓦質土器（74）

内外ともに炭素吸着する所謂瓦質のもの。胎土は砂や土器粉砕粒なのか赤色粒が多く含まれる。色調は表面が黒色(7.5YR2/1)でマット状、断面がにぶい褐色土(7.5YR5/3)。断面をみると赤化までしていないが、熱を受けた時にみられるような脆さ・柔らかさがある。残存長3.9cm、残存幅5.1cm、厚み1.0～1.4cmを測る。瓦質土器は中世で火器類とされているが、器種はわからない。



＜調査区内グリッド　包含層出土＞

第39図　出土遺物（4）（S＝1/3）

加賀焼 甕（75）

頸部径推定45cmの甕頸部破片である。頸部完存率は3/36。色調は、表面が暗褐色(7.5YR3/3)、断面はにぶい褐色(7.5YR5/4)で艶をもつ。外面全面と内面の外反転換点より上位に降灰が確認できる。断面の還元は見られず、焼成中ずっと酸化雰囲気であったのか、焼き締まりは弱いものとなっている。また、胎土には砂が多量に含まれる。口縁端部欠損のため時期は不明。

近世陶磁器（76～82）

76・79は国産青磁と思われる碗で、76は口縁完存率2.5/36、口径推定15.0cm前後と思われるもの。色調は、表面が緑灰色(7.5GY6/1～5/1)、断面が灰白色(N7/)、内外に貫入が入る。79は、底部破片。内面全面と底面の外側から0.1cm範囲に釉を確認できる。色調は表面がオリーブ灰白色、胎土が灰白色である。

77は、刷毛唐津の鉢とされるもの。色調は、外面がにぶい黄橙色(10YR7/2)、胎土がにぶい赤褐色(5YR5/4)。胎土に赤色粒の混入が確認できる。

78・80・81・82はいずれも肥前系と思われるものである。78は、底部完存率4/36、底径5.0cmで、削り出し高台、内面に蛇の目釉剥ぎがみられる。色調は表面暗オリーブ色(SY4/4)、胎土にぶい黄橙色(10YR6/3)。

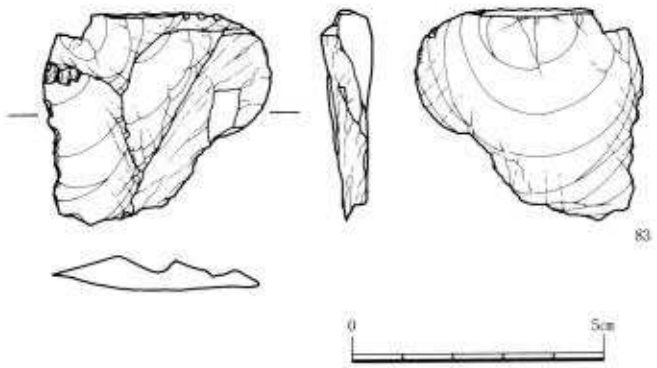
80は、台完存率9/36、底径4.5cmを測る、削り出し高台を持つ底部破片。色調は釉部分がにぶい黄色(2.5Y6/4)、胎土がにぶい黄褐色(10YR7/3)で緻密、白色粒が混入している。

81は、削り出し高台をもつもので、色調は表面が浅黄色、胎土がにぶい橙色(7.5YR7/4)。

82は、染付碗破片。台完存率12/36で台径4.5cm、削り出し高台である。色調は表面の釉が明緑灰色(7.5GY8/1)、胎土が白色である。外面釉には粗い貫入が入っている。

石器剥片（83）

長さ4.2cm、幅4.6cm、厚さ1.0cm、重さ10.1ｇを測る、幅広な剥片である。打点はソフトハンマー、打面は線打面、剥離角166度、石材は酸性凝灰岩である。



第40図　出土遺物（5）（S＝2/3）

引用・参考文献

小松市教育委員会 2005『幸町遺跡Ⅰ』

小松市教育委員会 1998『長田南遺跡』

北陸中世土器研究会編 1997『中・近世の北陸』考古学が語る社会史　桂書房

第5章　まとめ

本書は平成16・17年度に行った刀何理遺跡の発掘調査報告書であるが、繰り返し述べてきたとおり、調査区のほぼ全域に削平が及んでいたことにより遺物の検出は極めて少なく、遺構についても既に上層が失われていて廃絶時の状態を知ることができないものもあったため、実像を解明したとは決して言えない。調査区からは複数の掘立柱建物、竪穴建物、溝、土坑等の遺構が検出されたものの、遺構に伴う遺物が全く無いか、伴う場合でも1～数点のものが大半であったため、多くの遺構は用途や時期が不明のままである。しかしながら、出土遺物の総数が200点強という、調査面積が大きいことから考えると非常に乏しいものではあったが、その内容は、第4章の冒頭で述べた種別と器種のとおり実に多彩なものであり、長きにわたって営まれた集落の存在を裏付けるものと言えよう。

遺物が非常に少ないにも関わらず遺物によって時代を推定するのは危険な行為である、と指摘する向きもあろうが、本報告書では、可能な限り各遺構の位置づけを行い、4つの時代に営まれたものと判断する。すなわち、刀何理遺跡は、縄文時代、7世紀後半～8世紀前半、13世紀半ば～14世紀前半、近世(＝18世紀)である。

伴う遺物の数が比較的多かったのは竪穴建物で、SI01で12点、SI02で35点が出土した。床レベルあるいは掘り方からの出土であったので、SI01、SI02はそれぞれ8世紀前半、13世紀半ば～14世紀前半のものと判断した。ただし、SI02から出土した中世土師器(＝4)は灯明皿の可能性があり、その場合は時期が下ることになる。

掘立柱建物では、矩形の確認できる5棟はいずれもほぼ南北に軸を持つ東床建物構造の建物で、中世のものである。5棟(＝SB05・06は建て替えなのでほぼ重なる)は、O～Xグリッドの南北15mの帯状の範囲に同じ向きに建つが、関係性は判断できない。いずれにせよ調査区の南部分を占め、調査区が刀何理遺跡の北部に位置することを考えると、掘立柱建物の建つ集落の中心はこれらより南にあると判断するのが妥当であろう。出土した遺物にはSB01のP1・8のように古代のものが含まれるが、紛れ込んだと考えるのが妥当、と述べた(＝第4章)。絶対量の少ない遺物の中から遺構により推定できる時代と矛盾するものを除外し、残った遺物のみで時代を特定している、換言するならば「想定した結果を確実にするために、恣意的に材料の選別を行っている」と映るかも知れない。しかしながら本報告書で導いた時代は、遺構と遺物を総合的に判断した結果であり、掘立柱建物で言えば、遺物の情報は遺構から得られる情報を補完するものとして扱っていることをご理解いただきたい。

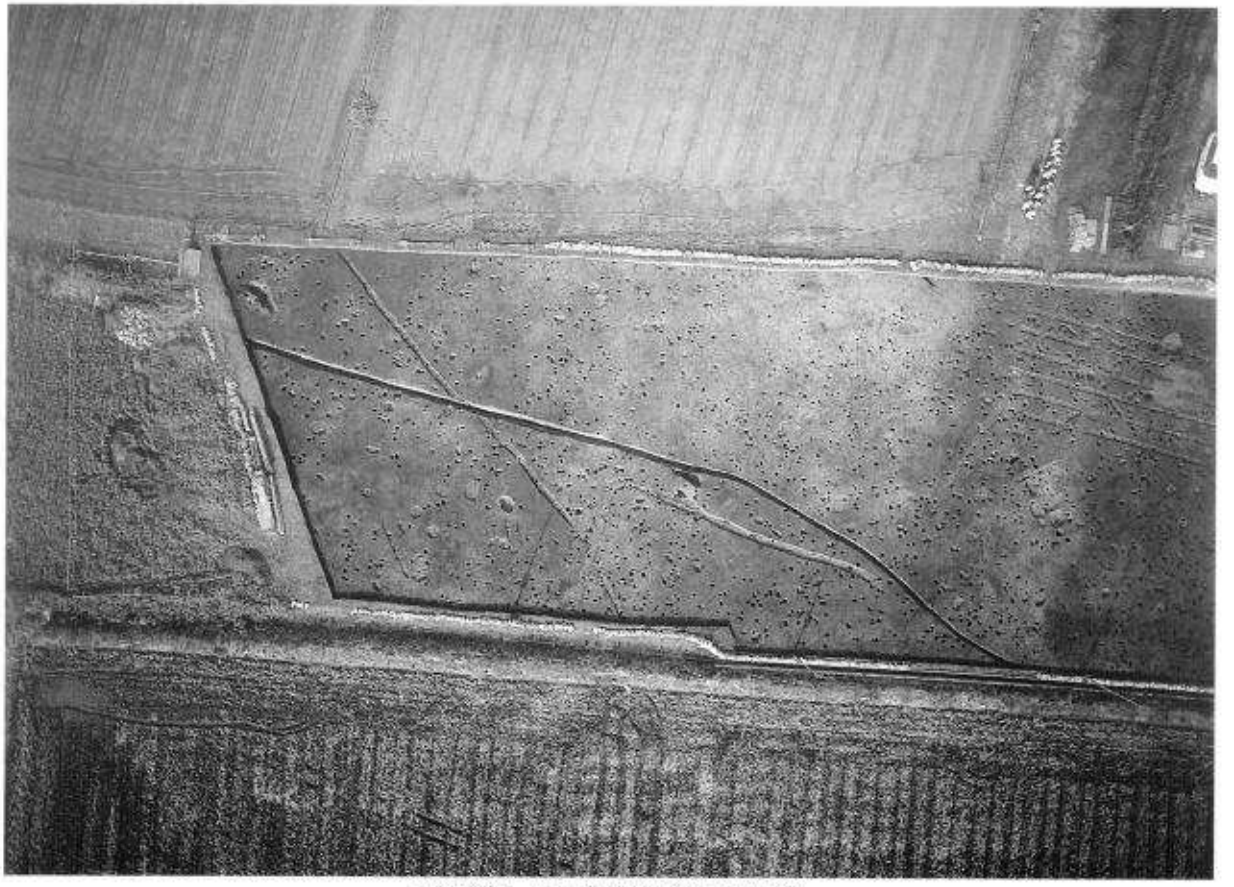
報告書抄録

ふりがな	とかりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	刀何理遺跡発掘調査報告書
副書名	南加賀道路（粟津ルート）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	廣田いずみ・西田由美子
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650　石川県小松市小馬出町91番地　　TEL　0761-24-8132
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とかりいせき 刀何理遺跡	いしかわけんこまつ 石川県小松 しやたまち 市矢田町ソの部46~48, 54~56, 62~64	17203	03112	36度 20分 31秒	136度 24分 37秒	2004.7.26 ｜ 2004.12.22	2,000㎡	道路改良事業
						2005.5.23 ｜ 2005.6.29	1,900㎡	

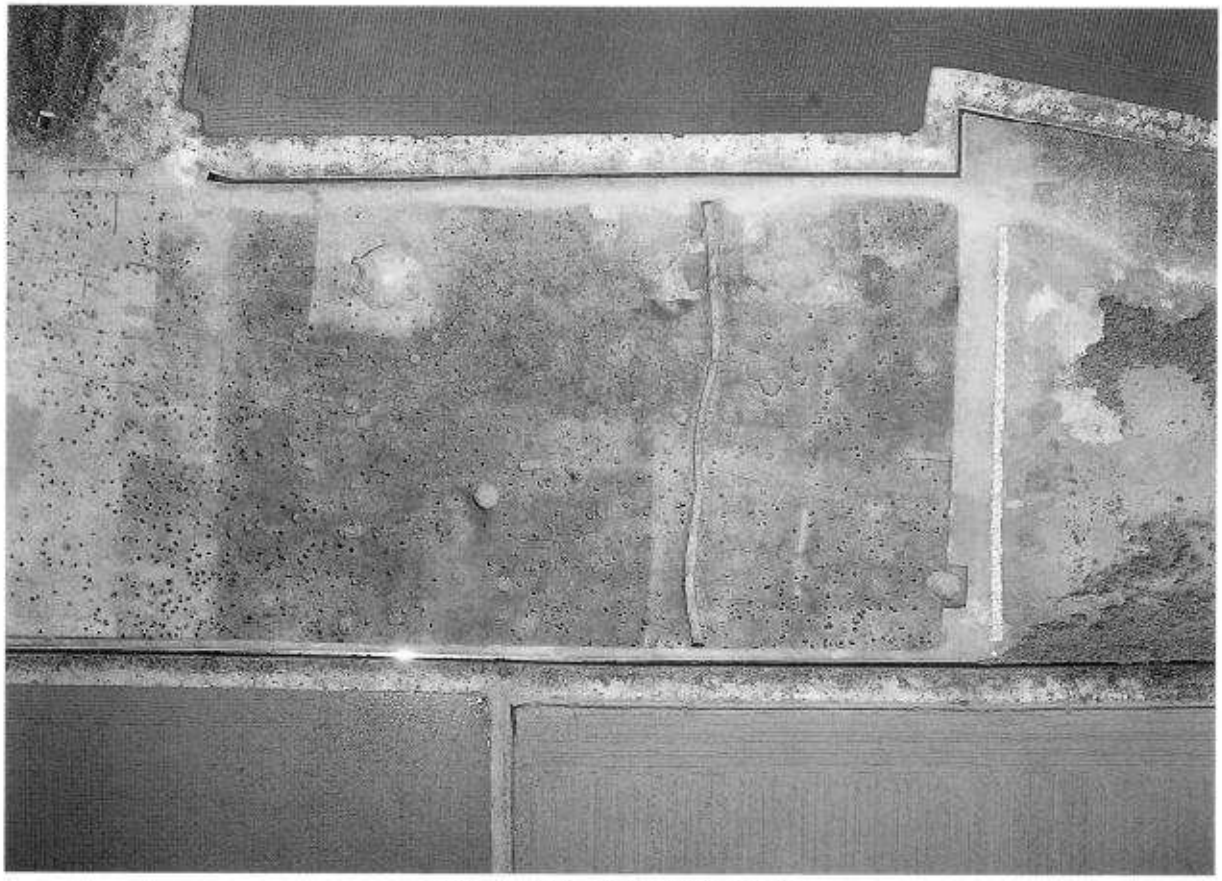
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
刀何理遺跡	集落跡	縄文 奈良・平安 中世 近世	掘立柱建物5棟、竪穴建物2基、溝6条、土坑33基、柱穴	縄文土器 砥石 須恵器 土師器 土師皿 中世陶磁器 中世土師器 近世陶磁器	

刀何理遺跡　全景　遠景航空写真（平成16年10月、南より撮影）

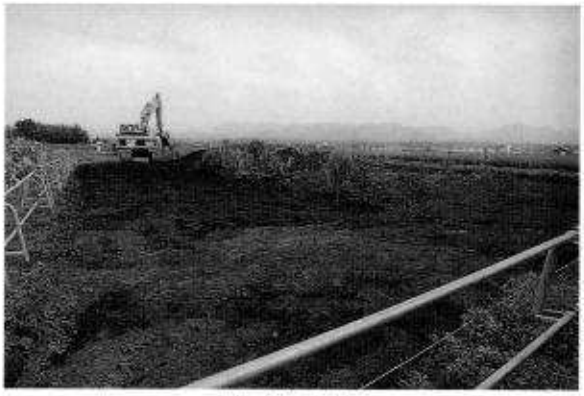


刀何理遺跡　Ⅰ区　航空写真（真上より撮影）

刀何理遺跡　Ⅱ区　遠景航空写真（平成17年6月、南より撮影）



刀何理遺跡　Ⅱ区　航空写真（真上より撮影）


第1期表土除去

遺構検出状況

遺構掘削と検出

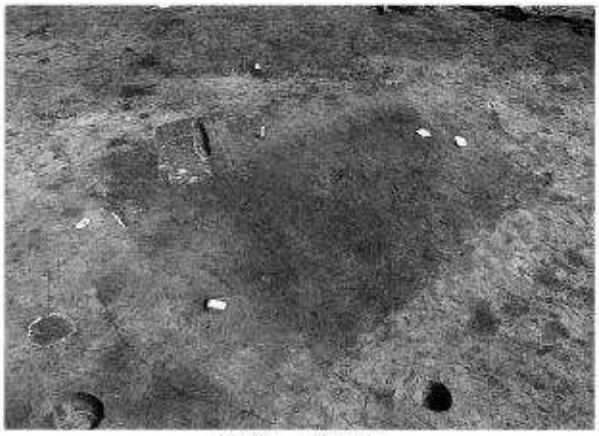
第2期表土除去

現場事務所前

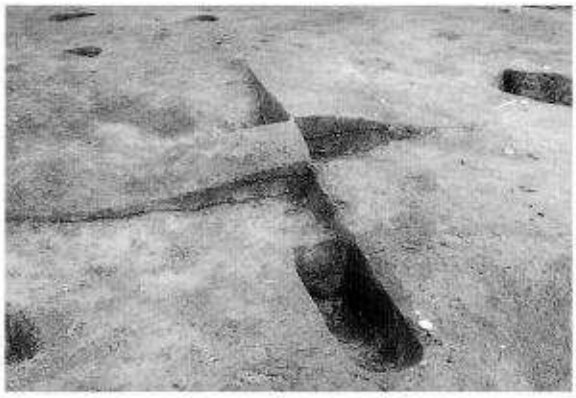
第2期空中写真撮影

埋め戻し

調査終了後



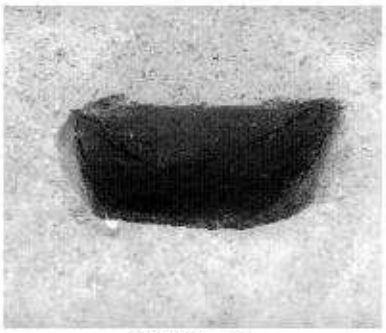
S I 0 1　検出状況



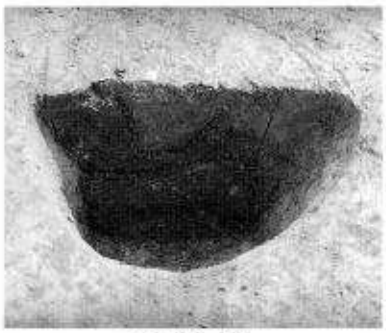
S I 0 1　焼土

S I 0 1　床セクション

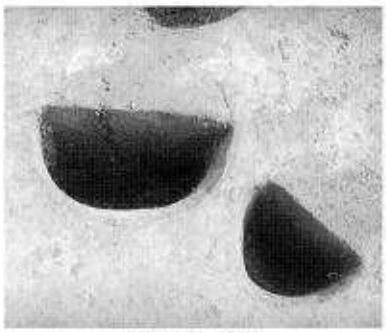
S I 0 1　床面断ち割り



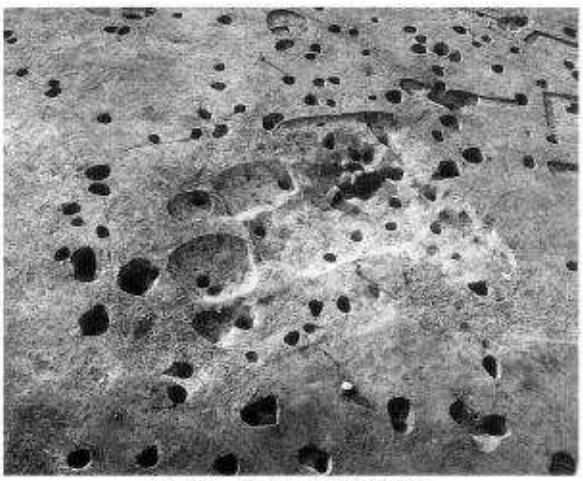
S I 0 1　P1



S I 0 1　P2

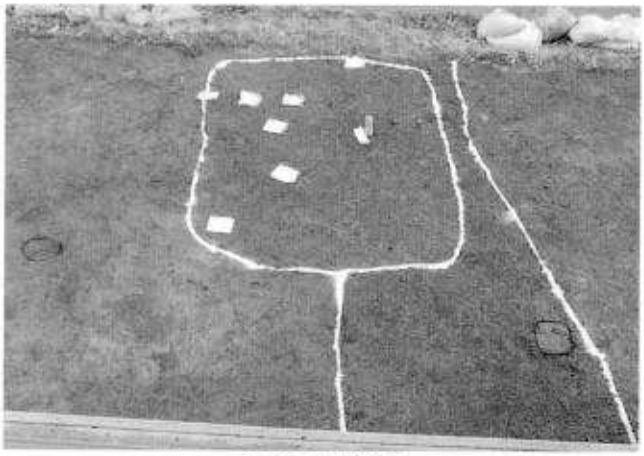


S I 0 1　P3-4

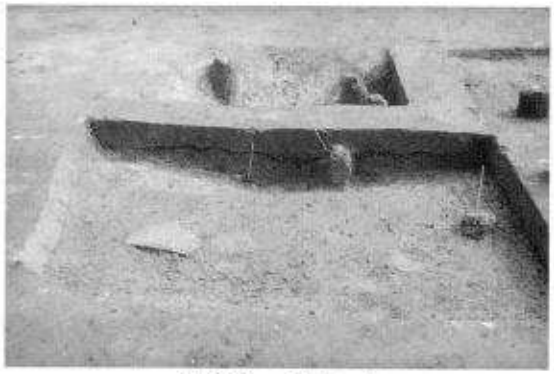


S I 0 1　掘り方・遺物検出状況

S I 0 1
完掘状況

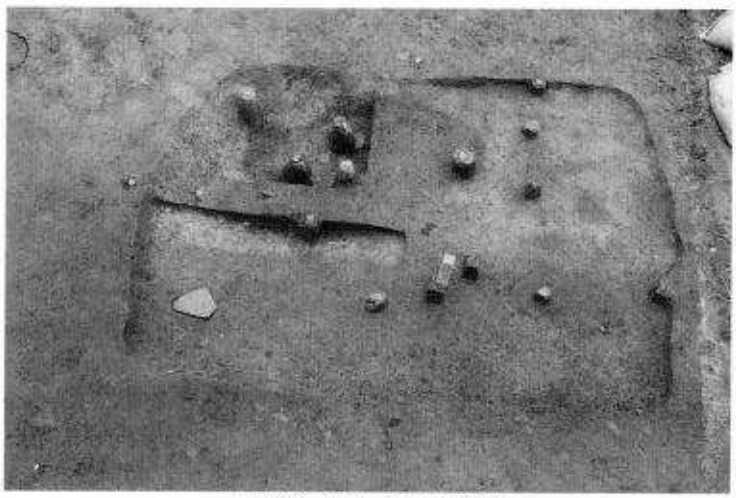


SI02　検出状況

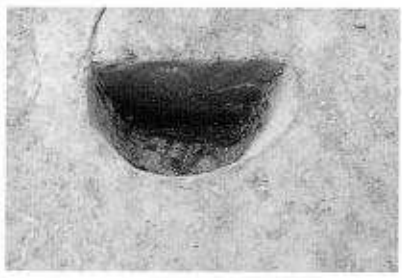


SI02　aセクション

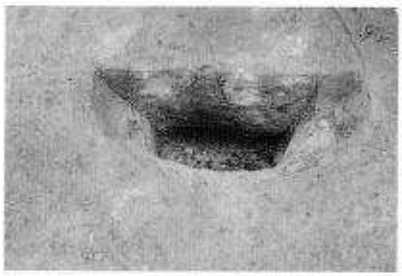
SB01　P1



SI02　床面・遺物検出状況

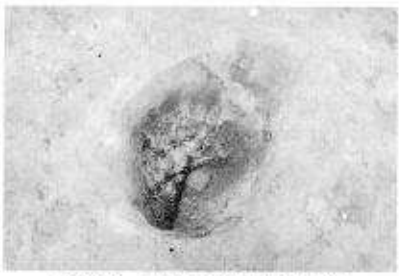


SB01　P2



SB01　P3

SB01　P4



SB01　P10柱穴内遺物検出状況

SB01　北より

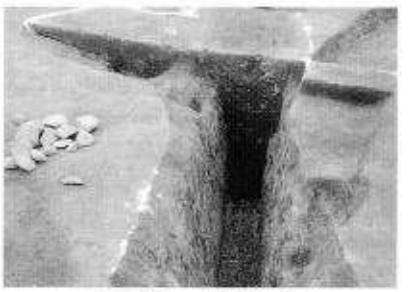
SB01

SB03・SB04

SB05・SB06

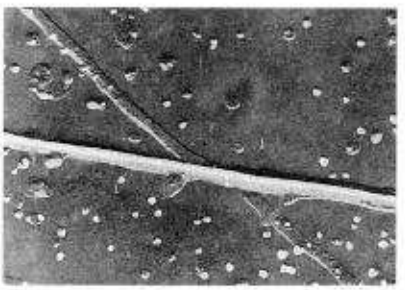
SD01　aセクション

SD01　bセクション



SD01　eセクション

SD01　bセクション

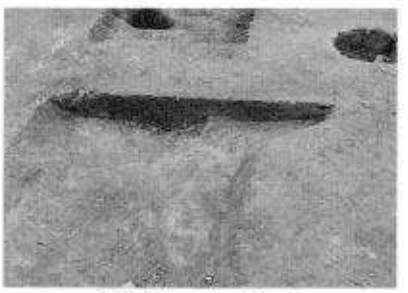


SD01・SD02

SD02　aセクション

SD02　bセクション

SD02　cセクション

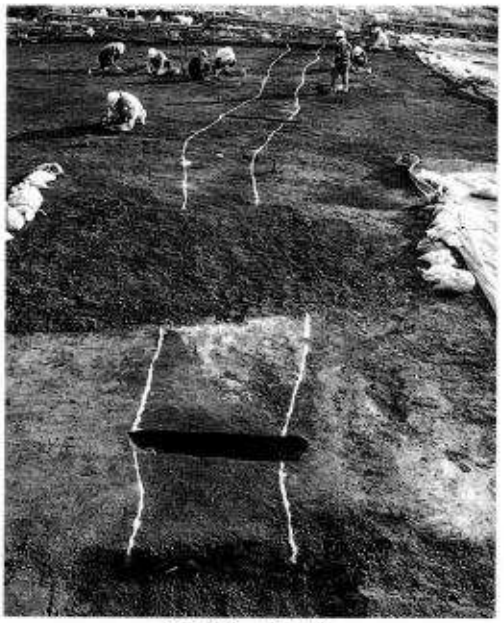


SD02　dセクション

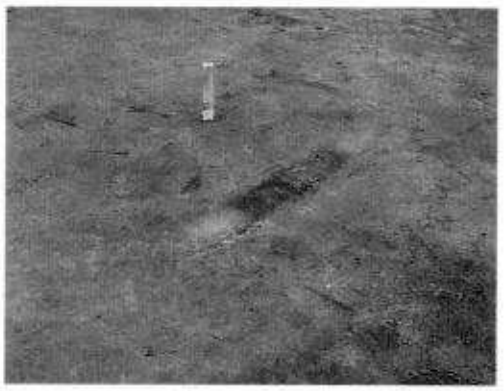
SD03・04　aセクション

SD03・04　bセクション

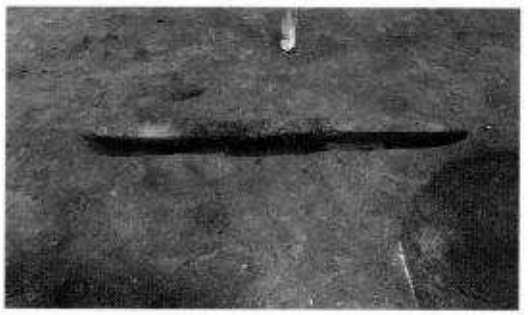
SD03・04　dセクション



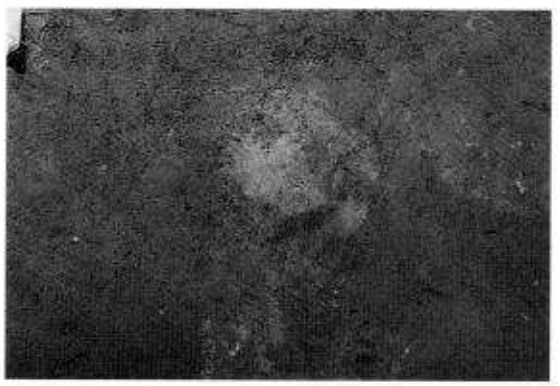
SD06　検出状況



SJ01　検出状況



SJ01　セクション

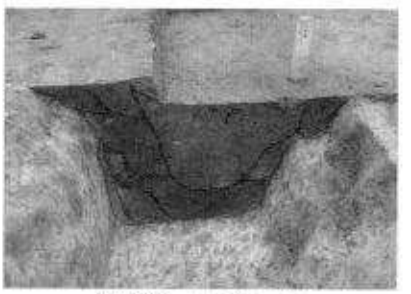


SJ02　検出状況

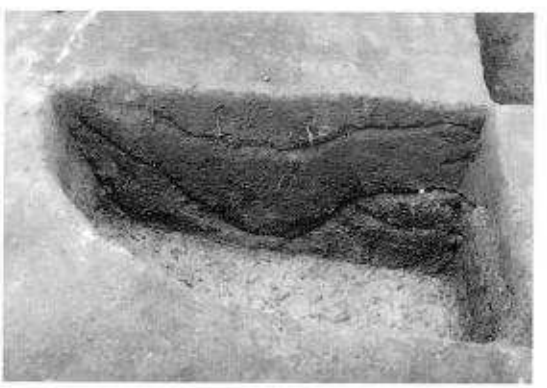
SD06　aセクション

SD06　bセクション

SD06　cセクション

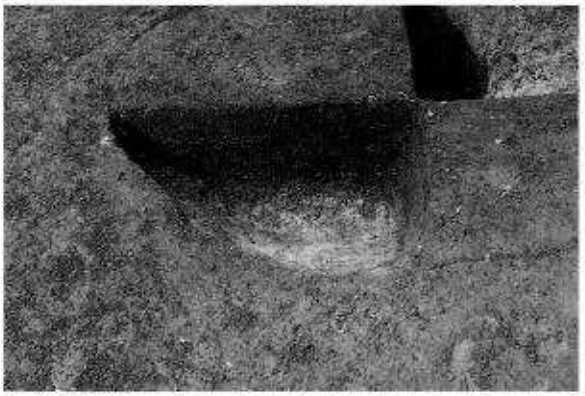


SD06　dセクション

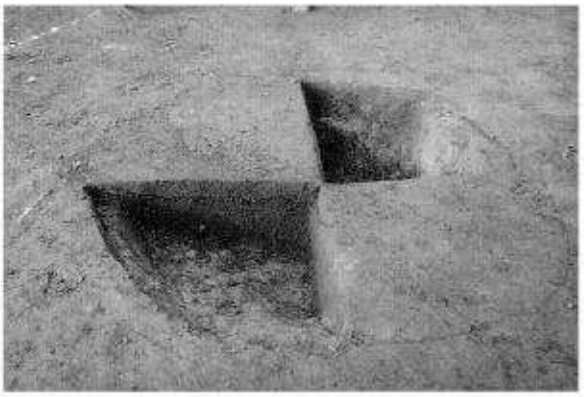


SK01　bセクション

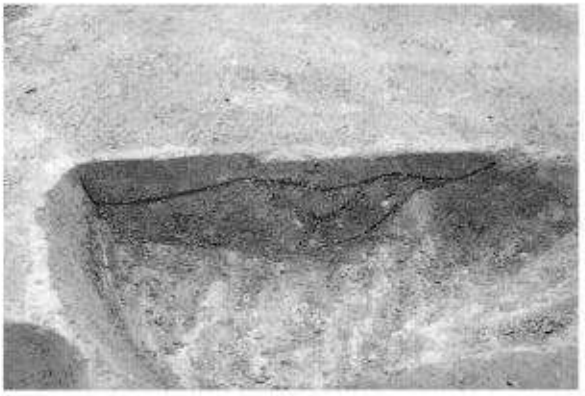
SK10



SK11　bセクション



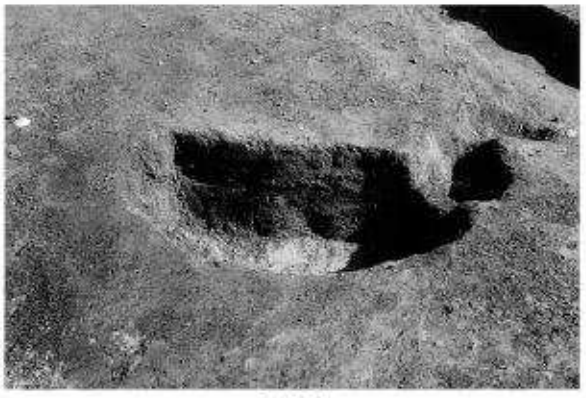
SK14



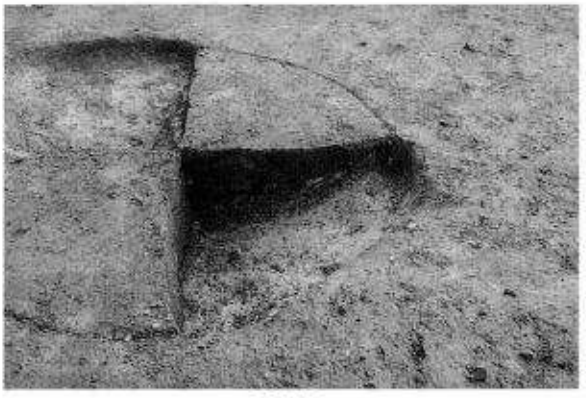
SK19

SK20　aセクション(a'側)

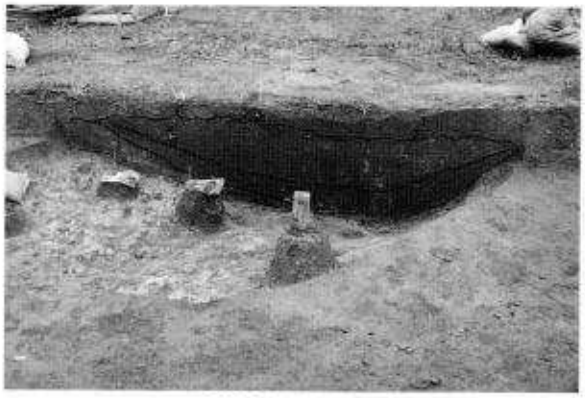
SK20



SK21

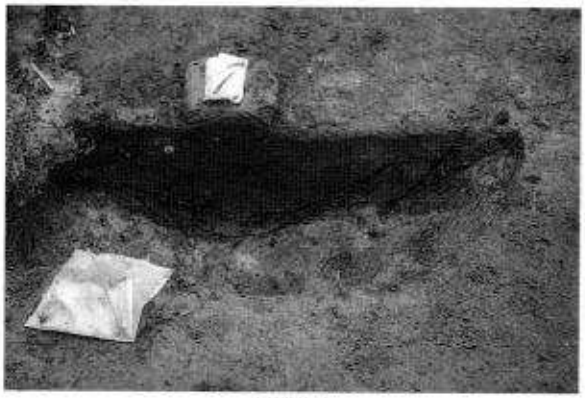


SK22



SK23　セクション

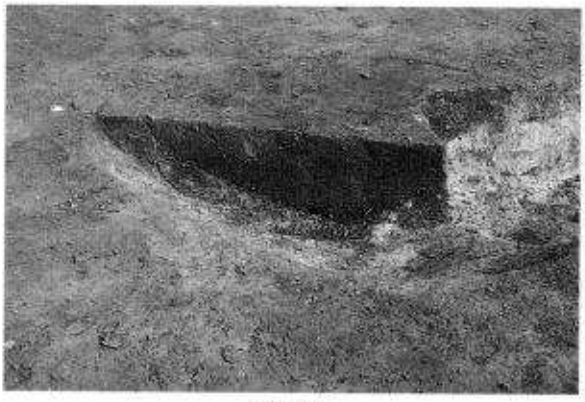
SK23



SK24

SK25

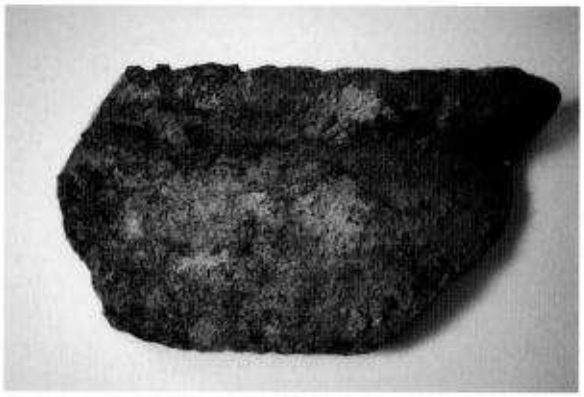
SK26



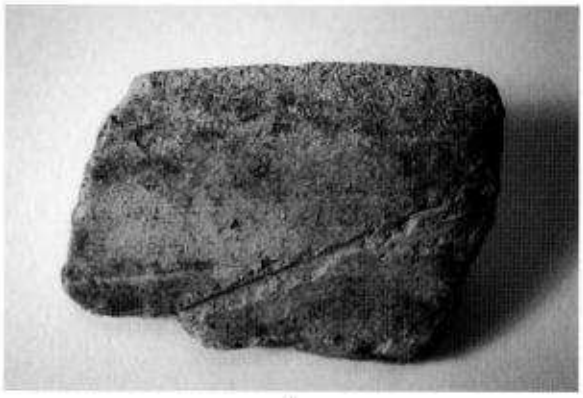
SK27

SK32　遺物検出状況

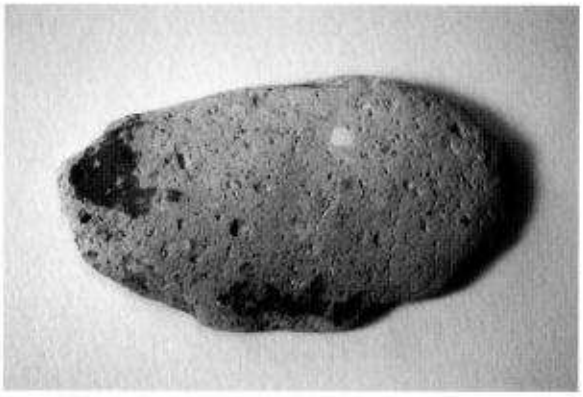
SK33



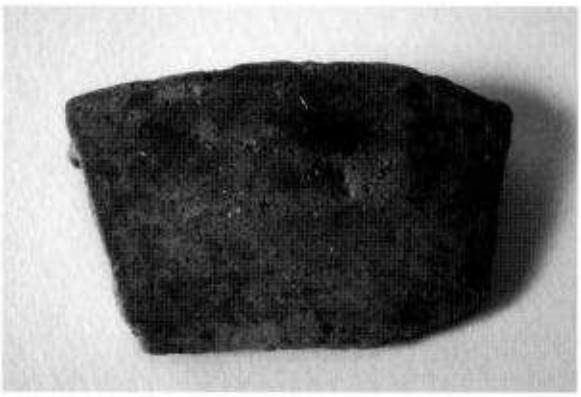
1



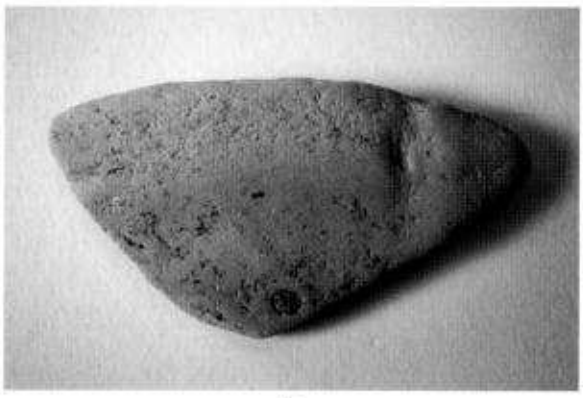
2



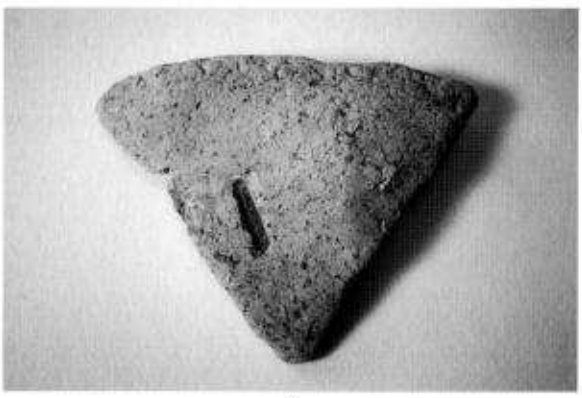
3



4



5

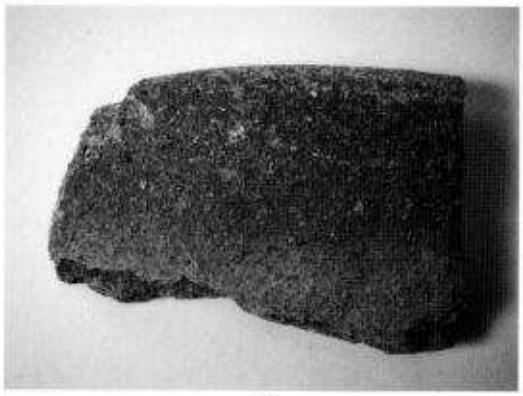


6

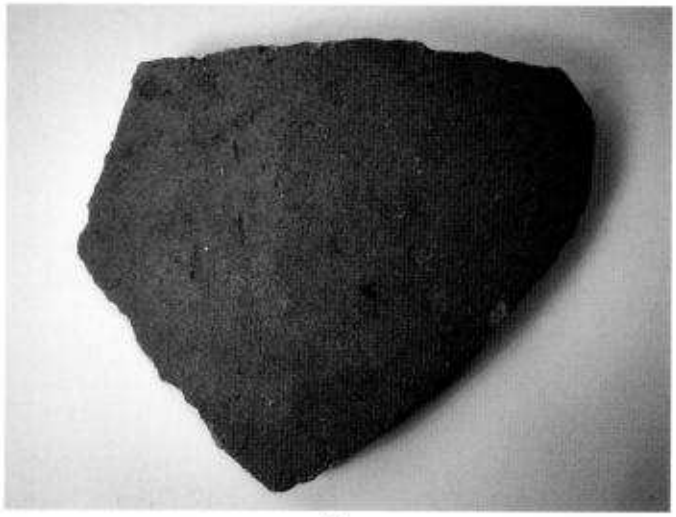
7

8

9



10

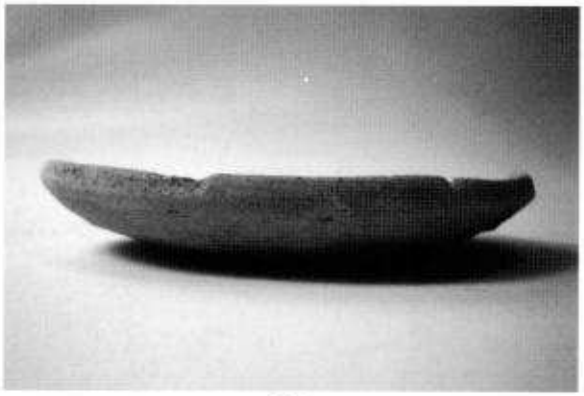


11

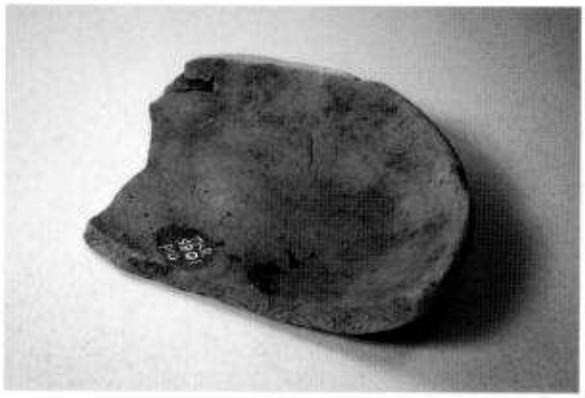
12

13

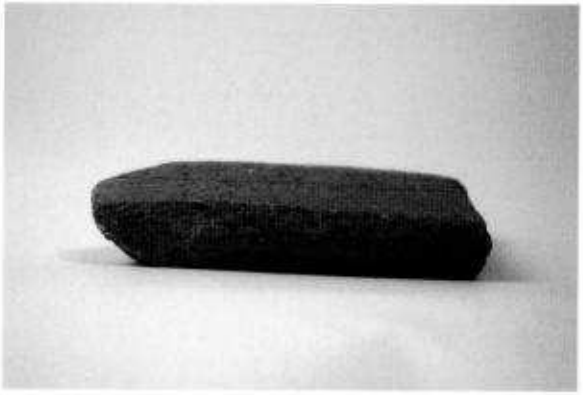
14



15



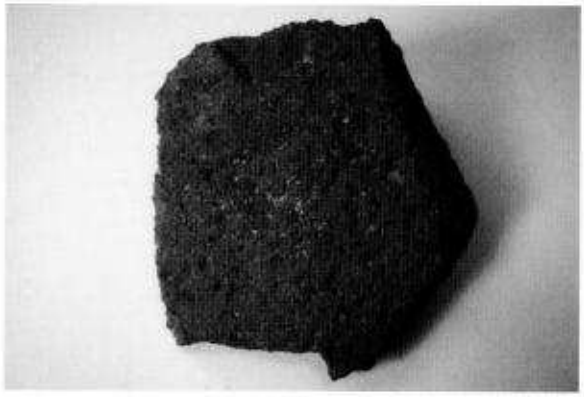
15　上から



16

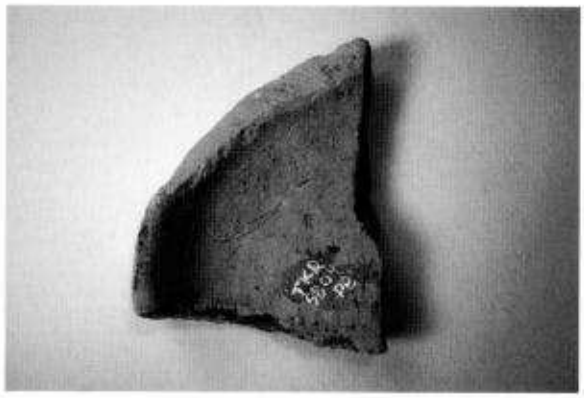
16　上から

17



18

19



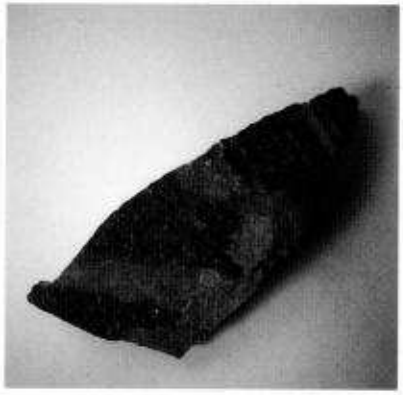
19　上から

20

20　下から

21

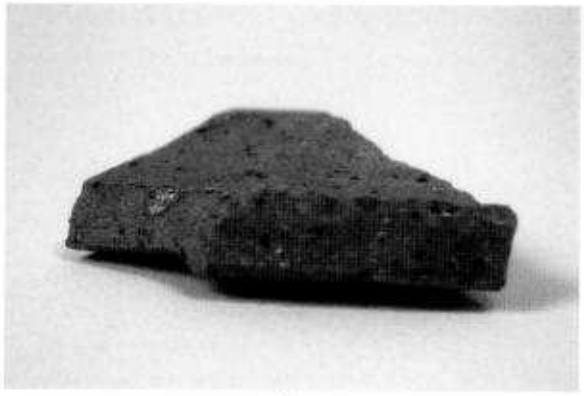
21　側面



22

23

23　側面

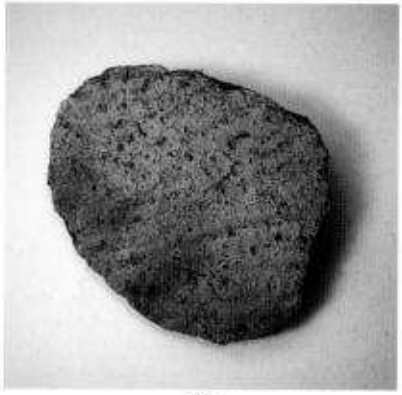


24

24　上から

25　内面

25

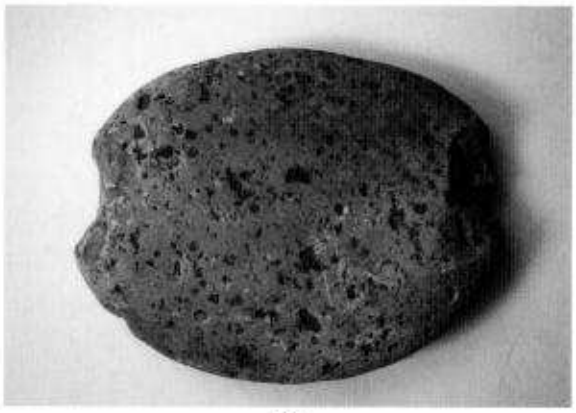


26

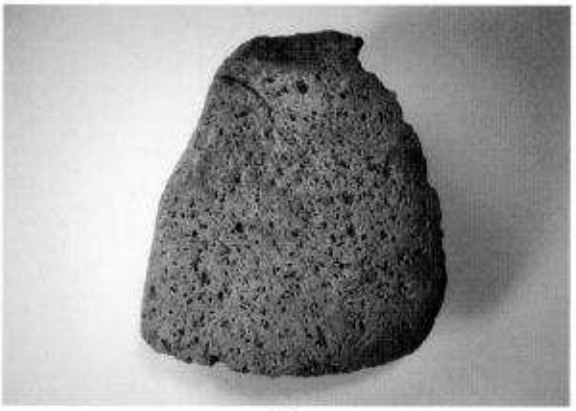
27

27

27



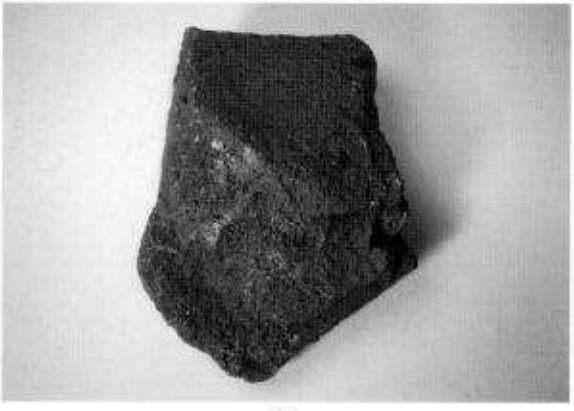
28



30

29

29　側面



31

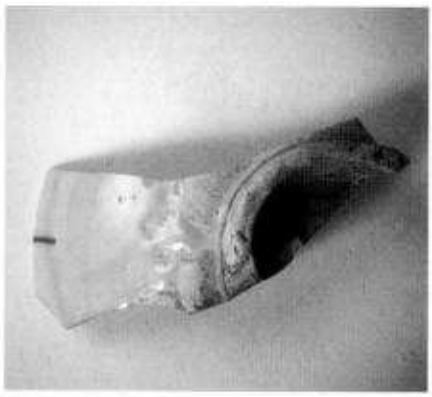
31　裏

32

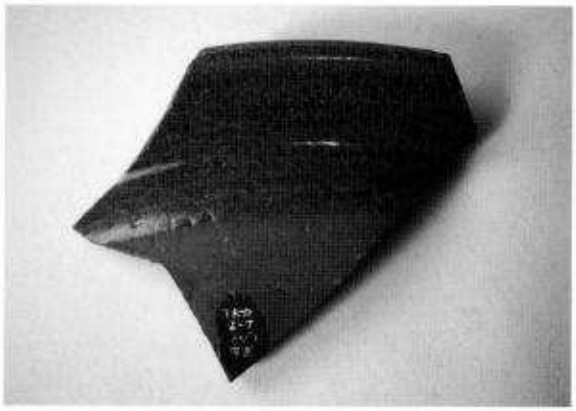
32　側面

33

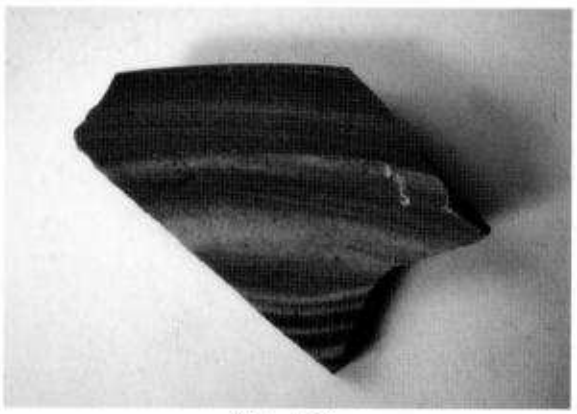
34



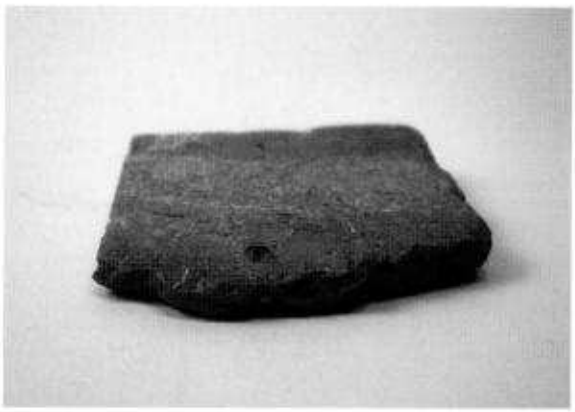
34　下から



36

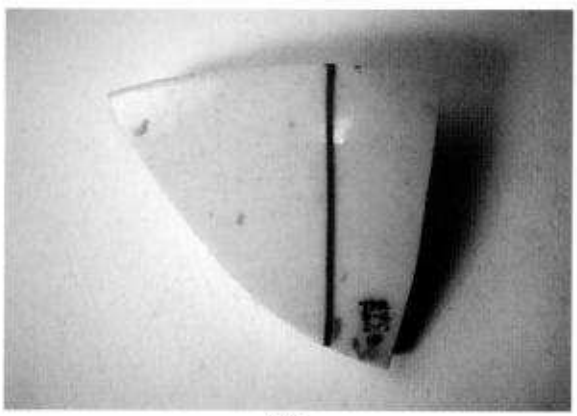


36　内面

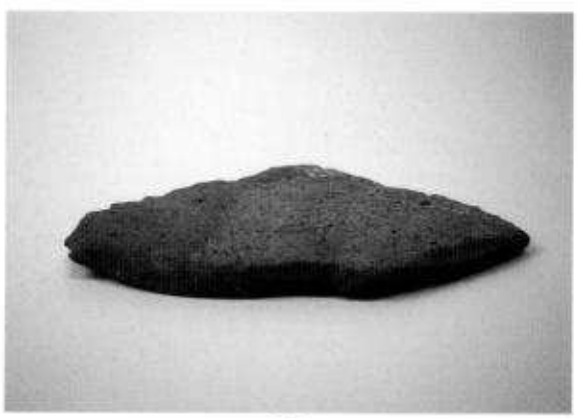


37

37　上から



35

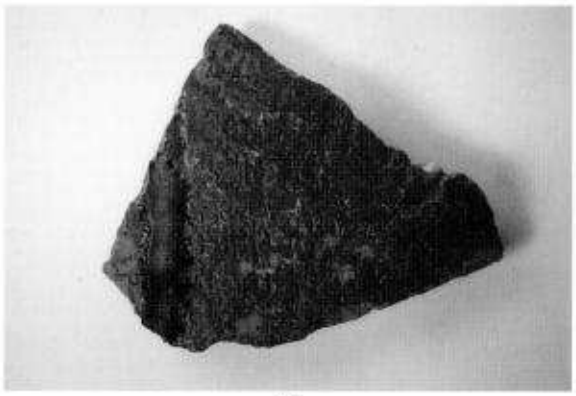


38

39

39　裏

40

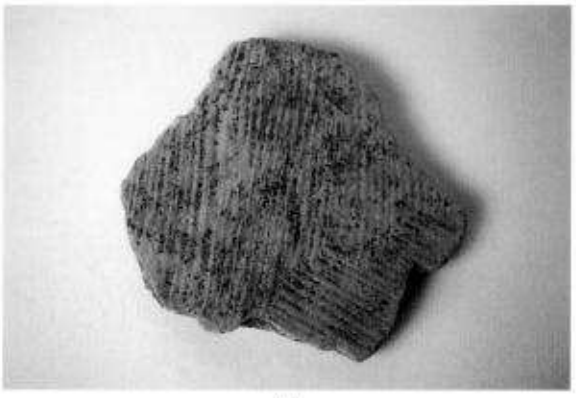


41

42

42　裏

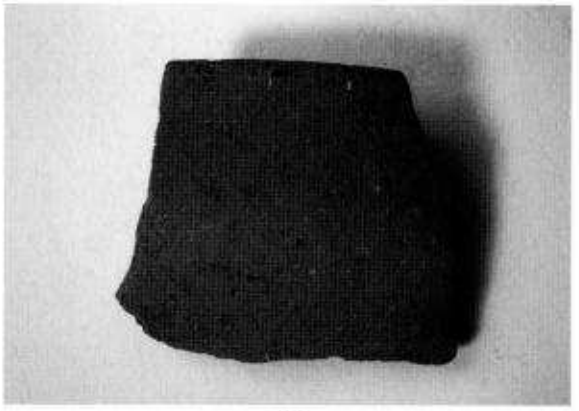
43



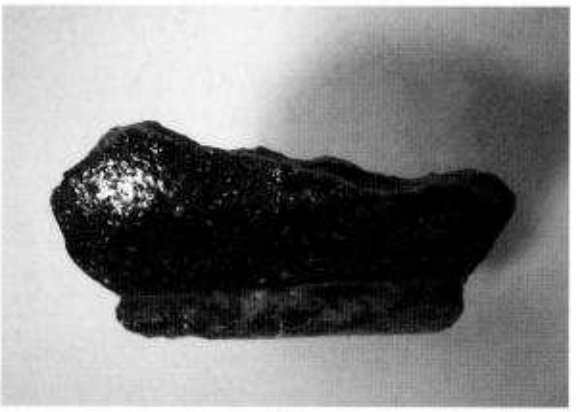
44

45

46



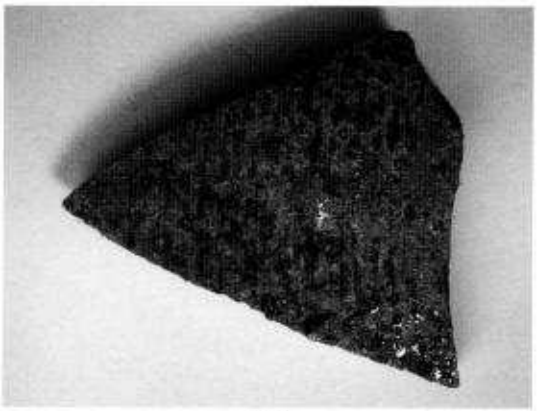
47



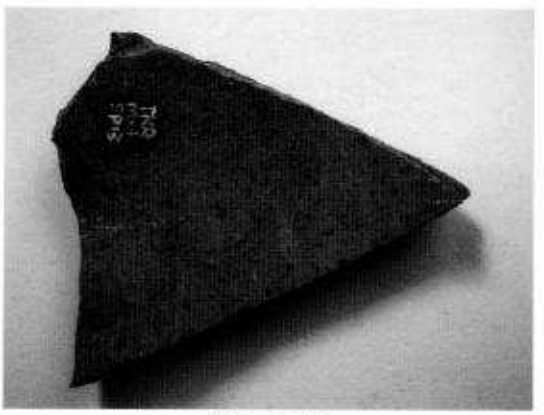
48

49

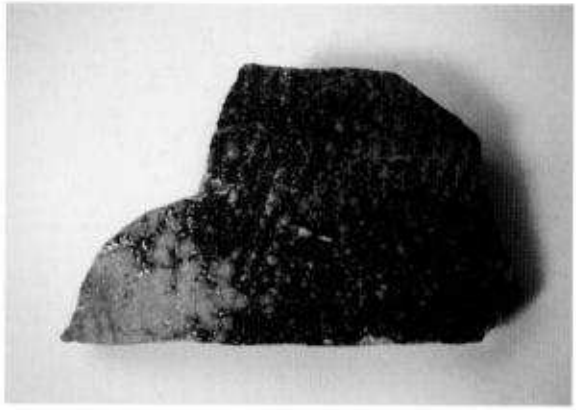
49　下から



50



50　内面

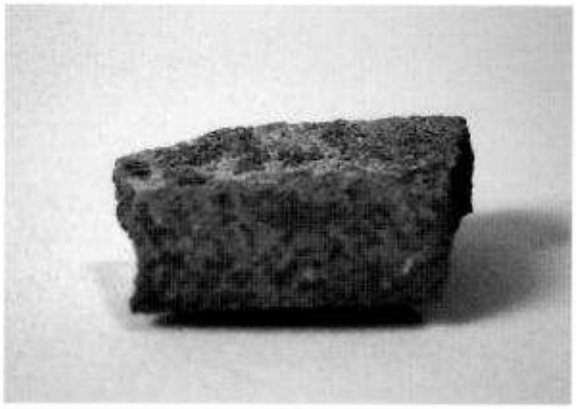


51

52

53

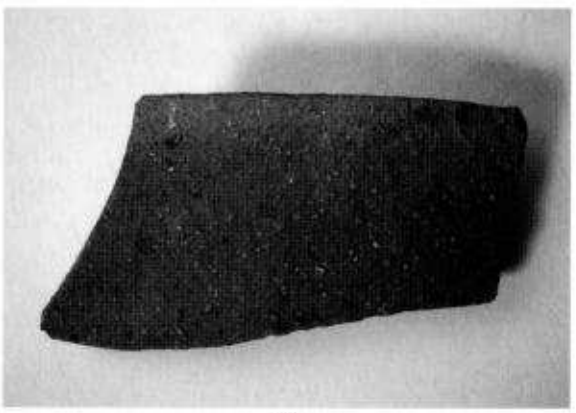
54



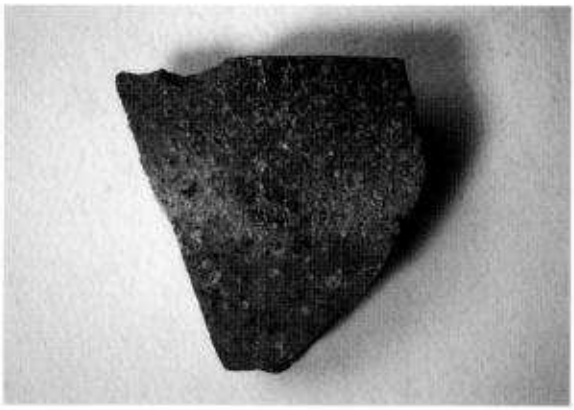
56

56　上から

55

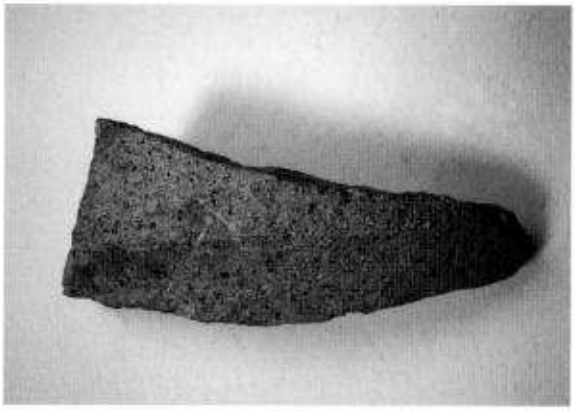


57

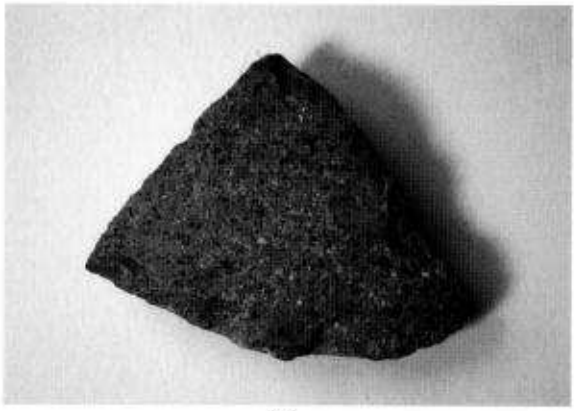


58

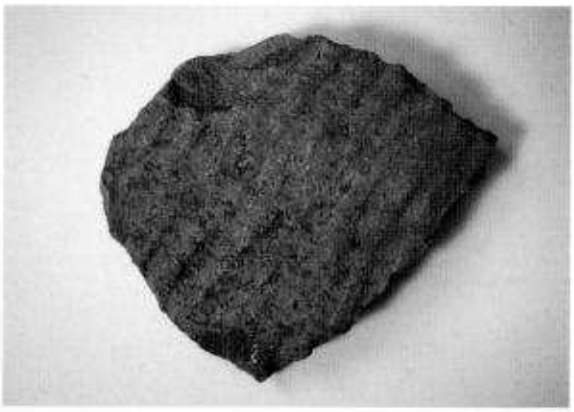
59



60



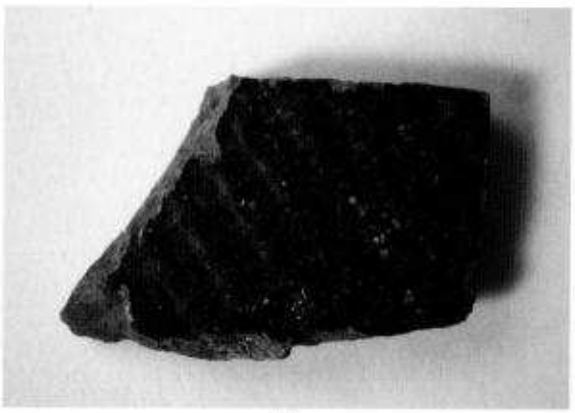
61



62

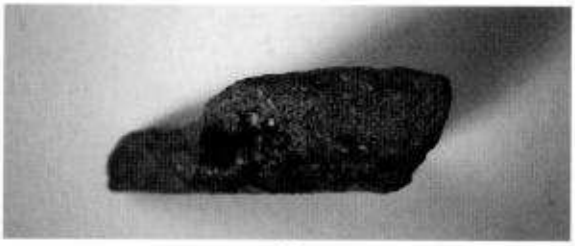
63

64

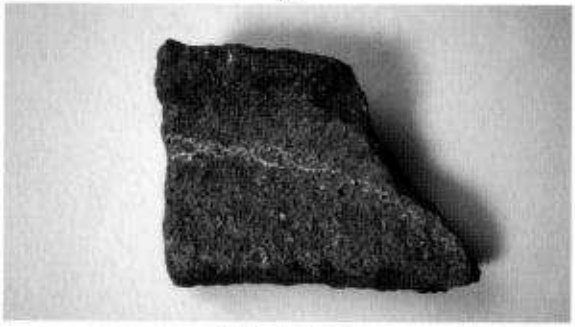


65

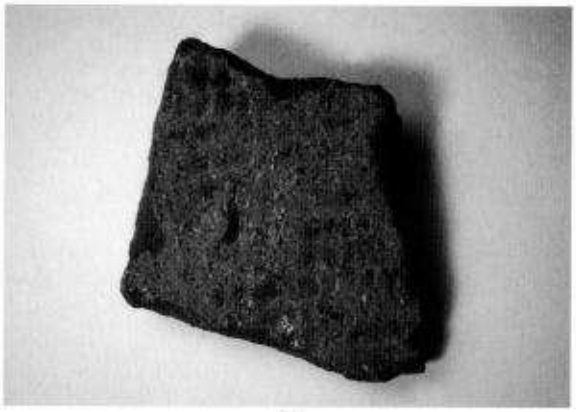
67



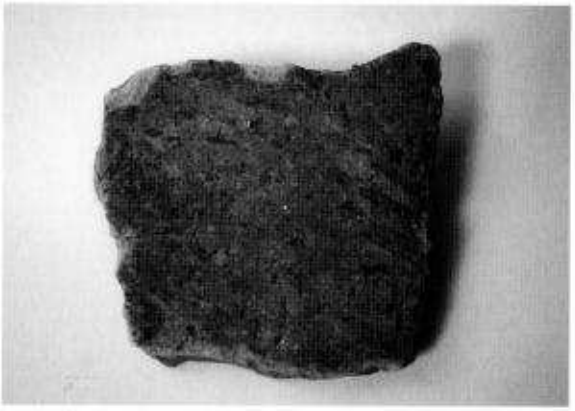
68



68　上から



66



69

70

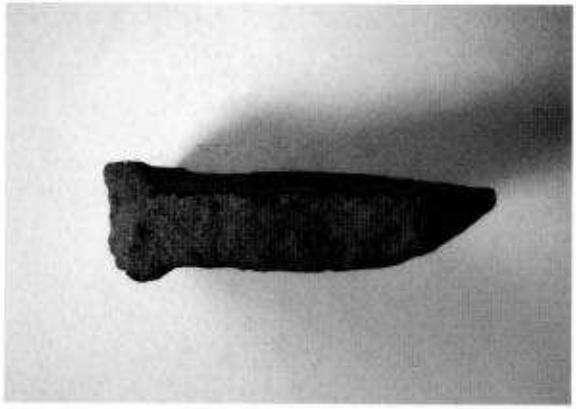
71

71　内面

72

72　裏

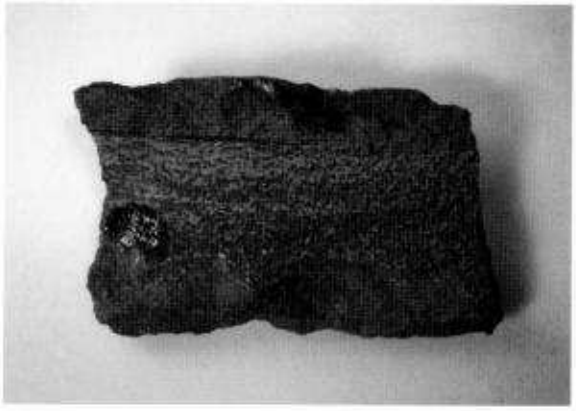
73



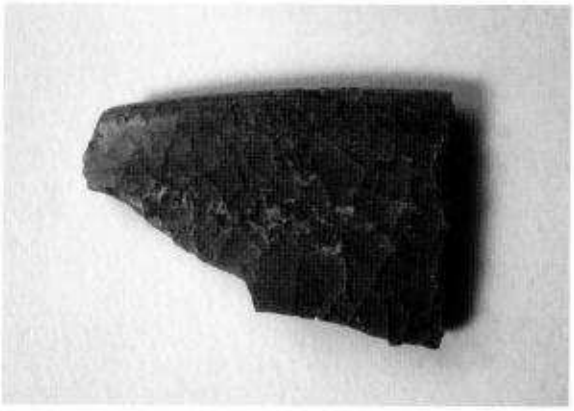
74　側面

74

74　裏



75



76

77

79

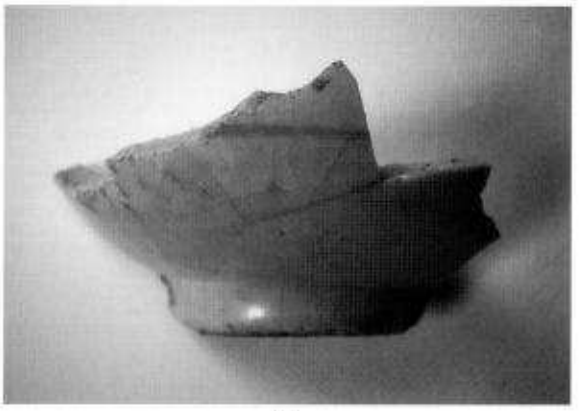
78

78　上から

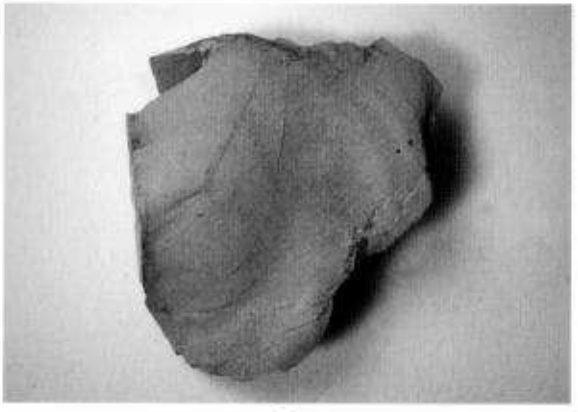
80

80　内面

81



82



83

83　裏

刀何理遺跡

南加賀道路（粟津ルート）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　日　　平成18年3月31日

編集・発行　　石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地　　TEL　0761-22-4111

印　　刷　　鵜川印刷株式会社
石川県小松市河田町丁33番地　　TEL　0761-47-0188㈹